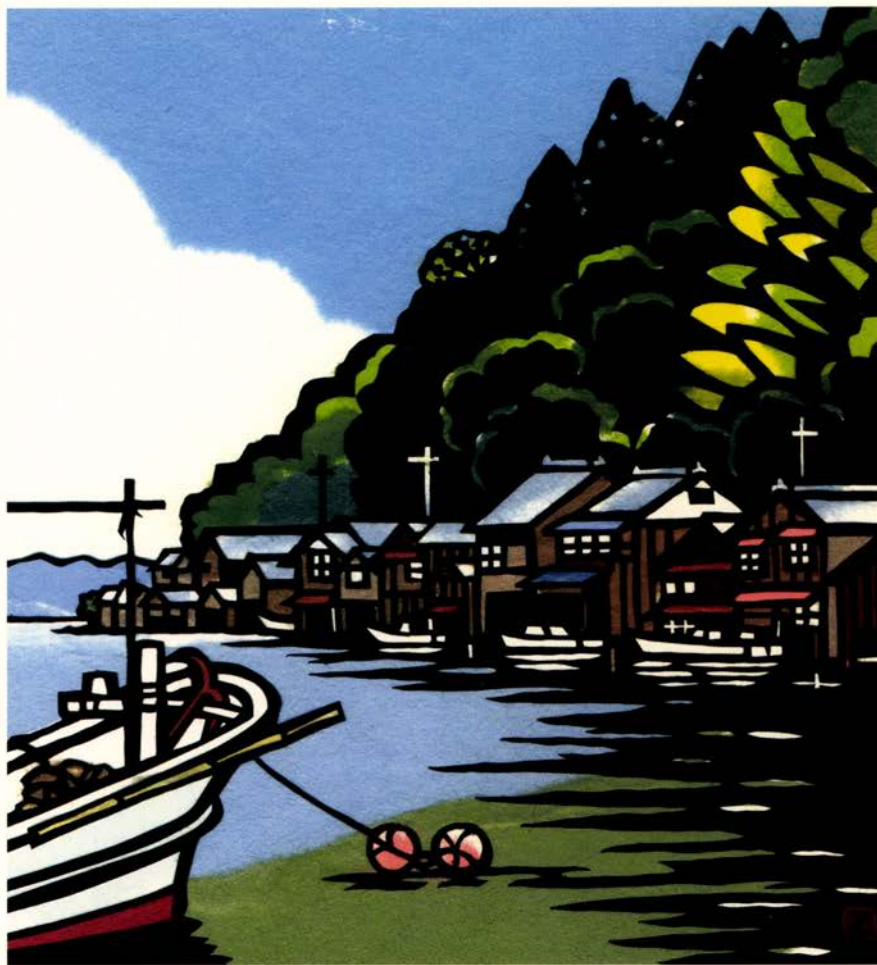


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十四年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇二三号



日川協加盟

No. 1023

八月号

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

路郎賞・川柳塔賞に応募を

小島 蘭 幸

麻生路郎先生ご夫妻の文学碑が、路郎先生のふるさと尾道に建立されて今年で11年になります。7月4日、おのみち川柳会の皆様と一緒に、尾道千光寺文学公園にある比翼の句碑を訪ねることが出来ました。句碑の前の一角に、短冊に一句を添えた七夕の笹を飾り、お酒の好きだった路郎先生にワンカップ11個をお供えました。祈りの中で、私は路郎先生のおふるさと尾道の皆様と一緒に参拝出来たことを心から喜びました。そして思わず「多勢の人に来ていただいて路郎先生もぎつと喜んでおられることでしょう」と尾道ケーブルテレビの記者にささやいたのでした。

おれに似よ俺に似るなと子をおもい
飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ
路郎 葭乃

さて今年も、路郎賞・川柳塔賞の応募の時期になりました。七月号表紙裏の記事を見て準備万端整え

ておられる方も多いことでしょう。まだの方は今からでも充分間に合いますので、是非応募して頂きたいと願います。

川柳塔・水煙抄の一年間の入選句の中から応募句、五句を選ぶ。迷って迷って選んだ作品はきつと大きな輝きを放つことでしょう。自選の力もアップします。五句を選ぶ時間は至福のひとつなのです。

二賞選考規定が今年から少し変わりましたので、お知らせ致します。

◎第一次選者は、各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

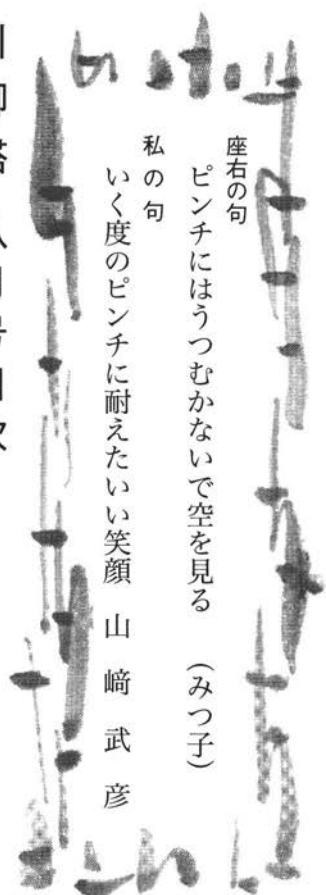
※昨年までは各賞20編選出でしたので5編少なくなりました。

◎第二次選者は、主幹・理事長と各地方から11名、計13名。

※昨年までは、計25名でしたので12名減となりました。

詳細は本号104頁に掲載してあります。再度確認をお願い致します。

第一次選考会は、8月12日、本社事務所にて開催します。本号の刷り込用紙で8月10日必着で本社宛郵送よろしくお願い致します。



座右の句

ピンチにはうつむかないで空を見る (みつ子)

私の句

いく度のピンチに耐えたいい笑顔 山崎 武彦

川柳塔 八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「伊根」

■巻頭言 路郎賞・川柳塔賞に応募を	小島 蘭幸	(1)
長いお付き合いです	清 博美	(2)
川柳塔(同人吟)	小島 蘭幸	(4)
川柳塔の川柳讃歌 ⁹²	木津川 計	(48)
新川柳鑑賞 ⁶	麻生 路郎	(49)
自選集		(50)
温故知新		(53)
水煙抄	川上 大輪	(54)
中島生々庵句抄		(74)
英語 de Senryu ⁸	吉村 侑久代	(75)
俳風柳多留——篇研究 84		(76)
愛染帖	新家 完司	(78)
檸檬抄「ダイナミック」	池 森子	(82)
全日本川柳徳島大会結果	福士 慕情	(85)
一路集(「うねる」)	伊藤 玲子	(86)
雲	加藤 茶人	(86)

長いお付き合いです

清 博美

貴誌に初めて登場させていただいたのは、昭和三十八年四月、小生二十八歳のときだった。まだ、「川柳雑誌」の時代である。小生はといえば、駆け出しも駆け出し、まだ右も左も分からない状態だった。そんな時、師の岡田甫先生から、川柳句集「川傍柳」の紹介文を書いて、「川柳雑誌」に送るようにとの指示を戴いた。と同時に、輪講している「川傍柳」を整理し、原稿として送るようにとの指示でもあった。これが貴社とのお付き合いの始まりだった。そして、暫くすると誌名が「川柳塔」になった。その後主幹になられた橘高薫風さんには、特別なお世話になり、また可愛がっていただいたものである。

小生も今年五月で七十八歳になる。数えるとなんと五十年のお付き合いになる勘定だが、この五十年の間、毎号欠かさず原稿を送り続け、掲載していただいたことになる。我々のささやかな古川柳研究

一路集「なるほど」	根岸方子選	(87)
初歩教室「抜く」	鈴木公弘	(88)
秀句鑑賞「同人吟」	山本希久子	(90)
水煙抄	政岡未延子	(92)
せんりゅう飛行船 ²⁰⁾	新家完司	(93)
『麻生路郎読本』余滴 ¹⁰⁾	栗原道夫	(94)
■句集紹介 川柳『ふめじ』富田蘭水著	竹治ちかし	(98)
■句集鑑賞『イヤリング』山本希久子著	木本朱夏	(99)
民族の詩 ⁽³⁾	三好專平	(100)
本所深川を歩く ^(七)	松永浩一	(101)
路郎賞・川柳塔賞 選考規定		(102)
七月本社句会		(104)
各地柳壇(佳句地十選／玉置当代)		(108)
八月各地句会案内		(122)
柳界展望		(124)
■編集後記(ひとこと／井上桂作)	朱夏・いさお	(130)

座右の句

幸福の辛辛抱の辛に似て

(乱魚)

私の句

初句会席題抜けて抜けられず

佐藤忠昭

に對し、その発表の場を提供し続けて下さった貴誌には感謝のほかはない。

さて、明治・大正・昭和初期の川柳雑誌には、当たり前のように古川柳に関する記事が掲載されていたものであった。が、戦後創刊された沢山の川柳誌に、古川柳の記事がパツタリとなくなつてしまつた。その原因の一つとしては、戦後、新しく川柳に携わろうとした多くの方々、古川柳に関する知識がまつたくなかつたからだと推測している。現代川柳誌だから、徴のはえた古川柳は関係ないといわれればそれまでだが、現代川柳も、実は江戸時代初期から始まつた伝統文芸の一つなのである。現代川柳関係者たるもの、そのルーツである古川柳を教養として身に付けておくぐらいの事は必要であらうと思う。もつとも簡単に入手できる岩波文庫の『俳風柳多留』全五冊を通讀しても罰はあたるまい。

昨今では、数多い川柳誌の中で「川柳塔」だけが古川柳記事を掲載している唯一の雑誌になつてしまつた。その点でも、「川柳塔」は今後ますます貴重な存在になること間違いないと確信している。



小島蘭幸選

篠山市 酒井真由

街路樹も私も雨で生きかえる
ポスターの美女が名画座へと誘う
夏至の雨自動ピアノのノクターン
いうてみよ私のどこがもの足りぬ
原点に戻ろう旅をしませんか
船の旅夫といつものように居る

高知市 小川てるみ

夢の中ふるさと行きの汽車が出る
両手からあふれる愛を受けた恩
どうしよう腑抜けのままで喪が明ける
花のある庭にやさしい風が吹く
じつくりと聞いてあげよう正座する
少しずつ亡母の存在感が増す

藤井寺市 鴨谷瑠美子

花よりもきれいに笑みをかえされた
汗かいていたのは歯医者さんだった
鳥になる話わたしも乗りましょう

お慕いしております遠い人だけに
休まずに続けた成果見てもらおう
ラブソング聞いて元気をとりもどす

和歌山市 柏原夕胡

ごめんねと言えて明日は晴れマーク
恋ひとつ桜の下に埋めました
かさぶたを剥がし何度も懺悔する
ぼわーんと浮いて心を休ませる
死ねるほど人を愛したことがない
ワンランク上を目指している蛙

和歌山市 木本朱夏

行く春の老女の部屋のぬいぐるみ
こっそりと雨季が近づく盆の窪
ぬいぐるみのひとつふたつを抱くさむさ
紫陽花の向こうへ消えたしろい猫
来る来ない紫陽花すでに色を変え
子の居ないいもうとが呼ぶ子猫の名

和歌山市 牛尾 緑 良

生きようと決めた日からの悩みごと
梶子の白 後悔を内に秘め

懇ろに靴を弔い以後自由

五十円出した蓬で春を嗅ぐ

命日に母は忘れず居てくれる

青い実へ青い私をひた隠す

堺市 栗原 道 夫

抽斗の中も確かに梅雨の入り

鉄板を踏む音園児の列続く

棒を呑むように唾呑むかくれんぼ

食べさしのお菓子と読みさしの文庫

週末の校舎の壁のやわらかさ

川沿いを両手の荷物心地よし

松山市 高橋 宏 臣

プラスマイナス白いページと戯れる

尖らせた口へ静かに雨の降る

過去形の響きに怯ゆ夏の闇

雲ひとつ抱いて斜に立っている

美しい影絵に帰りたい女

爛熟や地べたにギャルの足白し

橿原市 居谷 真理子

話してはならぬドラマが私にも

微笑みを忘れた人の高笑い

さようなら心底憎むその前に

臆病な男だ考えてばかり

この世から男が一人出て行つた

黙り通した柩が重い

大阪市 谷口 義

太陽と真剣勝負してる夏

お賽銭貰ったことはありません

ゆつくりとしてるが丁寧ではない

何も分かつていなかったことだけわかり

エスカレーターの横の鏡が気に入らぬ

感性は磨くどころか鬆が入り

藤井寺市 太田 扶美代

幸福の真ん中辺で引き下がる

騙されてあげる悔しがつてみせる

コーヒーの渦よわたしの挫折感

似合うよと言われた服が似合わない

飛行雲過ぎてしまった事ばかり

燕が巣守つてやらねばと思う

鳥取市 岸本 宏 章

原料費タダの砂像が金稼ぐ

老いふたり大きな声に慣らされる

入道雲亡父が叱っているようだ

調子いいはなしの詰めが甘くなる

赤ちゃんの泣き声聞くとほつとする

歳よりも若く見られるのも癪だ

紀の川市 宇野 幹子

タイムカプセルから転げ出る夢の数
自画像にはみ出している笑い皺
働いた手だ温かいとおしい
非常袋の中で迂闊が眠りこけ
少年も玉子も脆い殻を持つ
整理ダンスまたかき混せて亡母を恋う

池田市 栗田 久子

風化せぬ記憶に玉音の響き
誰だろうびつくり箱をあけたのは
背の汗も落ち着きました心太
夜はひやむぎ少し元気になれそうだ
鉢植えのゴーヤが涼しげに揺れる
鬼灯が色づき御先祖を偲ぶ

香芝市 大内 朝子

風薫る季節へ偲ぶ師の笑顔
纏れ合う蝶を見ている独りぼち
思いつ切り笑うと毒が抜けてゆく
少子化へ妊婦を見るとほととする
地上から身近なひとが消えてゆく
反戦をムンクのように叫ぶ蟬

吹田市 山本 希久子

雨に憩う今日の命に感謝して
思い出に蔦這い母校消えました
歳月がくれた許すという返事

後戻りできぬがせめて立ち止まる

転び方だんだんうまくなる余生
笑顔という隠し味あり妻の膳

出雲市 竹治 ちかし

悟りなどまだなく天と地の間
本物に触れると見えてくる事実
幸せの朝目覚めれば我が家なり
人間の思いは聞いてくれぬ核
都合良い時は日の丸振っている
村興しいきなり降ってきた神話

堰原市 安土 理恵

おから炒る泣いていたって仕方ない
古刹めぐり自然に肩が寄ってくる
わたしかて好きで古びたわけでない
狂ってても平気女の腕時計
止まること知らず振子の無表情
マイセンに盛る生煮えの暮し

大阪市 津守 なぎさ

毎日がやすみ韓流にはまり込む
新緑に癒されたくてバスツアー
いつか行くツアアのチラシ溜めている
超元氣ゴーヤの蔓を見習おう
シソジュース待ってる友の笑顔良し
片時も離さぬ姑の旅ブック

鳥取市 倉益一 瑤

運勢欄チャンスが来たと書いてある

ワッショイショイ騒いだ後の淋しさよ

種あかし言わないままに母は逝き

きれいになった故郷の川が歌わない

夕暮れの波打ち際に立つ孤独

前頭葉に霧がかかってきたらしい

鳥取市 奥谷彩子

この世も砂漠人の情けをオアシスに

目をつむる父母の香のする風の丘

透け透けルックたおやかだった娘の変身

マニフェスト大風呂敷がためない

雪月花父のほっこりにごり酒

精一杯生きてた父の背に学ぶ

大阪市 古今堂 蕉子

厚顔無恥 私少々その気あり

食べて寝て笑って不足ありません

儲かると聞けば落ちる友が居る

ぶらぶらが飯はまだかと言っている

一人一個 母の大きな握り飯

成長の早さと心育つ日と

西宮市 片山 忠

卑下ばかりしても尊敬されません

弔問の作法ぐらいいは覚えとく

腕白に育ち運動会の華

並ぶのは都会育ちは苦にならぬ
胃カメラの上手い医者なら知っている
あくせくとしないと私見失う

鳥取市 吉田 孔美子

十年目 畑漸く意のままに

離すのが惜しい粒揃いの子芋

こぼれ種のハブ茶に畑仕切らせる

ひたむきに遊ぶブチ黄金時代

ときめいて尊いものとくらしでる

あの方がこんなに寛いでくれた

枚方市 海老池 洋

平成のバベルの塔よスカイツリー

夕立に待つということ教えられ

タンポポの種の見事な親離れ

カレンダーに油断するなと叱られる

人生に背伸びする日と屈む日と

時は流れて愛憎の川浅くなる

尼崎市 春城 年代

菖蒲湯や女盛りはいつの頃

影法師に見守られてる気配して

忘れたで済ませてしまう喜怒哀楽

調理器具揃えてそぐわないレシピ

放置自転車おぼろ夜に雫する

高齢化さてゆつくりと参ろうぞ

三田市 堀 正和

丁度いい白内障の見え具合

後期とやギックリ腰も連れてくる

ご祝儀の談合もする電話口

孫までがちゃんと知ってる年金日

矢印の通りに行けば混んでいた

反省はケツネうどんを食べてから

三田市 北野 哲男

にが瓜の苗だけ買っていく車

帰省して父のゴム長一回り

末っ子がダリアになって初帰省

昼寝の児仏間へ置いて振り返る

西瓜切る四人の孫の目の中で

さわやかな茶漬けの音で昼が済む

岸和田市 岩 佐 ダン吉

惑うこと何にも無いと言うてやる

包囲され僕はやる気になつている

寒風が吹き荒れている足下よ

安全と言うから余計恐くなる

運よりも汗を味方に歩きたい

腹を決め逃げ道塞ぐことにする

西予市 黒田 茂代

長生きの家系当面慌てない

階段があるエレベーター使わない

化粧が億劫になつたら齢ですね

わたしの送り日にはお経よりシューベルト

三回忌遺族から来た師の遺稿

置き忘れの魂探してる日暮れ

枚方市 二宮 紫鳳

平和への祈りで刻む花時計

つなぐ手の絆広げてボランティア

春風にワルツのリズム芽吹き出す

割り勘が絆強める趣味仲間

句をひねる心潤う雨の午後

ほどほどのバランス保ち生き上手

弘前市 須郷 井蛙

切り抜きをしたがそのまま山にする

半分も読まないうちに次号来る

三ツ星の味に負けない妻の腕

残業があるから会社まだ続く

コンビニの不夜城節電策がない

孫達のオアシス爺と婆がいる

交野市 森本 弘風

父と見た花火のような焼夷弾

玉音を聞いたあの日も暑かった

焼トタン集めて雨を凌ぐ家

焼け落ちた校舎の跡に芋畑

今日からは平和と知った暑い夏

負けるはず進駐軍の乗るジープ

熊本県 高野宵草

空涙ですねと遺影笑みかける
ほどほどに我欲満たして生きてゆく

平和談ふと靖国の兄憶う

染めてない証拠に白髪二十本

スピーチを済ませワインが美味くなる

札幌市 小沢淳

アドリブがびたりと決まり茶がうまい
命とや一家に一つ蠅たたき

今日もまた同じ台詞の愚痴を聞く

温もりの言葉一つで雨が晴れ

悔しさがある内僕も進歩する

札幌市 三浦強一

ブレーキを踏み踏み下る八十路坂

水菜銚子一本ある夕餉

良友も悪友もいて今の僕

天下国家よりもわが家の台所

断捨離を終えたわが家の風通し

砂川市 大橋政良

踏絵踏む図太い僕にまだなれぬ

青畳帰省の窓を開け放つ

ロボットを造って首を締められる

カタカナ語並べて親を煙に巻き

口紅の色を気にするお婆さん

黒石市 相馬一花

百花繚乱美女が溢れるコンテス

蛇蝎より忌み嫌われる天の邪鬼

フカヒレは大好きサメ肌大嫌い

巧いとも下手とも言わず師は唸る

貫禄がなくて入れぬ共同湯

平川市 小寺花峯

陰口に胡椒まぶして笑い合う
傷口を大きくしてる午後の雨

天気予報電車に傘が溢れだす

人間失格本を伏せては軒搔く

罪という酒と煙草を愛してる

弘前市 高瀬霜石

若者がどんどこどんと売れ残る

空気がれいな町にクルマは必需品

病名の数をひーふーつい競う

お葬式知ってる人の多いこと

じんわりじわり軍歌カラオケから消える

弘前市 福士慕情

生かされて飽きずに米を研いでいる

朝刊を開く眉間に皺が寄る

まま事のように仏膳できあがる

一本道歩いてからの迷い道

ハグをして妻の認知を和らげる

弘前市 稲見則彦

自画像が歪んだままでピカソ級

石垣の小石欠かさぬ自尊心

懇親会あるから会議すんなりと

前ぶれもないままに來た魔女でした

赤い糸無理矢理解く影ひとつ

弘前市 高橋洋子

不意に來る段取りにない長電話

歳月もおくすりでした仲直り

並という尺度の中でこの余生

ご近所の友と助っ人する和み

あの頃に戻って見たい大家族

弘前市 今 愁女

日本中に見守られてる朱鷺のひな

アラスカの海からボール里帰り

引力ですごいな地球丸いまま

紫陽花が好きでたまらぬ蝸牛

瓦礫にも紋白蝶が飛んでいる

弘前市 岡本花匠

百歳の夢へ笑いのOB会

武者の眼のころ読んでたねぶた馬鹿

墓前にて経読むきずな有難う

新茶酌み思い出浸る共白髪

物忘れ笑いの種にこそばゆい

青森県 松山芳生

日の丸の真ん中辺に浮く汚点

まだ夢がある欲があるバズル解く

ため息は大ジョッキの中に消え

よろけるのが下手なボクは酒のまず

ホラ吹き部の屋に溺れる息ばかり

さいたま市 星野育子

道草をしたくなる頃夏休み

窓磨き床を磨けばダイエツト

背伸びした今日のボタンをかけ違う

平手より痛いひと言胸を突く

写経をしても心の揺れ止まらず

横浜市 菊地政勝

明日という味方に頼り生きている

家計簿がまねき猫から見離され

耐震の指導受けても棲みつづけ

閉店の本屋に町の文化消え

ミシュランも妻の味には適うまい

横浜市 小野 句多留

赤紙の如きの後期高齢状

湯治場の無為ストレス溜めてくる

眠くなる老いにも五月病はある

総入歯口の粗相は許されよ

視界ゼロスカイツリーの負け惜しみ

川崎市 三浦 きぬ

枯れるほど恋も炎が付き易い
髪型が素敵中味はどんな人
川柳塔東京タワーに負けるなよ
私にも耳打ちしてよ刺激欲し
あの世にも国境線があるのかな

富山市 島 ひかる

お宝も結婚したら人になり
オーイお茶家で威張っている宝
太陽と土を宝にして遊び
鑑定が恐くて家宝まだ出せぬ
岩石もだんだん丸くなる宝

静岡県 蘭田 漠 杏

常套語うまく使って生きている
蚊の好きなO型でまた血を吸われ
下駄履きが高層ビルを響かせる
逆効果ほつたらかしの子が伸びる
一切は妻の指図の停年後

可見市 板山 まみ子

風を読む技がないから平社員
あの頃の闘士だそうな静かな眼
無さそうな事まだ出てきそうこの日本
この世とは思えぬ龍のバイオリン
ヒョウ柄の女性がない浪速みち

大山市 吉田 幸子

この歳で母の痛みをやつと知り
旅慣れているのは軽いカバンだけ
アクセスはうなぎのぼりの朱鷺の雛
暗雲をはねのけ治癒の足さばき
旅行日に向かう体調整える

大山市 金子 美千代

機械化に慣れねば電車にも乗れぬ
チャームポイントどれも笑っている写真
笹ゆりの咲いている場所は内緒です
脳ドック異状なかった物忘れ
年金の粹エイヤツと超える旅

大山市 関本 かつ子

湯呑まで素敵新茶のいい香り
初生りを供えた後はきゅうり揉み
身の丈に合った話は慎ましい
読み終えた本を抜け出すのに三日
お仕事で微妙に違う帯の位置

愛知県 早川 遡行

簡単な文字が書けなくなつて老い
安かつたのはいいけれど使い道
好きなものの医者はダメだというビール
新鮮さ産地直送なんだつて
地図でしか行けなくなつた山の旅

京都市 高島啓子

雑草の根から崩れていくのです
勲章にするユーモアのある渾名
アルデンテの男と葛切り食べている
焦点を合わせたぐつていく記憶
一晚寝ればひきずらない男

京都市 坪井孝一

スローライフ余生に生かす処世術
オルガンのキーが昔を呼んでいる
意見など到底違う夫婦仲
おーいはーい素直な妻に身構える
ふる里の青い心は残しとく

京都市 榊本宏子

ペーパーナイフ程度で気楽だけの人
毎日がこれでいいのか女地図
箱の中へ入る覚悟はまだつかぬ
笑い声聞いてみたいな布袋さん
朝一番今日の予定を書くチラシ

京都市 西村益子

市川団子夢のある声大歌舞伎
紫陽花が梅雨の匂を連れて来る
老夫婦会話いつしか大声に
生き方もあれこれ足して老いの地図
同じ苗隣家のトマトもう赤い

京都市 三宅満子

サブリメントやめたら身体軽くなる
天体ショウ早起き夜なべ忙しい
人前に出せない手だが努力賞
突然死あやかりたいと口にせず
ひたむきな青さがまぶし甲子園

京都市 藤井文代

大欠伸単純に幕下ろせます
つまずいたことが引き金出る一步
持論など申しませんと妥協せず
円満な人にも同じ労苦聞く
達者なのは口だけですと動かない

亀岡市 井上森生

幸せと感謝に満ちて喜寿間近
運気をアップ金環食やスカイツリー
本当の祈りは賽銭に気を遣う
残り何年健康寿命を乞い願う
多すぎる願望軸がぶれている

長岡京市 山田葉子

正論で語ると広がる傷口
ワンマンも遠いライバルなつかしむ
遊ぶのも真剣歳を忘れてる
昨日の風に吹かれ十歳若返る
正論ではそう悪いのはわたしです

大阪市 小谷集一

梅雨晴れ間冷や素麺が喉に合う
やめとけと言われてからが美味しい酒
まだ捨てたもんじゃないと自画自賛
若いから言えたんだろうケセラセラ
逆転の発想を練る日向ぼこ

大阪市 川端一步

太陽の楯とはすごいお月さん
騙すより騙されておけ言つた父
万策が尽きたら盤の歩に聞く
持ち物は笑顔ひとつという身軽
そろそろと仮面はずそう喜寿の齡

大阪市 伏見雅明

原発のベールを剥がす知る権利
仲直りきつかけ探り茶を入れる
言い訳をしつつ自分が厭になる
寿命伸び財布の紐を締め直す
若返りあきらめ化粧厚くなる

大阪市 大川桃花

体には良いと薄味押しつける
真綿のようなナースの声に癒される
花束をもらい明日から妻の部下
病名を自分で決めるおばあさん
正座して回診を待つおばあちゃん

大阪市 津村志華子

人は人わたくし流に生きている
和を保つお互いさまの思いやり
了見の狭さ女の波がたつ
清貧のくらしに気取る事もない
天神さんも一寸照れますギャルみこし

大阪市 榎本舞夢

菜の花の真中彼と戯れる
真つ直ぐな菖蒲のような彼が好き
春風をうけて小犬とたわむれる
木蓮の葉影で読書癒される
並木道いつも二人で散歩する

大阪市 山本加お里

杖がわり犬が乗つてる乳母車
逝くまでに金は残さず遊びます
髪染めず年相応で暮らしてる
手を合わせ母の口癖ありがとう
車椅子押してる方は雨に濡れ

大阪市 神夏磯典子

だんだんと医者と仲良くなつてゆく
誕生日真つ赤なバラに負けまいぞ
疲れたらケーキメロンと話する
うっかりとお齡を聞けば百二歳
やつと来た拍子に自信とり戻す

池上清治

近藤正

蓑虫に生きてますかと覗き込む
虫好かんけど丁寧にお辞儀する
どの菌にも虫を飼つてたとは知らず
大学入試子離れしない親を連れ
六十年裁判何してたかと怒鳴りたい

原田すみ子

板東倫子

弱音吐くわたくしもいて身を保つ
露地ものの色艶ちから貰えそう
ここ一番自信と不安乱気流
一年の早さが老いを加速させ
ブレない信念が回りを動かす

吉村一風

奥村五月

すぐ人を信じる癖が直らない
節電へ蚊取線香少し買う
歩け歩けと体を燃やす汗染し
満腹でスーパへゆくこれも知恵
散る覚悟あるから花は美しい

岩崎公誠

佐藤忠昭

ごはん粒ついたシャツ着て歯科眼科
鈴つけた猫ににんげん笑えない
いそいそもわくわくもない喜寿ふたり
懸命に手入れをしても髪退化
限りなき平凡ドラマなにもない

頑張った夕陽がそつと褒めてくれ
夫婦仲ほどよい隙間和の秘訣
朱鷺はいま平和な郷で雛育て
そろそろとやる気を出すか休肝日
火山列島電力資源無尽蔵

究極は停電ですと言う脅し
直筆の手紙に絆秘めてある
捻子まきのボンボン時計遅れ出す
驚も雀も目白も来ない春
電飾が悲しくうるむ街不況

期待する若者達に職が無い
喧嘩した亡夫恋しい夜もある
仮設です何時か孤独死来る恐怖
妻は旅メモ一杯に注意書き
シュレツダーで夫の嘘を砕きたい

句会席五年経つても震えてる
見得捨てて続ける自分誉めてやる
外出時メモ帖何時もポケットに
句会後の懇親会で脳洗う
良い趣味を見つけた僕は幸せだ

大阪市 升成 好

好奇心スイッチオフで老い進む
諦めの悪さが我慢強く見え
脇で見るほど楽でない黙秘権
飲兵衛に酒の小言は通り雨
世の裏を見すぎてからの黙り癖

大阪市 井丸昌紀

僕だけが本気になつていたみたい
振り向けば誰も続いていなかった
鼻の頭の汗が真相語り出す
川柳をやめると何も残らない
真に受けて虎の尾を踏む無礼講

大阪市 田浦 實

いよいよとなれば日本の民強い
鯉幟千匹あげて町興し
母の日など気にも留めない母でした
五月病だと贅沢なこと言っている
寂しいときはスイングジャズで跳ねてみる

大阪市 江島谷 勝弘

先約がありますからと嘘をつく
あなたには千円貸してあるけれど
油断すると一キロぐらいすぐ太る
二部屋も占領してる妻の服
あと五年元気で遊ぶつもりです

大阪市 榎本 日の出

新しい風が欲しくて輪に入る
体力に限界があり無理してる
他人から貰う言葉に育てられ
困つたら売つてもいいと壺が言う
老いのグチ一杯つめる箱がない

大阪市 寺井 弘子

ちびつこの神輿カメラの列が追う
ささやかに床上げ祝う老夫婦
はち切れる若さ笑顔の糸切歯
眠れない母眠らせる羽根布団
給食の時だけ食べていたピーマン

大阪市 松尾 柳右子

元氣だが通院してる主人なり
梅雨晴れて友と道行く楽しけり
日々楽し元気で過ごす七十路坂
洗濯を済ませ作句の至福時
好天にめがね洗つて別世界

大阪市 笠嶋 恵美

友よりも取柄は無いがまだ生きる
五月人形かかさず飾り共に老う
孫が来る大学生の顔をして
句集来て我が家の温度五度あがる
ゴーヤ植え毎日楽し夢を見る

大阪市 坂 裕之

ぼやくこと無い世の中もつまらない
おばちゃんは元氣蝶つてよく笑う
なるようにしかならんで笑つとく
いやなことみんな忘れて山登り
いい話また聞いている僕がいる

大阪市 平 嶋 美智子

誕生日忘れてケーキ食べそこね
誕生日医師にもらった太鼓判
父母の歳越えて恋しく思う喜寿
他人の飯食べてがつがつしてたつけ
紫陽花にそつと梅雨入り告げてやり

大阪市 小 泉 ひさ乃

あの時の返事が人生を変える
浅からぬ縁で他人の物洗う
愛しいの言葉夫の辞書にな
右脳左脳八十路越してもまだ磨く
六十年記念日いまだ忘れない

大阪市 熊 代 菜 月

かくれんぼしたまま亡夫帰らない
泣くもんか母が残した応援歌
大声は元氣のあかし電話口
悪友と言える大事な貴女です
欲みんな無くした私だったのに

大阪市 山 崎 君 子

いい音色時計の音に元氣出る
湯上りにつめたいケーキ嬉しくて
母の日に美しく咲くカーネーション
父の日の今年は悲し父天国へ
五月も終りあじさいだけが花ざかり

堺市 村 上 玄 也

気に入らんネクタイ締めて落ち着かず
阪神の試合無い日は平和です
孫たちはいつもばあちゃん先に言う
冗長な話は眠り誘うだけ
罵詈雑言吐き捨てられているブログ

堺市 柿 花 和 夫

姑と息を合わせた妻の乱
半生記御神酒徳利俺御前
目と鼻の先のコンビニまでクルマ
言い分けを思案しながら傘たたむ
子育てを反省しつつ花作り

堺市 矢 倉 五 月

ボケぬうち家族会議で決めておく
運不運タツチの差です次がある
末子が外じゃしつかり仕切り役
声かかるこんな私でいいですか
短命の方へ仕分けをされた人

堺市 齋藤 さくら

ご両親見えそう座席譲られた
感謝よりつつい愚痴が出てしまう
過ぎ去ったあの日懐かしく去りやまず
寝てるふりしてる夫が咳払い
空気読み過ぎて自分を見失う

堺市 加島 由一

犬の名を尋ねてからのお茶仲間
青信号点滅渡るのをやめる
おごらされワインの歴史聞かされる
もう欲はないと財布に宝くじ
糸のないマリオネットになっちゃった

堺市 志田 千代

去る者は追わずシャキシャキセロリ囁む
スイーツも熱い渋茶で口直し
気恥かしく娘の見立て着ています
過ぎたことにタラレバつけて日向ぼこ
場数ふみスビーチうまくなりはった

堺市 内藤 憲彦

冷房は要らぬ緑の風と寝る
ハッピーエンドひと波乱あり辿りつく
暑い日は南部風鈴ほめちぎる
ようーしと決めたところで夢がさめ
ロンドンで金のでしこ見てみたい

堺市 源田 八千代

新緑の中バラの香りに包まれる
スカイツリーの代り通天閣上る
新装のビリケンさんの足なでる
もう会えぬととんぼ返りで来てくれる
梅雨寒にノースリーブのヤングママ

堺市 山本 半銭

わたくしのルーツをたどる祖母の里
朝ドラの戦後の街がなつかしい
そのまんま私の影の子供達
衣更え煩わしさとときめきと
衣更えソックスなりと新しく

堺市 大久保 のん子

青春の血が匂い立つ古日記
夕焼けへ飛ばそう夢のシャボン玉
温室に世間知らずの花が咲く
風雪へ底光りする人の味
ペン揺れて虹色の夢今も追う

堺市 遠山 唯教

肩の荷を少し下ろして生きている
森の匂い四季にくるまり湯にひたる
薬地蔵のわらを外して春を待つ
玄関にプラス指向の靴すべり
母の日にことしもひとり夫が酔う

堺市 澤井敏治

泉佐野市 山本蛙城

にび色の空天然色に変わる幸
眼から鱗とれて心の晴れ渡る
よく見ると偏屈そうな顔してる
笑い皺苦勞の日日の勲章か
かたくなな老斑ばかり増えていた

堺市 大隅克博

茨木市 藤井正雄

何回も座り直して法事する
人は人自分は自分ぶれはせぬ
この俺で我慢している人がいる
相席の時はオーダー見栄を張る
最寄り駅までに整骨院五軒

堺市 荻野像山

茨木市 島田誠一

質問へ答弁逸らすのも話術
つい文句言いたいえば天のころも
コピーしたような美人が多くなり
夕暮れを心待ちする父の猪口
この俺を狙つてるよな葬儀ビラ

和泉市 横山捷也

大阪狭山市 矢野梓

頑固だがじっくり聞けば味な人
田畑の汗を息子に見せておく
泣き顔は見せぬ女のイヤリング
心機一転誓つて赤いちやんちゃんこ
頼りない会話で同居しています

吊橋でたればの夢揺れている
スカイツリー通天閣は知らぬふり
セツデンに歩行発電考え中
礼言うぞ地球何周した足か
伸びきつた輪ゴムの中で野次叫ぶ
昇格の内示帰りに前祝い
激励と苦言恩師の祝い酒
寝たきりへ旬の味手を添えてやる
年輪が光る古老の説を聴く
父母が敷くレールに無理が多過ぎる
政治家の言は日替り週替り
札束が出て反対の旗降ろす
お見合にコピーのヴィトン落ちつかず
同窓会染めた白髪がいじらしい
もつたいないで食べ痩せねばで薬買う
病名と歳から見てる死亡欄
母の忌に紫陽花彩を深くして
お赤飯苦勞忘れる誕生日
ゴール迄歩いていたい靴を買い
飛び越えた先にもあつた水溜り

河内長野市 山岡 富美子

放射能防げる傘はありますか
封を切る母の手紙が海になる
晩学は周回遅れでも楽し
梅雨晴れ間物干し竿が饒舌に
初恋の傘は躊躇いつつひらく

河内長野市 村上 直樹

節電へアロハ団扇のクールビズ
ふところは痩せて腹だけ肥えてくる
ケータイの鼻輪で今日も放し飼いの
しつとりと染まっていますあなた色
あと一歩追う夢がある生きている

河内長野市 木見谷 孝代

天体ショーこそぞつて仰ぎ見る平和
スイカころころ正に恵みの雨でした
魅せられて今年も描いたクレマチス
ひょうぎんな母金釘の文の中
飽きもせず定位置守り生きている

河内長野市 坂上 淳司

巢も掛けず気楽に歌うホトトギス
赤ちゃんバンクのモデルでしたかホトトギス
愛の巣を覗き見される佐渡のトキ
君が代を踏絵代りにする維新
二十年四股踏み続け初賜杯

河内長野市 黒岩 靖博

男性の草食系で未来鬱
皮肉にも火急の時に計の知らせ
夕日浴び椰子の木陰でフラダンス
政界に維新が送るつむじ風
ダイエツトすると下腹太く見え

河内長野市 松岡 篤

なるようになれと抜け毛に捨て台詞
造花では物足りないど地蔵さん
窓枠が揺れただけでもすわ地震
恋愛は進行形がベストです
抜いた歯にご苦労さんと手を合わせ

河内長野市 谷 久美子

金環食朝の日本を騒がせる
義理欠いた恩師に詫びる墓参り
ケセラセラ悩んでみても夜は明ける
我慢した分だけ太くなる根っこ
返り咲きするまで我慢達磨の目

河内長野市 水谷 正子

お互いに年金暮し気楽旅
ケアホームみんなで歌う夏は来ぬ
ケアホーム長期欠席気に掛る
寡婦寄れば一人暮らしを謳歌する
新聞の記事を切り抜く悪い癖

河内長野市 植村喜代

スカイツリーが見下ろしている花火
スピードの怖さ知らない孫の自転車
五億なんかいらぬよ心配ごと増える
クラス会慰めあおうと日が決まり
友の家に集まる私は行けないの

河内長野市 山室光弘

ラッシュ時は両手吊り革美女のそば
決断の出来ぬ総理を持つ悲劇
煽てられ腹の底まで見せた悔い
風貌の上らぬ友の嫁美人
すきま風別離の匂いつれてくる

河内長野市 梶原弘光

日本人力士に檄が飛ぶ楽日
太陽に伺い立てて野良に出る
総選挙AKBの事だった
遅咲きの歌手ならではの間とテンポ
その内と言わず会う日を決めておく

岸和田市 雪本珠子

せつかちとのろまで波長合うなんて
幸せの女神我が家を通して
夫とは老いて初めて腕を組む
タッチミスデータすべて水の泡
雑草のように育って医者いらず

岸和田市 堤 梢代

平和だなあ金環食に大騒ぎ
原発は恐いが電力ほしいです
大安が好きだった夫思ひ出し
人柄がにじみ出ている好いお顔
大騒ぎされる事ない老いの恋

吹田市 太田 昭

何事もなかったように朱鷺巣立つ
微罪ひとつ消してくちびるそつと拭く
熱帯夜おんなは爪を研いでいる
人の手を借りず健康寿命越え
取りあえず中立にして席を蹴る

吹田市 瀬戸 まさよ

大正は無口少数派の誇り
白鵬の大平幕の旗手つとめ
勿体ないが長生きも疲れます
問題はあるけど今がいい私
福島に普天間カデナ悩む国

吹田市 木下 敏子

パソコンの上で残り火燃え始め
掛け軸を替えて床の間風薫る
西瓜植え花が咲いたと老い忘れ
黄色い花まだ西瓜にはほど遠い
とびつきの西瓜なるよう水を遣る

吹田市 野下之男

大臣の余計な口が眠らせぬ
老い支度耳に残るがしたくない
ノンアルで健康守れまあええか
子供らの携帯不思議八十歳
女房の言うた通りで安泰だ

吹田市 須磨活恵

疑心暗鬼抱いて進路へしやがみ込む
貶されて少し自分が見えてくる
味方だと思つた人が去つてゆく
諦めず老眼鏡を拭き直す
枯れそうな五感を刺激青風

吹田市 大谷篤子

アールグレイ少女は急に大人びる
おばあちゃんその一言に笑みかえす
うれしい電話心の霞さつと消え
救われた命きらきらひかりたい
病室の前に幸せの影置いてある

四條畷市 吉岡修

灯を消せば思う人にも会えそうな
透明な純国産の血が騒ぐ
点滴を下げて歩け歩け言う
黒を黒言うていたのに笑われる
願かけたお顔は昔のまま見えす

高石市 浅野房子

紙コップでコーヒーを飲みたくはない
ノラ猫が子猫五匹も連れてきた
あの世から電話かつたことがない
医者休み行く当てもなくゴロ寝する
一日のノルマを果たしああしんど

高槻市 峯村勲弘

ニッポニアニッポン夢をありがとう
空洞化首を洗つて待つ任地
がれき拒否絆の光薄れ行く
捨て石に徹しひっそり世を渡る
節電に人さまさまのクールビズ

高槻市 指宿千枝子

鬼ごっこ影踏みをしたなつかしき
父母のお墓も町へ引つ越して
パスポートの写真遺影によさそうだ
スカイツリーあなたは世界一になり
電波塔へ御上りさんになる私

高槻市 富田美義

運鈍根使い果たして無位無冠
大袈裟な話の中にある野心
次の世の声が届きて耳冴える
余生には欲など無いが命がけ
不況でもなんとかなつてゆく時間

高槻市 富田 保子

あれも夢これも夢かと今に生き
物忘れお互いさまと苦笑する
愛らしい孫の写メール次々と
七転び八起きが続く古希の坂
面白く生きて可愛いく老いてゆく

高槻市 佐 甲 昭 二

コーヒーを追加して聞く後日談
傾いた社運を背負う三代目
自分史を洗うと弱み浮いてくる
人柄が別れたあとでよみがえり
惜しむ声聞こえるうちに席譲る

高槻市 井 上 照 子

印を押すまでのドラマに泣かされる
だれか来た電話切る手を教えられ
ピアノスト目指す五歳を釣るお菓子
女性専用車昭和の女顔歪む
見ていいよ長い生脚闊歩する

高槻市 杉 本 義 昭

青空が似合う宣誓甲子園
悔いる日の心を洗う日記帳
生き残るつもりで牙を研いでいる
人恋しひよいとのれんをくぐらせる
飼猫は家族の喧嘩知らんふり

高槻市 島 田 千鶴子

御辞儀して見られたくない後頭部
自画像は半分ばかり描いておく
ひとつだけ自慢のレシビ持つている
大空の金の指輪を贈ります
埋められぬピースがひとつある別れ

高槻市 初 代 正 彦

ちよつとだけ絆緩めて老い二人
痛む腰かばいながらもちよい背伸び
地図にない田舎町にもある灯り
退屈な猫の気分で背を丸め
顔じゃない妻の魅力はおもいやり

高槻市 片 山 かずお

生き様を背中に見せている座職
山門をくぐる背筋が伸びてくる
いいとこがきつとあるぞと子を見つめ
勝ち組の姿は見えない縄のれん
のほほんと今日一日を描き上げる

豊中市 水 野 黒 兔

長編を読む気になった梅雨の午後
初夏の風道にはみ出すカフエテラス
夏の雲少年はまだ恋知らず
バラの香の旅路の朝の風を抱く
大胆なショートカットが妻の夏

豊中市 藤井則彦

富田林市 片岡智恵子

振り向かずに登つてみたい喜寿の坂
どうするのと訊かれてやつと肚括る
失敗にも弁解をせぬ頑固者

守れない約束というマニフェスト
鼻血が出たほどの元気を懐かしむ

豊中市 江見見清

ライバルにしていた友の弔辞聞く

友見舞うその病気なら経験者

昔話すればのびのびする頭

酒蔵と思ひ婿殿達が来る

いよいよの時はなんとかなつてきた

豊中市 松尾美智代

一人もいいな夫一日出かけてる

爺ちゃんのコピーか孫のしかめ面

断捨離をすませすつきりした我家

愛なのか空気のような二人です

五十年やつとコンビが板に付き

豊中市 松村里江

肩を貸す心準備は出来てます

紗の僧衣読経はドスの利いた声

目分量ですがきつちり分けてある

貴方好みに変えるうす味調味料

帰る家あるからいつも遊ぶのね

明日が必ず来ると限らぬ夫見舞う
病院通ひ葛藤続く踏絵踏む

逝かれても悔いなき介護探す日々

極めれば基本に返るにぎり飯

無関心より怒りは貴重だと思う

富田林市 中井アキ

末席の正義が波を立てている

指切りとぱつたりと合う無人駅

ライバルにしたい話の合うた人

わたしにも君にも付いている尻尾

陽だまりの花になつている二人

寝屋川市 籠島恵子

妻の事はいつも二の次三の次

半夏生まだ半年を意識する

ラインダンスの用意ができた立葵

もう一度ふるいにかける決まり事

バスデーカードたわごとだとしても

寝屋川市 森茜

金山寺味噌にふるさと仕込まれる

なんとなく人にまぎれてみたい蝶

焼きたてを仏さまにもクロワッサン

背表紙の銀字ぼろぼろ広辞苑

図に乗つてしまった唇しまらない

寢屋川市 森田麗

ゲリラ豪雨ビニール傘の末路見る
トップという座りごちの悪い国
路のつくだ煮鍋の機嫌とにらみ合う
母の日に愛犬の服贈られた
いつの日か環状線で一回り

寢屋川市 平松かすみ

電力の不足へ気兼ねする電化
朝夕に気合を入れて老介護
ストレスの発散チョコキチョコキと植木
ゴミ出しのルール違反を野良が待つ
雑草を抜いて一服するお墓

寢屋川市 山本三郎

旅日記五七五で書いておく
三代目家運傾く賭けが好き
狡いやつ揉手しながら寄ってくる
曲線も手を携えて夫婦旅
ドラマ見て深刻な顔してる妻

寢屋川市 富山ルイ子

出来ること少なくなってきた八十路
見ざる聞かざる言わざるで恙ない
年金はありがたい大事に使う
年金の暮らしがつがつしていいない
メル友があり幸せな八十路すぎ

羽曳野市 徳山みつこ

鈴虫の孵化恋人を待つように
ぶらさがる胡瓜わたしを急ぎたてる
すりこ木を使えば母の味になる
失敗を踏んだ足です前に出す
放射能もうゴメンだと蛙鳴く

羽曳野市 吉村久仁雄

弁解はやめよう雨が降り止まず
まっいいかで生きて希望の火を消さず
好々爺の列に私の団子鼻
ベストペアの妻と阿吽で暮らしてる
阪神の話でなごむ初対面

羽曳野市 三好専平

大相撲の力士の四股名覚えかね
散るほどに狼籍無頼バラの花
あゆむ人みな美しい石光寺
高層のビルに住まない予知学者
カラス鳴く桜の国となりけり

羽曳野市 宇都宮ちづる

溜息がわたしそっくり九宮鳥
列島に和みくれた朱鷺の雛
格安の二泊四日は無理な歳
帰国後は肩まで浸かる湯で伸びる
時々違う空気で居たい妻

羽曳野市 福田悦子

土用波うなぎの群れを連れてくる

無事着地神が授けた金メダル

母の舞台料理自慢の台所

梅らつきよう女が守る伝統芸

梅雨の絵を飾るオシヤレの女傘

羽曳野市 永田章司

国債が紙屑になる夢を見た

ハーモニーなかなか聞けぬ民主党

飼う気などなかった猫が居候

グローバル明日を語る人を欠き

白黒のけじめをつけぬ知恵を出す

羽曳野市 安芸田泰子

紫陽花をいたわりきれぬ空の青

来年を生きる約束花の種

満面の笑顔の中の下心

詮索はしない所詮は人のこと

コンビニでお袋の味買ってくる

東大阪市 北村賢子

想い出の場面を辿るこころ旅

やさしさがこころに染みてくる加齢

この歳でやつと普通の幸を知る

日日の幸悟って物差しを変える

自信失せ隠したいとこばかり増え

東大阪市 笠井欣子

ややこしいことは子供にみな任せ

孫曾孫私も同じに扱われ

一周忌過ぎて仏も落ちついた

機嫌よう暮しているかと夢に夫

お出かけも一人気ままなローヒール

東大阪市 佐々木満作

日の丸にエールを送る五輪の灯

筋書きのないドラマにあるリアル

図書館へ避暑と読書の逃避行

八月の記憶は飢えと無念さと

八月の日差しにいのち燃え滾る

枚方市 寺川弘一

毎朝覗く鏡の顔は変わらな

香典供花生前葬は受け付ける

僕だっけいずれは神になるつもり

天国で帰りの切符買えるなら

続編をサブリメントで書き足そう

枚方市 二宮山久

幸せは目覚めさわやか夫婦仲

ストレスが溜ることない趣味多忙

一万六千歩歩いて新緑山の中

朝刊を拾い読みする知恵袋

里の記事読んで胸張る里心

枚方市 丹後屋 肇

梅雨寒に毛布二枚を身にくるむ
妻の忌にアジサイの花掻き分ける
老骨を奮い起たせる墓掃除
梅雨しとど菖蒲の艶を撮り捲る
AKBステージの汗拝受する

枚方市 伊達 郁夫

ケータイを持つから人が追いかける
がん告知優しい父になりました
八月に汗を溜めてはいけません
缶ビール冷えると夏が笑いだす
余白には花一輪が咲いている

枚方市 小林 わこ

通天閣足元にて飛び立てぬ
大阪の自販機おおきにと落ちる
大阪弁しらずしらずに友達に
水掛けてお不動さまと約束を
けつねうどん今によく好きになる

枚方市 安達 忠央

螢火にメルヘン匂うなつかしさ
張り合った相手と昔笑いあい
退院にもう聞く次の入院日
就活へ学生っぽさ抜けはじめ
変わり身の早さでこの世生き延びる

藤井寺市 高田 美代子

微笑み返してあげれば良かったな
面倒だから手の鳴る方へ行つてみる
ストーカーが一人私を離さない
辣蕪がもうすぐ漬かる楽しみだ
シャワー全開すこし泣きたくなつてきた

藤井寺市 鈴木 いさお

合掌をしてから食べる癖がある
お前もかそうかと老いを笑い合う
イケメンを自負しているが黙つてる
終章の構図は神に委ねてる
司馬遼に真つ黒の髪似合わない

藤井寺市 若松 雅枝

毎日の写経心の糧とする
諍いが嫌いで前へ出たがらぬ
学童の見守り隊に初参加
エレベーター有難く乗る駅ホーム
京の旅孫が初めてプレゼント

藤井寺市 俣野 登志子

弛んだネジしつかり締めて娘は帰る
馴れ初めが思い出せない婚50
遠出して給油ついでに旨い店
バイオリンの音色涙腺に轟く
手術済み遠近メガネ三月ぶり

藤井寺市 津田シルク

とべないほど人の血吸つて蚊のオバカ

阪南市 森村美花

土いじりじんわり心癒されて

書の軸を生きた証と手渡され

うつらうつら水琴窟の子守唄

人見る目無いはパパ似とママに言う

藤井寺市 吉田喜代子

金環食早起き過ぎて寝てしまい

父の日はつい忘れたとそのまんま

朝早く畠の中で良い時間

会いましょう次も元気に喜寿の会

花オクラ見事に咲いて腹も満つ

藤井寺市 増井ヨシ枝

山アジサイ母の教えにある慕情

花菖蒲傘も一花となつて梅雨

虹色に染めてやさしい嘘をつく

車椅子拍手で迎えクラス会

古希の恋内緒内緒と紅をひく

藤井寺市 伊藤アヤ子

らつきようを漬けた楽しみまた一ツ

ミニトマト一ツ二ツと恋をする

ポケットに釣銭入れる癖がある

引出しの中から何も出て来ない

体力は落ちるスピード早くなる

平均に生きて悔いなどない命

ペン持てる腕は大事な武器ですね

おんな四人笑い弾けた露天風呂

二時間ドラマ二人仲良く見てる老い

空間がほしくて青い海を見る

松原市 森松まつお

家計簿を見れば従う他はない

鏡台の裏から工面できないか

妻の指示黙って聞いてあげている

酒のあとフツとゼンザイ欲しくなる

増税に何も命をかけなくても

箕面市 広島巴子

一歩ずつ修行と登る剣山

頂上に杖立て叫ぶ剣山

土の道昭和生れがはしゃいでる

この水はきれいですよと蜩舞う

菖蒲園友とじつくり和に浸る

箕面市 出口セツ子

若作りしても老化が忍び寄る

一歳の違い助言が分かる老齡

腰痛で寝てる主人を笑えない

簡単に筋痛めたと医者はい

騙し騙し使つて老いを手なづける

守口市 井上桂作

爽やかな五月の空よどこいった
異変あり五月の空に竜巻が
年とると偽りのない優しさを
小食は病少なく百までも
空は夢花は心に潤いを

八尾市 高杉千歩

エンディングノートヒントにもならず
起き上がり小法師に合わせストレッチ
目と鼻の先だが杖に頼ってる
お中元今年は二人削除する
長電話した日は日記に付けておく

八尾市 宮崎シマ子

木で炊いたご飯はきつと神の味
盗塁はさせぬ獬豸犬を門番に
不出来な子は可愛いうちの子みな不出来
断捨離が出来ず友達増えてゆく
鬼平を読む姉百歳一つ越し

八尾市 村上ミツ子

梅雨入りをよろこぶハナシヨウブ見頃
許すところと責める心がけんかする
ひるねから覚めておながが空いてきた
なんとかなるさご破算にして生きる
先生の都合で自習したらしい

八尾市 寺川はじむ

言い勝つて枕を返す長い夜
庭園を泳ぐ鯉にもある悩み
緩む気を締めて電気の夏を待つ
バスデーキーが憎いダイエット
アクセルを踏み込み過ぎて道迷う

大阪府 初山隆盛

節電の夏の逃げ場を選っている
ありがとうに勝るこころの言葉なく
合鍵は愛を折半して二つ
テレビに乗ってぐるつと世界旅行する
あの人に逢える句会は欠かさない

大阪府 米澤俣子

手のひらの秤にかけて買うキャベツ
上ばかり追つては運に逃げられる
美しく老いる手だてはハートでしょ
老人と世間話ではやる医者
席譲られたワタシやつぱりおばあさん

大阪府 野田栄呼

楽しもう自由たつぷり高齢者
夜型を朝へ変身節電へ
消費するひとりの杵を生きてます
エレベーター横目階段歩で鍛え
流行は追わずある物着てるエコ

大阪府 桑田 ゆきの

句心をなおも濃くする青田風
安全と原発稼働明言で

青葉風心ゆくまで今日の幸

泥の靴脱ぎ捨ててあり梅雨の土間

手作りの草履記憶の中に置き

神戸市 山口 光久

物好きと言われ貶され崇められ

悪役に回り潤滑剤となる

欲望が白い炎となつて燃え

旅人ものんびりしてる無人駅

諍いはきらい何でも半分こ

神戸市 山崎 武彦

引き金を引くかも知れぬ手と握手

野いちごの赤に幼い日の記憶

老骨に鞭打っている一万歩

熱燭とワインが競い合う夫婦

炎天にカンナの赤が唖呵切る

神戸市 山田 婦美子

万病に利く薬などありえない

飲み薬全部やめたら姑元氣

都合よい事だけ残る老いの脳

若い頃思い出しては鞭を打つ

後期とやまだまだ先がありそうな

神戸市 山口 美穂

福祉の声が聞えぬ消費税アップ
朝はお願ひ夜ありがとう仏さま

こんな時のための奥の手だったのに

犬のこと話し記憶がつながって

今日のノルマへもう一回り万歩計

神戸市 木村 貴代子

義理からむお招きつらい足弱に

雨上り赤い長ぐつ見せに来る

優待の席が足りない昼のバス

特養に入れた友は同い年

電気食う器具買わせたはどなたです

相生市 中塚 礎石

年金を支えてくれる杖がある

労働を忘れ貧富の差を責める

主義主張脱線したが無二の友

学歴は小卒だけど生きている

握り飯変わらぬ味は塩がきき

明石市 糀谷 和郎

道逸れて人の温みを知る旅路

原発が最後に植える根無し草

普天間の頬を政治が逆撫でる

過去は過去ここからですと線を引く

一本のネジの緩みが産む瓦解

芦屋市 黒田 能子

昔はね母の語りが長くなる
ユニークなお人ですねと誉められる
ピンと背すじ青い山脈歌う父
恥ずかしい大人電車に乗っている
フウーと魔法ふる里元にもどしたい

芦屋市 竹山 千賀子

拳あげ国を変えると塾通い
セレブの夢枕替えても見れません
空を見て遊びを描く病の子
風に乗り根付いたとこで生きている
優しいねと冷めたい人に言われても

尼崎市 長浜 美籠

無雑作な仕種に愛があり家族
天声人語まず目を通す主婦の朝
ローン完済まるみ出てきた友の顔
サスペンス消音にして見る独り
心機一転まず鉛筆を尖らせる

尼崎市 山田 耕治

好きなこととしてはる時は静かです
いとおしい日になるだろう日記帳
赤ちゃんが笑った心通じたか
金婚を誰にも言わず二人切り
知らぬ間に母の皿から来た追加

尼崎市 藤岡 りこ

私だけが美味しいと言う焦げたパン
もう一人の私がわたし責めたてる
私の癖一番知らぬのは私
すごいなあ日本中が空見た日
十七回忌仏に合わせ若返る

尼崎市 林 昭三

陸橋を黄色い傘が一線に
履き慣れた靴の踵が梅雨に泣き
どの服で明日の退院女の子
梅雨晴れ間月命日の花買いに
電話では今から帰る言ったのに

尼崎市 軸丸 勝己

池の鯉お前も痒いのか跳ねる
立葵秩序正しく咲き上がる
公園のベンチ男は哲学者
金環食よりもやつぱりこの指輪
オイコラと防犯カメラ言いたそう

尼崎市 加川 靖鬼

完走のテープ歩いて切るつもり
三度三度欠かさず薬おつき合い
花時計洋花ばかり咲き誇る
ナイトキャップ被るとみんなシンデレラ
左手か右手か招き猫迷う

加西市 金川 宣子

二週間夫と離れて二キロ増
妻や子の行つてらつしやい聞く背中
例外にならぬ長寿の猛者揃い
励む趣味広く浅くで皆半端
AKB総理うらやむ総選挙

川西市 西内 朋月

酒の毒じわじわ効いてくるらしい
傘ささずばんやり歩く小糠雨
損をすること覚悟して買っている
命日の線香揺れる梅雨最中
長生きをしたくもないがマイペース

川西市 米原 雪子

リハビリの効果は返事してくれぬ
連れ添った半世紀をば振り返る
蛇の目傘人形だけが持つている
雨上り元気を貰う緑色
好天気動けぬ体もてあます

三田市 田中 章子

ウォーキングはげます凜と立葵
ジューンブライドでしたね雅子さま
天体ショーわたしはにわか宙ガール
日曜日街は凶器にあふれてる
友だちを蛭で釣つて酔わんかな

三田市 石原 歳子

この歳で初めて仏花買いに行き
成行きでなつてしまった所帯主
手続に振り回される高齢者
役所から封書がくると落ち着かず
色形味も上品ゆすらうめ

三田市 上垣 キヨミ

朝刊がレインコートを着て届く
眠れぬ夜恋の句集と夜を明かす
サンブルの無料私をお見通し
古稀越えて夢一パイの青写真
開発がスルリと避ける家の山

三田市 福田 好文

合コンで一人息子は蚊帳の外
遺影の父時どき怒った顔をする
我を通す男群れから浮いている
トイレ休憩ばかり気にしてバスツアー
お節介が知らせてくれる熨斗袋

西宮市 西口 いわゑ

日の丸に命をかけたのは昭和
昭和から引きずっている重いもの
ぼつかりの雲よわたしは泣いてます
気楽そうな裏はのぞかぬことにする
美しく笑つて見せる哀しい日

西宮市 山本義子

体型でおおらかに見え面映ゆい
ピリオドはいつ打とうかな月丸い
旧街道むかしの良さが消えていく
つば広帽子風がてんごうして覗く
指切りからゆつくり広い川になる

西宮市 緒方美津子

快方にリズム整う松葉杖
一言が百人力となることも
古稀すぎてあふれる欲をもて余す
草だんご今スイーツと申します
悲しみを流すには土砂降りがいい

西宮市 亀岡哲子

染め替えて少しはんなり老い支度
お気楽にどうぞと威儀を正される
歳月に招かれ一歩また一歩
白いパラソル新調します五月晴
わたくしも緑も光る雨上り

西宮市 藤本直

襟足の涼しい美女が夏を呼ぶ
人生の重さが少し足に來た
反抗の五臓六腑と和解せず
志あつて一歩が踏み込める
悔しさと未練を背に一人旅

西宮市 吉井菜々子

絵手紙のあじさい雨の匂いする
潮風と砂のお城を捨える
ポケットにいろんなごめん溜め込んで
思い出はドーナツ盤のかたちして
レコードのノイズ聴こえてくる不思議

西宮市 秋元てる

いろいろとあつたが昭和いま命
「よつこらしよ」身体が言わせていると老母
早く来てゆつくりと待つ好きな人
危なっかしく見えよと老いの暇つぶし
大男の涙また良し大相撲

西宮市 足立茂

提案が上司のメンツ打ち砕く
肩書きが取れたら見えた非常識
酔い醒めに大風呂敷をまづ畳み
吸殻の数でストレスまた溜める
目覚ましより早く起きだす得手勝手

西脇市 七反田順子

影うすいパパの日うちのパパもてる
カルチャーで右脳たつぷり膨らます
旅の宿話弾んで夜半まで
夜中にはふとんで泳ぐ孫二人
あるがまま咲いた花には自負がある

姫路市 古川 奮 水

目玉焼片手で割つて朝にする
手抜きして朝食すます共稼ぎ
初出社アートの爪に念がいる
近頃は院に馴染の貌ふえる
四季巡る風に体調あわせとく

奈良市 米田 恭 昌

地場野菜につこり並ぶ道の駅
ご焼香人柄偲ぶ雨の列
居るだけで優しさ醸しだすおひと
人間百態一休寺の庭に観る(一休寺 2句)
酬恩庵に温故知新を思い入る

奈良市 岩 本 浩 二

美辞麗句つなぎ並べて意味不明
いっぱしの庭師気取りで松葉摘み
温かい絆の中にいる至福
梅雨入りを乞うてゲロゲロ鳴く稲田
石庭の縁に座つて無の境地

奈良市 山 本 柳 昌

スクワット取り入れ元氣出している
剥き出しで意地を張つてるおばあさん
六歳と計算カード競い合う
百歳を生きるかわいくなるつもり
川幅の広さにフアイト湧いてくる

奈良市 加門 萌 子

落葉取りにおいでと古い友
義母送り夫も病んでるのにやさし
記念日が続く嫁女が氣を使う
誰に聞くのか勧誘の電話しきり
日蝕だスカイツリーと陽が当る

奈良市 辻内 げんえい

ロボットに監視されてる家職場
どちらもが繋いでいると妻と僕
地震国に竜巻という恐怖増え
下手なくせホールインワンするなんて
消費税先ず脱税を挙げてから

奈良市 大久保 眞 澄

放射能濾過せぬままに梅雨が来る
庭つきの家草引きもついてくる
見た目だけレシビどおりの娘の料理
オバチャンの自転車尻に敷くルール
梅雨寒に今日は爛だとステテコが

奈良市 阿部 紀 子

大文字焼きご先祖に手を合わせ
終戦のお言葉今も耳にあり
権現さま大吉貰いありがとう
日食見て琵琶湖クルーズ優雅な日
書斎持ちいつも楽しい玉手箱

生駒市 飛 永 ぶりこ

あじさいの葉脈ばかりとあなた
わたくしの夜叉をふわつと掬う星
下手な芝居裏打ちもなくもうあきる
プディングにゆつくりませて毒を削ぐ
ひらひらのシルク天女の嬬やかさ

大和郡山市 坊 農 柳 弘

節操を守り通した舞扇
我武者羅に生きて自由にけつまずく
しがらみを裏漉しにして風を詠む
運否天賦酸いも甘いも紙一重
信念を曲げぬ匠の息遣い

奈良県 渡 辺 富 子

熱中症迎え撃つ気の大ジョッキ
価値観の違う仲間で弾む酒
視野少しずらし世の中見えています
真夜中の鏡はお世辞言いません
企業戦士心療内科はしごする

奈良県 天 正 千 梢

右手だけなだめすかして妥協する
ことわりはいつでも出来るとして平和
はじめから一人居などと知りながら
何事もそ知らぬ顔の出来る歳
大きなバッグで今日もお疲れさん

和歌山市 福 本 英 子

雑草と意地で張り合う梅雨半ば
阪神の勝っている間に寝てもらう
天命と心静かに待てない世
純真でノンアルコールでも酔える
パソコンで川の流れば変えられぬ

和歌山市 古 久 保 和 子

コーヒーが少し温めの休刊日
夫婦でも進入禁止守ります
キコキコと缶詰切ってきた昭和
ペディキュアでしつかり夏を出迎える
笑顔だけ映る鏡はどこですか

和歌山市 岩 本 美 智 子

我が寺の入門拒み生還す
死線へは憑きものだけを置いてきた
仕残したことで来いと閻魔さま
十日間 人工呼吸迷い道
居直って後手の人生やりなおす

和歌山市 武 本 碧

うっかりと生きてすらすら年拾う
青かった時代眩しく振り返る
まごころに触れて羞らうおじぎ草
選り好みするから一人残される
終章を飾る割符が欲しくなる

和歌山市 喜田 准一

善し悪しは置いてボタンの掛け違い
終電に遅れた酒がなつかしい
決断をしたのか笑顔消えている
いろいろとあつて七十路の絵が描ける
この辺で聴きたい夢のある話

和歌山市 田中 みね

言う事がちぐはぐいつもそうだから
見事に勘当たつた事は申すまじ
装身具に無縁その分食べてます
ああすつきり初めて妻に口答え
ノーマイクの時に限ってお客様

和歌山市 玉置 当代

梅雨しとどバナナも黒くなっている
水空気がだんだん思つてた
定年後舌がだんだん肥えてくる
カロリーをひかえた食事ものたりず
玉葱の涙だけではない同居

和歌山市 坂部 紀久子

マナーモードにし過ぎ用件言いそびれ
引出しに昨日の予定忘れもの
紫外線見えたら邪魔で歩かれぬ
あじさいが色付き電話したくなり
冷蔵庫八十路の恵み詰まつて

和歌山市 上田 紀子

文字の海今日はどの字と遊ぼうか
富士山をゴミの捨て場に誰がした
足は地に只今ハート充電中
活力剤あげた花からくる答
体力のバロメーターになる掃除

和歌山市 堀 富美子

待つよりも出向く勇気の要る余生
病んでからたんともらつた弾む日日
命ある限り余白に彩を足す
童謡を歌うと里の絵が廻る
金環日食西の土産へリングの輪

和歌山市 松尾 和香

無人駅優しい風に癒やされる
風の音亡夫が優しく責めに来る
向かい風じつと堪えてるかすみ草
背中押す風に生かされ続く趣味
人生の迷路にともる恋あかり

和歌山市 土屋 起世子

父の日の仏壇酒もタバコあり
自分だけ食べる糠味噌手入れする
金儲けやめて菩薩の顔になる
本番になると地声が小さくなる
子を褒めるように植木に水をやる

和歌山市 松原寿子

マニフェスト梅雨の出口でまだ迷い

目を閉じて落ち着いてみる異空間

紫陽花が陽気に頬に触れてくる

白旗は振らず真実追い求め

対話する前に言葉の棘を抜く

和歌山市 福井菜摘

横並び競争心が目を覚ます

満ち欠けがあつてファイトが湧いてくる

パズル解け脳細胞が生き返る

手をつなぐ輪から未来が発芽する

独りのときはひとりの刻を楽しむ

岩出市 藤原ほのか

手拍子が合つてスタートきました

キッチンにいつも笑顔の母が居る

座るべき君が居なくて軋む椅子

限界を悟りバトンを子に託す

巡り合いそして何時しか同化する

海南市 小谷小雪

屋根裏の騒音それはムササビか

はやばやといらつしやいませ黄金虫

議事堂に向かつてヤッホーと叫ぶ

悩みなどおかまいなしに日は昇る

母偲ぶおいしいものを食べる時

海南市 堂上泰女

いつだって君は私の非常口

フレキシブルな思考若きに交わつて

イケメンの犬に出合いに行く散歩

何だ彼だいつても夫杖にする

老いの血を盗む若い蚊凜凜しいな

紀の川市 北山絹子

雑草も気合い負けする炎天下

口下手が意外と持てている不思議

今にみる男の背なが炎えている

雰囲気不思議ととける石頭

反対に嫁に辛抱させられる

田辺市 岡本昇

威張る人いざという時尻尾巻く

碁敵と膝を崩して差しで飲む

リフォームの部屋でひっそり古筆筒

未完成あしたのために取つて置く

わが家では妻がピッチャー俺は捕手

橋本市 石田隆彦

ネクタイの結び緩んでいた誤算

アクセルを踏めば曲れぬ一本気

卒寿まで生きたら遭うか大地震

設計に遊びも入れたスカイツリー

消えた種の復活かける朱鷺のペア

鳥取市 森 山 盛 桜

急用もないのでごはん囃んでいる
バーチャルの世界に我が身置きに行く
暇な時には散髪屋には行かぬ
納得はしないが領いてしまう
何故だろうたまにマンホールに落ちる

鳥取市 土 橋 はるお

銀行がタオル一枚たり呉れぬ
無茶苦茶に掘つて温泉など出ない
靴下の穴から愚痴が漏れている
気配りもほどほどにせにや捗らぬ
介添えがあつて歩き難い時もある

鳥取市 加 藤 茶 人

モルモットみたいに治療薬変わり
貫けば嘘もグレーとなる無実
流れから見れば小さな石の意地
大阪に來たなヒョウ柄タイガース
子はレジャー親は草取り腰を病む

鳥取市 両 川 無 限

職退いてもうお中元こなくなる
私のアリバイがない風の街
思い出と一人相撲をして負ける
味方から敵に変わつてゆく鏡
ふる里に根付くわたしの影法師

鳥取市 夏 目 一 粹

入れ墨がバレて長袖シャツにする
一円借りても忘れぬ記憶力
万札はひと月だけは崩さない
語るなら神さまよりは仏さま
ボンヤリとしてると肩を叩かれる

鳥取市 有 沢 せつ子

生真面目な質で時間を無駄にする
反論はせず良薬として吞もう
まだ話終わらないけどバスが來た
一坪の花壇を草に乗つ取られ
終身の年金があり生きられる

鳥取市 福 西 茶 子

別棟に住み気楽さと淋しさと
厳格が過ぎたと思うことがある
我が道を歩く歩幅を拡くして
おんなの火花飛ぶ片隅の傍觀者
子だくさん母は幸せだったのか

鳥取市 岸 本 孝 子

ぜいたくのひとつ高価なめし茶碗
空き腹に何を食べてもご馳走だ
五年日記買うこと迷う歳になり
歳月の流れ鏡は正直だ
満塁をつぶされてからつきが落ち

鳥取市 中宇地 秀 四

ホームランくちやくちやガムを噛みながら

草食の私にもある意地一つ

払わずに生活保護を貰います

情報の小出しが疑惑深くする

国会の八百長誰も咎めない

鳥取市 春 木 圭一郎

懸命に今いる場所を温める

できるならうまく苦難の波に乗る

挫折こそ成長できるチャンスかも

元気なら元気に生きる工夫する

お互いに応援しあい生きている

鳥取市 竹 口 清 信

患って知った元気のありがたさ

過ぎたこと悔いても後に戻らない

病床で時間はあるが精が無い

気力だけあっても勝てぬものがある

気力だけあつて威張ると嫌われる

鳥取市 高 浜 勇

やさしさとすれちがう土手散歩する

アンケート千人ほどで何わかる

通行人うちのセンサー吠えまくり

気がつかぬふりして過ぎる還暦

黄痘がイエローカード出している

鳥取市 前 田 楓 花

見た通り自分を主張するタイプ

朝起きてみると体調変わつてる

ストレスを溜めると石が暴れ出す

復活ののろし揚げたが火が着かず

バラの芽に来年の花託そうか

鳥取市 吉 田 弘 子

六十億の一人連れ添うこれぞ縁

操縦法時にやさしい妻演ず

気がつけばもたもたレジの仲間入り

赤茶けたシール果実酒重み増す

一人だと素直に泣ける三面記事

鳥取市 中 村 金 祥

注目をされて視線が定まらぬ

生きていく誓いに柿の種を蒔く

危機管理コンピュータに頼り過ぎ

冒険も少しはしたい定年後

お互いの趣味を褒め合う老夫婦

鳥取市 福 永 ひかり

井の中の蛙で終わる幸もある

善人のままでは旅は終われない

気どころが分かつて通す奥の部屋

足して二で割つてのつべらぼうにする

アナログはアナログなりに生きている

鳥取市 横田 春名

薫風に誘われ老いた友と逢う

とげ抜きのお地藏さまの優しさよ

立ち話それぞれ愚痴を拾い合う

蹟いたとたん見知らぬ若い手よ

土壇場のかけひき頑固親父出す

鳥取市 平尾 菜美

神様も御存知私の暗い過去

仏前で萎えてる花が見苦しい

浅くても違わぬ姑の政

あみだくじうろうろ私生きのこり

道標父さん背なに貼り付ける

鳥取市 近藤 佳子

山菜が届く米寿のおさな友

長男還暦ゴーヤも鈴なり

検査入院髪セット爪も切り

ミーコの鼻ピクピク秋刀魚焼きあがる

振り袖で鬼ごっこしている白昼夢

鳥取市 永原 昌鼓

レールから逸れて溺れる天の邪鬼

加速度をつけて老化が追って来る

人の手で造る地球の幸不幸

ご飯だよ母の号令よく通る

節電へ猛暑が怖い老い住まい

鳥取市 池澤 大鯨

夏の夜の軍勢の声牛蛙

蟻^{アリ}蝮^{ヘビ}メタボな俺のことかしら

青蛙と言われた頃は若かった

わざわぎにモリアオ蛙木に登る

水草に蛙軍は果てもなく

鳥取市 池原 天馬

八月は忘れられない日が多い

定年後土日も元氣畑打つ

オノマトベ自分の耳を信ずるか

モーニング読むと元氣に励まされ

燕来てと手立てつくすが駄目だった

鳥取市 宮脇 道子

引出しを沢山持つて年重ね

亡き友の蛍が運ぶ愛の灯よ

天災の多き年何故蛍飛ぶ

地球上騒めく姿見てる星

タンポポがビルの谷間で日向ぼっこ

鳥取市 深澤 千恵子

いつか来るわかっていても悟れない

恋心持つて年より若く見え

設計図余生は白いままで良い

雲ひとつ添えて際立つ空の青

塀のない庭に咲く花生き生きと

鳥取市 西川 和子

勢いも時の風には逆らえぬ
後押しをされて勢い付いて来る
追い風に乗って自信が満ち溢れ
勢いがあるから人も付いて行く
勢いに乗って遠い人になる

倉吉市 牧野 芳光

三丁目の夕陽のはるかスカイツリー
手を握る時心臓の音がする
味気ないこの世忘れるよう眠る
好きな人僕と一緒に年をとる
大人にはなれずにすぐに棘が出る

倉吉市 野口 節子

旅先で転んだ話また楽し
失言もポロリと出ます開放感
風はやさし四季には四季の花が咲く
海の青恨みつらみは捨てている
安らぎが欲しくて森に向く心

倉吉市 山中 康子

オメデタを十年待った娘の笑がお
かすむ眼を青葉がそつと撫でてくれ
私をころしてあなた光らせる
かくしても嘘はつかない鏡です
羊水でまともに育ち出ておいで

倉吉市 山本 玲子

隠し芸下手か上手は二の次よ
わたしの肝は雀の涙ほどもない
歯の浮くような話十二分に迷う
スランプに嵌まり魔の手にすがりつく
一文にもならぬ話に花が咲く

倉吉市 猪川 由美子

ああ地球怒り狂って落雷だ
比較せず高望みせず心澄む
週刊誌に出ねばそのまま頬被り
スキヤングルの乗り越え方が道を分け
AKB48あの大騒ぎ解せずいる

米子市 竹村 紀の治

止まる指欲しいと思う夜の酒
健康で順調ですという加齢
冷蔵庫みんな浚ってピラフ風
湯上りにノンアルコールが頼りない
肝臓の休暇願いを却下する

米子市 後藤 美恵子

気に入りのパンツが穿けた衣更え
校門に並ぶ車は傘代わり
一日中雨の紫陽花眺めてる
欠伸しても怒らぬテレビありがたい
高名を冠したメロン食べにくい

米子市 成田雨奇
病窓ちよつと開けます閉所恐怖症

鼻に管腕に点滴妄想界

不意の入院キャンセル電話あちこちに

退院の近く看護士よそよそしい

同部屋に絶食がいて静かに食う

米子市 中原章子

無意識に手摺り握って上り下り

二人居てどちらともなくお茶を入れ

美味しそう甘夏柑を半分こ

らつきよう漬け今年も出来て安堵する

締切り日近付き機嫌悪くなる

米子市 高田振作

ふれあいを求め鈍行ひとり旅

余生なのにおまけが少し多すぎる

趣味もありパート時々いい余生

アンテナを低くしてます楽隠居

エスカレーター手摺り頼りになってきた

米子市 吉田陽子

緑陰のベンチ順番待ちがある

アドレス帳はらはら絆散っていく

一点の違反ながら止められる

終電に一人もつたいない広さ

極楽は苦勞の果てと信じよう

強烈なパンチ雷雲から貰う

血圧計じたばたとする心読み

病院の空気感にはかたくなる

女子会の爆発してる紅い口

淡淡と雨墨色に暮れてゆく

鳥取県 深田俱久

鷺も上手に鳴けて梅うれる

目覚めればきのうの悔いがひとりごと

米寿まであと何日と指をおる

何人も総理入れ替え国不変

成長のあかしだんまり続く日々

鳥取県 竹信照彦

一発が出れば逆転だけど出ぬ

心配の種は蒔かぬが生えてくる

草刈も機械で楽は若いうち

薩摩芋蔓に期待をして植える

もう今は隠さなくてもよい弱味

鳥取県 松川行男

人の智恵原発できて自然勝つ

ノーマイクそれでよかつた逮捕され

全没が悲しベテランなるが故

買いそうな客がいるのに電話くる

オバさんは近所のみやげ指を折り

鳥取県 細田裕花

鳥取県 石谷 美恵子

不揃いに育つてみんな個性的
号令をかけて動いている私
娘がふたりケイタイ持てと喧しい
亡き姉と同じかたちで座る姪
ガス欠の孫へ握らす裸銭

鳥取県 山本 正光

真心を信じてくれた花が咲く
若葉萌えみんな地球の恩を知る
天災に負けぬ政治をしてほしい
一日の日課大事で草を抜く
座頭市飯食う仕草には勝てぬ

鳥取県 斉尾 くにこ

ピンチにも笑えば神は味方する
ドア開けて空気の糸がピンと張る
いい歳がこんなに重くなってくる
濡れ衣を干す月光に滴する
ガンバレを踏み止まるか逃げだすか

鳥取県 佐伯 やえ

父の樹にボツンと明日が芽吹く音
人生のたそがれ故郷にあったイス
争った言葉夕陽が消してくれ
母を待つブランコ明るい歌でゆれ
気の弱い帽子とつくに脱ぎました

鳥取県 西谷 悦子

若い日の理想はずれて現在地
青春の青い記憶は青いまま
自分にも優しい時がときに要る
赦す気へ一氣にひらき出すところ
愚痴を吐く受け皿探す日の孤独

鳥取県 鈴木 一弘

猛犸古なるほど汗に値打ちあり
待ち遠し花回廊の花だより
花回廊香りと彩が浄土かも
さと帰り老いて楽しい列車窓
こそばゆい噂ばなしの足の裏

鳥取県 山下 節子

ふとん干しパッチワークのごと団地
太陽がリングになった朝の空
人の世はよく出来たものケセラセラ
宴席の肴に手柄話聞く
歴史から凄いドラマをほり起す

鳥取県 岩崎 和子

ゼロ戦の整備した夫今病みぬ
ひばりさん今宵聞く歌生きている
草取りも家事も楽しみ上寿まで
入浴も介添えときに歌も出る
美味しいとひとつ賞められやる気出る

松江市 三島 湫 丘

逆立ててみたが振るしかない尻尾

脱皮するわたしに欲しい処方箋

もう一花咲かす気力は失わぬ

親ばかを妻に内緒で繰り返す

輪の中に溶けて自分を見失う

松江市 小川 注 湖

我慢もせよ教えて買ったゲーム機器

前を見る進む足には迷いない

ばあちゃんにお客と思う独り言

故郷を夢で遊んだ鮎の川

仮面をつけ人間少しやめてみる

松江市 川 本 畔

梅雨に入るやぶれた蔵のふるさとの

父の背の薄く汚れた葱畑

見下ろせば蛭ぶくろが抜きん出る

ほつほつときめきだした紫陽花よ

涙で濡れた栈橋の色が好き

松江市 松 本 知恵子

クールビズノーネクタイに日が暮れる

父の遺志守り続けて草むしり

悲しみが解かるか猫が寄つてくる

うぬぼれた高さ危ういハイヒール

唐突の決断揺らぐことはない

松江市 松 本文子

咲けば散る花の命を受け止めて

勢いを増して若葉は山守る

野仏に今日の運勢聞いてみる

女の度胸はお一人さまになってから

調子出ない朝は誰かに電話する

松江市 石 橋 芳 山

残像を追って走っている記憶

なまいきな風がコーヒー飲んでゆく

ベテランは動かず横たわる鯨

小刻みに眠って待っている夜明け

終わりにくヨモツヒラサカ逆走す

出雲市 伊 藤 玲 子

鬼平に夫をあずけてクラス会

沢山の出会いもらった禿びた靴

肩が泣く悲しみ振り落すよに

悲しみを黒に包んで耐えている

あの頃は楽しかったとスニーカー

出雲市 小 白 金 房 子

夏掛の鯉にもほしい水の音

七輪の煙が匂う鮎の里

エスエルの面影偲ぶ大社駅

ひと言を通す女の遅刻くせ

灯台を背に海猫の乱舞見る

出雲市 岸 桂子

先に読む新聞折り目崩さず
春のページに寝返り打った跡がある
下戸なりに酔って捨てたいこともある
盛り上るタマゴの黄身に朝の風
わたくしを叱って呉れた若い医者

出雲市 多久和 敬子

その内に言つて十年会わぬ友
梅雨晴間心の扉開けておき
私の心の中も知る鏡
とろろ芋親子の絆深くする
年金で孫の人氣を奪い合う

出雲市 富田 蘭水

ある命せい一杯の青空に
陽光に昨夜の罪を恥じている
生きるなど天上世界の言の葉だ
ポリープに大の男が泣いている
運命とや神も仏も遠慮する

美作市 山本 玉恵

夢ひとつ抱え直してまた明日へ
言い訳につまり深爪してしまふ
次は何を結んでひらいたてのひらで
ねむらせぬ風が心の戸を叩く
胸の襷にわすれな草の種ひとつ

美作市 大石 あすなろ

聞き上手はじめて聞いた顔をする
程のよいテンポで廻る夫婦独楽
おしゃれして鏡の中で照れている
手に余る事をうっかり引き受ける
まだ叩く胸の扉が開くまで

竹原市 石原 淑子

母と子をつなぐ臍帶うすくなり
姉おくる脱力感の仏間の灯
御疲れさま透析三十年姉の逝く
魂をとぎどき磨く海の碧
草の実のまとわりついて勢力国

竹原市 岩本 笑子

振り向けば一人医者から帰るバス
ゴーヤ植えたのよ夏を待つてます
ひかえ目な眉を鏡に問うている
まっすぐに歩けば猫がついてくる
天体ショーきつと太陽笑つてる

府中市 馬場 利子

歎もつ野良で癒される友がいる
優しさに頑張る意欲ふつつと
電線に巣立ちの燕目が潤む
夢一つ抱いて明日の風に乗る
いいドラマ盛りたい夏の絵皿拭く

府中市 藤岡 ヒデコ

一人居の姉は淋しき顔にせず
年一度乾杯出来る幸せよ

補聴器を外した耳は宇宙人
猫君に姉を頼んで手を握る
姉の住む大家さんには恩がある

府中市 岩本 雅代

鯛よりも小さいわし好む暮しぶり
さわやかな風とたわむれ蝶が舞う
糠味噌の匂い沁みてる父の桶
恋人の子ぶも可愛いそれもいい
梅雨曇り頬杖で待つばた餅を

宇部市 高山 清子

格安の裏にかくれた落し穴
脇役も時にはライト欲しくなる
正論が日の目見るとは限らない
ライバルがニッコリ謎をかけてくる
掛け違うボタンお洒落の君も老い

宇部市 平田 実男

咲き終えた花へ感謝の有難う
まだ傘寿三度三度のうまい飯
ワンカップ注ぐと舌が回り出す
没句でも落してくれる脳の錆
鳶が鷹生んで過疎地へ老い二人

東かがわ市 清川 玲子

加齢とは悲しいことよ眼の手術
きれいな目してると気づく手術以後
一つ傘の絆作つてくれた雨
母の日にはあちゃんと呼ぶ孫が居る
大空の画布に楽しい夢描く

東かがわ市 川崎 ひかり

一日のメニュー鬼平 座頭市
万歩計緑のシャワー浴びに行く
後は散るだけのゲームを楽しまん
息継ぎが上手になつて都会暮らし
宝くじ当たれば足りぬ余命表

松山市 古手川 光

原発停めて電力足ると困るんだ
笛吹くの下手で国民踊らない
薬飲むために生きてる訳じゃない
御巢鷹山想い起せと盆が来る
あんな大人になりにたくないと言われそう

松山市 宮尾 みのり

速すぎて大事を零す世の動き
行列がおいしい味を倍加させ
結婚願望薄れ設計建て直す
この歳になつても母として試験
突き詰めて独りの殻に閉じ籠もる

大洲市 中居善信

農政つて何だ赤字の出る米価
コップ酒あれば口止めだったのか
万歳で寝ている時が幸せて
あくまでも正攻法が僕の主義
ご法事の経に眠たくなってくる

高知県 小澤幸泉

孤独死の友を呼んでる九官鳥
しわの手が煮る故里の味と色
核かくし地球のハトを黒く染め
油断なく生きて疲れと空しさと
マンガ本四角に並ぶ荒れた部屋

唐津市 井上勝祝

爪弾きに嬉しさの増す雨が降る
熱帯夜ステコだけの酒を酌ぐ
節電にゴーヤを植えて裸酒
窓を開け登れぬ山を眺めてる
妻の愚痴ひとと較べる幸せ度

唐津市 坂本蜂朗

定年後いまだ大器の芽が出ない
からつばの自覚が老いを駆り立てる
晩年の設計子等を削除する
腹中の鬼押え込む世間体
穴だらけの妻が小穴を指摘する

唐津市 樋口輝夫

有り余る金に苦しむ夢を見た
折れたバットでヒットにもなる人生譜
木に登る子を柿の木が待つている
二次会の不義理を妻にほめられる
泥棒も防犯力ギは必需品

唐津市 山口高明

世襲までさせるおいしい御商売
花愛でる心境まだと病みあがり
鎧着ておんな頑な打ちとけず
ゴキブリも殺せぬ夫の人の良さ
ホタル籠下げて明かりを消す座敷

(前月分) 八尾市 宮崎シマ子

オレオレへ私石女ですと言う
ヨイショと言えば足が立つ不思議
斜に構え男の出方待っている
政治家の脳働かぬパピペポ
母の日にこぬ来年もこないだろ

(前月分) 和歌山市 福本英子

皆既日食見るまで首を慣らしとく
母の日も独り茶粥を炊いている
朝晩に痺れた足の機嫌とり
荒波の世間で苦労した笑顔
手を繋ぎ合わせて避難訓練に

(前月分) 大阪市 近藤 正

遺志を継ぐ無名戦士の碑に献花
再稼働撒き餌の効き目じわじわと
国会が袋小路に入り込む
終い風呂ひと山越えて明日を練る
消費増税やりたい党がつぶし合い

(前月分) 吹田市 大谷 篤子

刺があり美しいからバラが好き
庭の草引いて許せる答でる
お洒落した靴にはずんで春の街
自分色薄めて人の輪に入る
優しさに触れたくて手を伸ばしてる

(前月分) 松江市 川 本 畔

すねの傷押さえただけでまた笑い
マスクをはずし本当の私みてもらう
見送って涙の中の点になる
さよならに激しく揺れるブルーランコ
故郷の駅から風は吹き止まず

(前月分) 泉佐野市 山 本 蛙 城

真っ白になるまでチビた靴洗う
前頭葉疲れ眼鏡が曇ってる
幸せな舌でタラレバくり返す
四月馬鹿維新騒ぎは見ないふり
引出しに埃まみれにいる残夢

(前月分) 福岡県 林 さだき

生活を中流に置く恙無く
ナンバー2の椅子で終るか男の背
表向きバランスとれている夫婦
胸を打つ津波くぐった生の声
宮仕え今完走のテープ切る

(前月分) 東大阪市 米 田 水 昇

街こがす花火は町に活入れる
病室の窓に身を寄せ花火見る
打ち上げの花火待つ間は歌合唱
つつじ咲く院の庭見て家思う
庭に住むしよりうらばった子供背に

(前月分) 出雲市 石 倉 芙 佐 子

蜚川今年は大きな痛手受け
今もまだ誰かを待つてる蜚龍
きりぎりつと結んで泪は見せぬ
蜚草涙は露の玉になる
あれから六十六年戦の傷はまだ残る

(前月分) 堺 市 大 久 保 の ん 子

温かい人の情けにしばし酔う
ポケットの夢のかけらがよく喋る
テーブルの対面夫はもういない
どう化粧しても鏡は変わりなし
一兵卒のままで喜劇の幕が降り

川柳塔の

川柳讃歌

⑨2

木津川 計

落ちぶれた人にも妻の待つ灯り

富田 美義

岸本水府はある日、電車の中でボロボロの服を着た外交員らしい老人を見て、頭が下がった。スリ切れた袖口や上衣のへりに、細い布をあてて被せ縫いしている。頭が下がったのは着ている本人より、これを二日ぐらいかかって繕った内助の功に対してである。

詩は、金持や勝者にでなく、貧乏や敗者にあらという詩人の言を美義さんは思い起さす。

まこと貧窮、落魄の夫を待つ、温かく懸命な妻にこそいつの日か平安の訪れんことを。

男ってつらいよなただた無言

井上 じろう

売文があるなら啖呵売の寅さんは売舌の徒であつた。つらい寅さんはことば数を多くして耐えていたのだろう。

だが大方の無口な男たちは、何も言えない。神戸で小室等を聴いたある日、(淋し

いのおまえだけじゃない、のフリーズに涙した僕だった。昨日見た「梅ちゃん先生」の親父も梅ちゃんの姉の嫁ぐ日、便所に入つたまま出てこなかった。わかるわかる。じろうさん、男はやつぱりつらいなあ。

福引をするさびれた商店街

高島 啓子

月に何着かしが売れない、さびれた商店街のファッション店で、パートで働く女性が経営者に申し出たのだという。「奥さん、わたし辞めてあげます」。つらい話はここにもある。そんな商店街が福引きをする。福をもらいたいののは廃業寸前の商店主だろうに。わずかな福を引当てた客も、儲かる店の還元ならいざ知らず、傾く店の助け合いが察せられるほどに、啓子さん、当てた方もつらいなあ。

内臓が内部告発したようだ

森山 盛桜

二年前の五月の夜、心斎橋駅へ向う僕の左手と足が突然しびれた。軽い脳梗塞だった。前日、松江で所用後飲み、翌朝帰りの車中でもビール。その足で観劇し、関係者の打ち上げ会で飲み、二次会でまだ飲み、ドクターが言うに「水を飲まずの脱水症状で血液はドロドロ、詰まって当り前ですよ」。その間でフ

ラツキの後遺症が残り、今も治療に通うのも盛桜さん、内臓の内部告発だったと後悔するのです。ご同輩、慎んでこそその命です。

エンピツの文化 一生の友だち

川端 一步

僕もエンピツ党である。一切の原稿をエンピツで書く。なぜか。消しゴムで正し、綺麗に仕上げたいから。それならパソコンで文字入力すればいい、とは思わない。使えない訳もあるが、字面が硬い。エンピツはやわらかい。「つゆのひのえんぴつの芯やわらかき」(辻征夫)。ただエンピツ党は試される。我が身を削って人の為に尽くし、一本芯が通つてこそ。一步さんにこそふさわしい文化だ。

風紋の戯れに酔つ風の私語

坊農 柳弘

何万年を費やして地層の生まれるのを思えば、風紋の砂漠の下にはかつて栄えた最初の都市が埋葬されているのだ。

気がつけば風紋の芯と立つわれが亡ぶまえ脱出したる(憂愁都市)(野村米子)

人には皆憂いなき暮らしや環境が保障されていなければならぬ。「東京砂漠」や「大阪砂漠」に砂嵐が覆ういま、風紋の戯れに風が酔う、そんな時こそ平穏というべきだろう。(『上方芸能』誌発行人)

新川柳鑑賞 (6)

麻生 路郎

惡しざまに話せば妻も敵にして

(日 満)

「あいつは実に怪しからん。課長にゴマばかりすりやアがッて」

「ホントにいけすか人ですわ、この間も斯う斯うですの」

というところか。妻も案外本気になつてゐる。

湯の宿も鶴の間と云つ老夫婦

(玲 人)

温泉宿に老夫婦が泊っている。その部屋に鶴の間という名ふだがかかつていた。それだけのことであるが、老夫婦に鶴の間とはなんとふざわしい部屋の名であらうと感じたのである。いかにも淡々とした表現で、味わいの深い句である。

麥をまく夫婦が霧にへだてられ

(知恵美)

田園風景の写生句であるが、くめども尽きぬ情緒が流れていて実に美しい句だと思ふ。この句はごく素直に見たままを詠んで

あるが、それでいて充分に情景が出てゐる。子へ便り書く妻老けて老けて見え

(日 満)

妻の筆には斯うある――

「あんた近ごろ、お小遣いを少し使ひすぎはしませんか。お母あさんはハタで見てゐる訳ではないからハッキリしたことは云えないが、どうもそのように思われてならない。お父さんが達者で送れる間はいいけれど出来るだけしまつをして、少しは貯めておきなさい。近ごろはお父さんもメツキリ年をとられて、白髪が目立つて殖えて来たし、それにだいぶぶしようになられたから先が案じられるような気がする。それにつけてもお前のことが氣になつて氣になつて仕方がない……」と綿々として尽きるところを知らないのである。そうした妻の姿を前に父は静かに盃を手にしているのかも知れない。何んだか、しみりとしたものを感じさせられる句である。

数きのしの重しとなつただけで暮れ

(香 林)

市井の凡人の平凡な生活を詠んだ句には違ひないが、そこには生活への反省があつて軽々には見過ごせない句である。いつきに読み下だして、何んとなくしみじみとし

たものを感じさせるではないか。啄木の歌の歌の淋びしさという言葉が云えるとしたらこの句にはそれに通じる淋びしさが漂うていると云えるだろう。

夢もなくおむつで窓を皆塞ぎ

(矢寸志)

結婚をしたら、あアもしよう、こうもしようといろんな夢を描いていたが、まもなく次ぎ次ぎにこどもが生まれたのである。こうなると華やかな夢にあこがれるどころか、日々の生活に追いまくられてゐるのである。「おむつで窓を皆塞ぎ」で現実のきびしさがよく表現されてゐると思う。

チャームする努力もせずに妬くばかり

(満 秋)

りんき深い妻を詠んだ句はかなり沢山にあるが、この句のように、夫を魅するだけの努力もせずに、ただ妬くばかりだと詠んだのは珍らしい。男女同権だから、特に夫をチャームする努力などは要らないではないかとは言えない。チャームする努力と言つたところで、美容院通いを要求している訳ではない。夫婦がお互いにチャームするものを持ちつづけることが和合の秘訣だと言へると思う。

(原文のまま)

自選集

小島蘭幸

大人買いたしたスイーツを食べて初夏
急に雪花菜が食べたくなった昼ひとり
書齋閉めると孫は諦めたようだ
一日裸足このあたたかさはなんだ
とぼとぼ行くか犬の影僕の影

津守柳伸

2時間を釘づけにするサスペンス
ありがたい温泉効果知った足
脱原発子孫に胸を張れるよう
期限内処分に迷う非常食
夕暮れるお庭に響くししおどし

遠山可住

御近所のニュースを待合室で聞く
里守る老いへ蛍が飛んで呉れ
金環食見たぞ冥土のおみやげに
雷は好かぬが慈雨をありがとう
サービスのよい葬儀屋へ予約する

都倉求芽

太陽光パネルにひまわりの賛歌
少子化の世に辞書にない言葉増え
羽たたまよそ見をしてる千羽鶴
三輪素麺加茂茄子鮎に冷や奴
雨のち晴れ自然のとおり夫婦仲

土橋螢

長生きの薬玉露をのんでいる
煙吐いて癌ではないか確かめる
正座して合掌をする刑もある
露となり北斗七星からこぼれ
雨がふる此処にも源氏物語

中原諷人

惜しまれつつ牡丹芍薬バラの花首
年輪の数ねぎらいの樹ですから
気遣いのこころを遺す母の言
ドクター曰く身も脳も使いすぎ
もう少し生きろよ給油してあげる

西出楓楽

金の要る正論にみな押し黙る
踏絵踏み家族を守るためならば
呆けぬようせつせと好奇心磨く
砂糖菓子ふわりと溶けて許し合う
竜巻のあとが確にある日記

仁 部 四 郎

今昔に昭和を分けた十五日

忘れたい人もいるとか十五日

九条の重さを測る十五日

休日にしてもよさそう十五日

武道館でいっしょに祈る十五日

波 多 野 五 楽 庵

根も葉もない噂話にまどわされ

エプロンに包み夕陽を持ち帰る

みつまたやみな首垂れて花盛り

海堂の花のうつつやおぼろ月

老いの背のなんと日陰の軽はずみ

林 瑞 枝

浜は混み新聞敷いて見る花火

優しさで検事こつそり自白させ

神域にて出逢う同期もいる祭り

瑞雲の天女が慈悲の花を撒く

夕映えの神の鎮座す流れ雲

前 たもつ

人住まぬ生家に蛍舞う頃に

ジェット風船過保護すぎぬかタイガース

あれもやりたいこれもしたいとはや傘寿

癒しなさい休みなさいと夜が来る

価値観を変えた聖書の厚さかな

政 岡 未 延 子

のんびりじゃなくて頭が悪いだけ

のんびりが迷路の中はすばしい

旅から戻ると表札変わった

稲妻はきつと私を叱る声

ほほえみの裏側の声聞いている

三 宅 保 州

どうしても他人と思えない蛍

今宵限りの命と知っている蛍

うなづいてくれた師匠の褒め言葉

ご自分の影を踏んではいけません

八百万の神でも駄目なものは駄目

宮 西 弥 生

節節の滴に撃たれ厄払う

きらきらと光らなくとも弾むもの

咲くいのち散るいのちにもある美学

へこんだらあかんあちこち釘をうつ

もう強くならなくてよい日のマンガ

八 木 千 代

バスに乗る 向かいのヒトの夏帽子

帽子売り場へ一気に運ぶエレベーター

異邦人みたい囚われ人みたい

さまざまの視線に帽子絡まれる

会釈して帽子のままですれ違ふ

八十田 洞庵

おとなりの主をほめる妻の愚痴
孫のよな医者のおに叱られる
ひとつだけ秘密を提げた旅土産
神様の笑顔がほしい鈴を振る
人間の靴神妙に上を向く

両 川 洋 々

再起へのハート洗濯しておこう
老後だと笑うな恋もするつもり
極楽のつもりへ地獄門があく
汗しみた金で明日のパンを買う
あの日から線量計が手離せぬ
地獄から鬼と手打ちの酒を飲む

河 井 庸 佑

明日生きる今日の努力を怠らず
天の邪鬼と知って逆手に取ってみる
先の先読んで即答せずに置く
頑固な人納得させる手を模索
振り上げた拳を下ろすのに思案

川 上 大 輪

私の前を横切って行くわたし
戦争がないから僕等生きている
燃え尽きて灰になってもまだ私
百均は誰も値切らず買ってゆく
母はまだ種火のままで耐えている

木 村 あきら

歓待をされて酸欠気味になる
無位無冠今日も一日昏れてゆく
車では来るなど酒も出るらしい
三人が寄ると派閥が二ツ出来
曾孫守り使い古しの童唄

小 西 雄 々

漫画には不自由しないわが故郷
歯切れよい言葉も消えて株下落
誘われた花野に夢は落ちてない
タイムスリップ楽しさばかりではないよ
テレビ見て肩の凝るのは何故だろう

斉 藤 菰

紫蘇の葉に包みましょうよ母の梅
地球色昔はもつと青かった
労って洗うと白くなる軍手
手品師が帽子に摘んだサクランボ
一杯の清水に心洗われる

板 尾 岳 人

五階の窓自殺防止と書いてあり
一、二の三母より軽いものはない
キリンの死通天閣は毒舌だ
ぼくをはうんこのように生んでくれ
一億円あれば許されるのですか

奥田みつ子

若いと言われ年を忘れていた傘寿
売られた喧嘩ニツコリ躲す大人だな
やわらかいタツチに秘めた堅い意志
控え目な人の一言囁みしめる
開運のチャンス誰にも無限大

塩満敏

傘寿でも爪だけは良くのびている
マスコミが大阪市長持ち上げる
その内に国産横綱出来るだろ
妻の庭朝顔の種まき頃だろに
健康は宝と思う傘寿です

新家完司

山鳩の声だけ届き初夏の空
大伽藍きらめく法衣こけおどし
黙秘権行使している神ほとけ
辻説法する坊さんはいないのか
翼はためかせて一日が消えた

恒松町紅

老いてまだ並べてみたいものがある
この歳へよくぞ生きたと手を眺め
不自由な足で負けない老いの知恵
長老とおだてられても気が乗らぬ
大正の目には日の丸よく映る

温故知新

『清水白柳遺句集』より

矢車のまわる音から湧く希望
渚に立てば信じたくない色ばかり
柿の葉が落ちる縁側だれも居ず
三角の底辺に居て肩が張り
地下鉄の土を夜中のダンブカー
ラッシュの中の子供は俺れだけか
銀行へ来てもせっかち座つてず
拍手のひびき日本の夜をこめて
労資協調して公害の煙出す
波がなければ広い海原
宇宙船架空ではないテレビ見る
生花の麦は不幸なかげを持つ
大阪に住んで先祖の名を言わず
喪の家の手洗いを聞く夜の冷え
塗るコツも教えてペンキ置いて去に
銀行で非力を知って待たされる
無帽主義日向をあるく手をかざし
眼を閉じて漫画の主人公になり



川 上 大 輪 選

岐阜市 平野 あずま

夏賛歌庭のゴーヤでビール干す
句作りに夢中わが駅乗り過ぐす
オクターブ上げ初蟬の自己主張
孫育ち猫の甘えを許す膝

チームプレー見事金環つくり上げ
シンプルな暮らしにボタン多過ぎる

西宮市 泉水 冴子

エンピツと紙に試されてる頭脳
せめてもの救いは脳がまだ冴える
骨盤が歪んでしまいそうなヨガ
半額の頃合い知っている財布
勧めてはくださいますがお節介
自家製の青汁こんなにもうまい

高槻市 田中 由美子

争うて座った椅子は堅かった
よかよかと九州弁に救われる
過ぎたこと諦めきれぬ駅がある

丸ごとの私を庇う傘がある
TEEブカット汗を知らない人ばかり
ケータイの指から熟れる青い恋

富田林市 山野 寿之

贅沢に遊んで鱗光らせる
虚と実の真ん中辺に擦過音
今日だけは自分を捨てた花の芯
間引きされきれいな薔薇になり損ね
内定はもらったけれどまだ自宅
何気なく投げた言葉が胸抉る

松江市 藤井 寿代

一人来てひとり楽しむエトランゼ
虫カゴにうぬぼれ屋さん飼っている
せつかもウエットも混ぜ私です
綿棒がズバリ核心突いてくる
ブライドをくすぐって味方につける
増税の前にする事あるでしょう

紀の川市 楠原富子

失敗を知っているから温かい
ほがらかな妻にもあつた泣き所
ガラス窓明日へ進むため磨く
小さい嘘でほころび出した接統詞
旅の宿業という字に添い寝する
かた結びやつと歩調が揃い出す

大阪府 神野千恵子

金環食いつもと同じ朝ごはん
一分が長く一日短い日

楽な方楽な方へと滲む色

茶筆筒でワイングラスがソワソワし
ショーウィンドー映る私にはつとする
群れに居てひとりぼっちを思い知る

米子市 加藤正二

遺言に愚痴も忘れず書き添える
人生は少し曲つて味が出る
なるようになれと決めたらよく寝れる
ゴミ仕分け認知予防のストレッチ
さっぱりと頭を刈つてクールビズ
年の巢を掘れば病が顔を出す

岡山市 工藤千代子

水漏れもあつて夫婦という奇縁
烏賊くるり剥いで無実を言いつける
箸先をするりと逃げるあれやこれ

美しい言葉に蹴躓いている
心ない指の気ままなお約束
指紋消ししばらく枯れているつもり

河内長野市 穂口正子

オペ室へおつと涙がこぼれそう
退院だ鼻唄まじりでパジャマ脱ぐ
美容室嘘も混じえて三時間
アップアップ言葉の海で立ち泳ぎ
家族葬ちよつと地味だがこれにする
なんとなく長生きしそう旨い桃

奈良県 谷川憲

雲行きが怪しくなつてきた日本
竜巻に地震地球が呻いてる
ひよつとして滅びの道を行くヒト科
纏向に卑弥呼の影を見るロマン
煩惱の淵に溺れて足掻いてる
明日香路を緑風頬に万歩行

大阪市 高杉力

ベビーカー乗っていたのはマルチーズ
釣り好きにもらつた魚捌けない
指名手配の懸賞金にも格差あり
念入りに化粧するから怪しまれ
足に来て眼に来て老いを受け止める
だんじりをバイトに頼む高齢化

今治市 渡邊 伊津志

生き残る勇氣を呉れたのは笑顔
笑顔からきつといいこと湧いて来る
戴いた笑顔を次の人にあげ
善人の笑顔は汗を惜しまない
怖れ入りましたと笑顔付けておく

神戸市 新保 登美子

お隣りと競ったローンまだ残り
片付かぬ部屋に遺せる物が無い
書き足した痕跡のある五重丸
パソコンに本音がいえる削除キー
欲のない人といわれて手を出せぬ

神戸市 能勢 利子

子の遊ぶ場所なくなつてゲーム買う
老人の元気な街が住みやすい
定年後肩書きゼロで勝負する
赤点になりそな夢を今も見る
試食したらカゴに入れてる気の弱さ

川西市 山口 不動

小遣いを増やしてやるか声変り
目の色が変わるポイント五倍デー
順番を先に延ばしてえんま様
介護付き施設に入れる親離れ
ご近所は即かず離れず穏やかに

篠山市 佐々木 勇

今にして起床ラッパが消えぬ耳
補聴器も字幕が主役とは無念
成る程ねどこから見ても姫路城
コーヒーが美味いと思う葉づけ
消えそうな私の昭和浮いている

三田市 尾崎 一子

もうあかん子供の前で言いません
よい事も悲しいことも知らせてね
一億円当たるときつと動かない
身体が改造されていく長寿
無になろう無理をするから欲が出る

和歌山市 小川 イセ

母の日の真つ赤なバラに刺がない
母の涙笑顔の裏に溜めてある
今日駄目でも輝く明日きつとある
ダイヤ婚静かな日日のありがたさ
普段着のリズムで暮れる幸せ度

和歌山市 坂田 喜久子

子育てに時どき角が生えてくる
利かん坊反省の都度背が伸びる
鬼瓦夜にはいびきかいている
大胆なくしやみに会議和みだす
連れて出たはずの雨傘また迷子

和歌山市 北原 昭枝

反対をされても好きな道を行く

ときめきの風を選んだ交差点

長雨が抑えてくれた先走り

南天の花がきいてたひとり言

じつとみる鏡の顔にある本音

和歌山市 磯部 義雄

頷いている横顔が頼りない

勇気ある決断免許証返す

強がつているが私は恐妻家

薬のむ時間忘れるほど元氣

水虫がチヨロチヨロ走る嫌な梅雨

紀の川市 辻内 次根

抵抗は止せと私が二人いる

錠剤が増えた頃から出た不調

生きているだけでと祈る妥協点

背中から心の中を覗かれる

苦くない薬で効いた氣がしない

米子市 野川 宣子

床のキズ孫もおもちやも怒れない

夜が更けてママとおもちやは羽根のぼす

父という大きな傘が無くなった

話の種に珍味ばかりを食べている

猫の手も借りて修羅場を乗り越える

雲南市 菅田 かつ子

両方に聞けばそれぞれごもつとも

古漬の重石に耐えてきた旨味

ともすると斜めに歩くボールペン

針箱の中から諭吉ひよつこりと

まっいいか明日の風に吹かれよう

岡山市 前田 恵美子

耳鳴りも先生いわくお年頃

おもしろいそう思えるとおもしろい

腹の中割って話せる友の笑み

忙しさを忘れてしまう猫の伸び

沈んだら浮くまで待とう楽しんで

岡山市 藤成 操江

どっちでもいいよいつも逃げられる

二杯目のコーヒー街は本曇り

あきらめた夢を数えている深夜

成行きを確かめてから手を上げる

幸せな人の不満を聞いている

岡山市 永見 心咲

素で生きて土踏まずなど消えました

撫で肩にアンバランスなビール腹

玄関でシャチハタが待つ中元期

素麺が羽衣の様鍋で舞う

茶摘みつ娘カメラ目線て手が止まる

備前市 森 ふみか

口笛を吹いて畳んだままの羽
着てるもの脱げば飛べるか思案中
花の下やはり二人の方がいい
一日に一度くすぐるだけの仲
鉢土の中で成仏する未練

広島市 岸 本 清

友逝きて言えずじまいのありがとう
この所ガッテンしてもすぐ忘れ
相槌を打ってはいるが目は違ふ
心まで真つ赤に染まる茜雲
老いてなお若さを保つ好奇心

竹原市 土 井 輝 恵

孫巢立ち疊カーテンリニューアル
健康寿命だけは平均クリアした
巢立ちした子だよ大目に見て置こう
母泣かした分だけ子には泣かされる
お百度を踏んだ神にも御無沙汰し

阿波市 三 浦 千津子

ユーモアを継ぎ足し弾む話の輪
爛漫のさくらに老いも染まりきる
爆笑の山のオゾンに深呼吸
風薫る生命線が伸びて来る
阿と畔の呼吸ためらい等知らず

大洲市 花 岡 順 子

言い訳は有象無象のマニフェスト
ぶつきらばうへ言葉半分足してやる
あったかい画布に老後を描いている
好奇心たまに危ない目にも遭う
クールビズ心を軽くしてほしい

香南市 桑 名 孝 雄

生き方の試行錯誤はしておれぬ
折角の酒が泣いてるイツキ飲み
吐き方も覚え一人前の酒
原発も怖い暑いのも嫌い
カラフルな傘で癒やしてもらおう梅雨

唐津市 吉 富 節 子

原発がうやむやのうち再稼働
末席に居ても出る釘打ちますよ
檜山は近し足踏み堪えてます
趣味増えて苦勞もあるがボケ防止
チラシから加齢黄斑目の手術

福島県 七ツ森 客 山

約束を守れぬ時間指定され
怒ってる貌をま近に見てしまふ
自画像の指の先まで温かい
嬉しくて冷たい水で顔洗う
ところてん孤独な人の粹な味

横浜市 川島良子

愚痴ったらワタシが壊れそうになる
どのあたり僕は走っているのだろう
なあるほどそんな考え方もある
田満が一番干渉はしない
物差しをボクに合わせていた誤算

横浜市 巖田かず枝

友が逝き悲しい酒を飲んでいる
銃無いが自分の事は守りたい
惚け防止ラジオ新聞ハーブティー
九十歳病院行きの服選び
原発が地震を前に揺れている

佐渡市 高野不二

誘われて中味は見ずにする署名
トキに助けられて日本一の島
当たら困るからくじ買いません
無料贈呈ばかり狙って見るテレビ
定年は早し年金はおそし

豊橋市 藤田千休

処方には金欠病と書いてある
ワンマンに吉報ばかり申し上げ
虎都竜都地方分権吼えまくる
浪費癖日本経済立て直す
自助努力ファンデーションは知っている

京都市 清水英旺

親友の訃報が心打ち砕く
また会おう別れた笑顔十日前
突然の死受け入れ難いままに通夜
遺影が言うお前は長く生きるべし
悔しかる寂しかるだが笑つてる

大阪市 太田としお

飛びついて老後の資金ファイにする
さすがプロ飲んでないのに酔うたふり
奥さんにしてはとつても若過ぎる
豊かさの奥に墮落が横たわる
責任をとらねばならぬ自由主義

大阪市 柴本ばつは

ダム底にぼくの机が眠る村
関西のお方でしたか言葉じり
この思いとどくでしょうかすみ草
失敗の無い人生の味気なさ
せつかな言訳なにかありそうな

池田市 上山堅坊

向き合ってただ向き合つて老夫婦
とことん掃除してゴキブリに出会う
若い肌たつぷり見ようさあ夏だ
お地蔵へただなんとなく手を合わせる
ご都合はことの次第で何とでも

泉佐野市 稲葉 洋

手は少し働けるけど頭がね
南西で転び鬼門があっちこち
溜め息はほかそ笑いは取って置こ
まだこちら向かないでよね死に神さん
どうかしてと言うがするとは言わぬエゴ

岸和田市 宮野 みつ江

川柳を脑梗塞のリハビリに
麻痺の足いつかはきつとダンス靴
病など気にしていないスケジュール
一眼レフ麻痺の手足を忘れさせ
麻痺の足など気にかけてぬ好奇心

豊中市 池田 純子

穏やかに生きていますと春便り
欲しいものの山ほどあつて若くいる
お昼寝の言い訳薬飲んだから
美術館静かに手足のびをする
気合いだとアイラインなど入れてみた

豊中市 源田 啓生

病院の窓から見れば初夏らしい
胃カメラの後でもビール欲しい時季
胃カメラの技師さえ鬼に見える時
仰向いて点滴見てる長い夜
食事より薬の量にむせるのだ

富田林市 古田 千華

体調の悪さ他言をしたくない
甕の中藍すくすくと育つてる
ITと仲良く出来ぬアナログ派
ハイテクの街アナログもまだ元氣
亡父憶う泰山木が咲き揃い

寝屋川市 岡本 勲

歯ごたえのないものばかり箸が出る
つい油断飲んで忘れた妻の顔
好き好き好きと毎日言うの変ですか
才能と言えぬがとにかくよくもてる
押してもダメ引いても勝てぬ妻がいる

枚方市 河田 洋子

五月雨今日はゆつくり筆を持つ
連休はテレビで心の旅をする
昼寝してなかなか夜が眠れない
うちの犬お風呂と言えば唸り声
雨上がり播かぬ雑草占領す

八尾市 田邊 浩三

滝登る鯉の画下ろす定年日
山百合も哀れ除染の内に咲く
白百合の目線気になる血圧計
心地よく通勤靴に追い越され
明日の夢しつかり詰めた枕抱く

山鹿市 米加田 恭代

佐賀県 清水園 實

無常とは知りつつ今日は愁い節
財布の紐少し緩めて脱デフレ
ときめきだったらしいのにこの動悸
へそ曲げて雲隠れした金環日食

シドニー 坂上 のり子

札幌市 佐藤 登美子

行つた土地ふつと氣にして見る予報
ポツと咲くさくら茶に故郷しのぶ秋
焼き魚の残り香たまる部屋の隅
遠巻きに猫に窺われてる客

メルボルン 藤原 ポン吉

弘前市 高森 一 吞

立ち向かう氣持ちも萎える百の訳
ストレスを音でかき消すガード下
英語なら文句も齒抜けケセラセラ
責任を取ると言う奴逃げる奴

唐津市 岩崎 實

塩竈市 木田 比呂朗

小玉ねぎ袋いっぱい五十円
足腰の弱みを知らぬ旅だより
渋滞を眺めて動く耕耘機
スカイツリー昇りましたよ雲の中

唐津市 北村 松風

富山市 有澤 嘉晃

七歳のクレヨン虹の鮮やかさ
折り返すまではテレビに見えていた
酒仙だと鼻のあたりに書いてある
平和ですオババと猫が日向ぼこ

しじみ汁たまに食べたいひとり者
夏旅館蚊になやまされ夜をすごす
風邪ひいて何も食べたいものはない
ヒゲそつて風邪も治つて食うまい
シルバーへ誘われ役も待つていた
酒の席昔の自慢する男
もう七十自覚をせよと転ぶ足
想い出の歌は昭和のひばり節
花水木主亡きとてひとり咲く
古稀の坂むかえて登り急になる
定年はなくて農家の主役です
息子には話しておこう墓のこと
真夏日にああ腰痛と湿布葉
朝刊と老眼鏡で今日が開き
腹痛にゆうべの酒が顔をだす
意味もなく着メロまたも変えてみる
心頭を滅却しても妻の愚痴
負けて勝つ哲学がよく分からない
勉強になつたと損をした話
言い訳のために手帳を持つている

静岡市 渡辺 芳子

やめておこどうにもならぬため息は
気がかりが一つなくなり青い空
我が価値を認めているのは自分だけ
今日一つ良い事をした良い眠り

熱海市 三谷 圭角

声の出ぬ姉に文字で語りかけ
寝たふりの優先席の若者よ
高齢の静い八分は愜気から
貴重なり妻の日記の五十年

江南市 脇田 雅美

父ちゃんは母ちゃんが居て生きられる
ブレーキとアクセル踏んで古希の坂
いい天気日焼けするまで立ち話
初対面箸の袋に名前書く

愛知県 樺 嶺志

同病が読む気になれぬ闘病記
闘病記自慢がなければ読めるのに
次々と届く自分史困惑す
目立つねえ夏の式典クールビズ

昭島市 野口 忠

断捨離の袋に男入れてポイ
百均のいのちは思い切りがい
マニフェストなんののかのと反故にされ
来し方のキャンセルしたい二つ三つ

東京都 高岡 弥生

女子会で恋バナいつも盛り上がる
屋形船お台場夜景酔い進む
気がつくと今の幸せ忘れてる
出会いあり別れがあつて時進む

東京都 大竹 一良

家中で泣き笑いする面白さ
米寿すぎあと十年と願いこめ
逆らつて無理だと言われ意地が出て
ほつとする心の隙間つく油断

相模原市 赤木 妙子

初燕待つて待つて母の日に
子の帰り待つてた母の心地して
踏まれてもかたばみ低く凜と咲き
咲き誇る道辺の花の名を知らず

大阪市 前川 善之

旧友と会えるその日を指を折り
節電は昔やつてた夕涼み
何事もほどほどが良い人の欲
ほめられて不思議な力湧いてくる

大阪市 松田 聡

ドタバタ劇おもしろいけどつまらない
敗けがこみ勝てそうな気がしなくなる
耳元の一匹の蚊が眠らせぬ
だらしなく見えてやっぱりタイ締める

大阪市 平井露芳

ロンドンへ天皇私は梅田まで
継続は力で駄作四十年

コンビニの傘が待つてゐる俄雨
刑事課の手配写真に似た男

大阪市 吉田知之

年重ね知つてゐることは古い知恵

アナウンス聴こえぬふりで座つてゐる

コンビニのバック洗つてしまつとく

団扇手に縁台将棋懐かしい

大阪市 栃尾奏子

人生はドラマ私はアクトレス

暇という字を待らせて長電話

口ベタな父のカメラはよく喋る

節電と修行紙一重の我慢

大阪市 阿野寿美子

完走してあとで味わう爽やかさ

ほどほどのお酒にするは意志弱し

仕事して身に入らない腹時計

流行も自分本位で決めてゆく

大阪市 浅井公平

本を読みそれでもよい句出来かねる

本買つて恩恵あるのは五六日

機内食お腹空かずにまた食べる

年寄りはお医者通いも趣味のうち

堺市 近藤治子

夢の中亡夫は若くてはつらつと

右側の胸と交換した命

ボランティア極楽行きの切符買う

寝転んで座り直して読む柳詠

堺市 羽田野洋介

石と石何を語らう夜の古寺

真夜中に冴えた頭を持て余す

好奇心に背中押される習い事

歳重ね天狗の鼻も低くなる

堺市 増田和幸

公約は守らないこと公約に

百億円戦闘機で何処攻める

底割れた福祉日本高齢化

ツバメにも見限られたか初夏の空

池田市 多田契子

五月晴れシャキッと白い服を着る

調味料匂のものには勝てません

相談は無口な人に限ります

喜びが小さな事にもあると知る

泉大津市 助川和美

「あなた」にも語気の強さを区別する

定年後俺は留守番これもいい

母見舞うたびに遺言らしき事

離婚する勇気ないまま半世紀

貝塚市 石田 ひろ子

泣きに行く場所は畑の草むしり
朝採りの水茄子買いにウオーキング
鬱の日は頭空っぽにして食べる
大病の方が人気のクラス会

河内長野市 渡邊 修

グルメルポがさつな食に気落ちする
オペ待ちで視力ぼやけて皆美人
二人して名前忘れて指を指す
久々の背広姿に照れ隠す

河内長野市 山本 エミ

入選句燻ててくれる孫が居る
肉じゃがをほめて銚子を振って見せ
摘み取った蔀で佃煮母想う
肩の力抜くタイミング肩が凝る

河内長野市 藤塚 克三

メタボ腹凹まし女医の前に立つ
笑っても遺影に向かん俺の顔
孫悪さ言い訳嬉し俺に似る
似顔絵で性格までも写される

河内長野市 大島 友子

ジムデビューまずはウェアの品定め
老菜の恋にブレイキかけられず
何でやろ逝ってなおさら近い母
老犬が大丈夫かと鼻寄せる

河内長野市 辻村 ヒロ

連れ合いは内向的な見栄っ張り
ワンカップ喜ぶ顔が見える墓
おばちゃんウワサ話は雪だるま
ふるさとへ家族で帰る野良仕事

岸和田市 中岡 香代

ゲルニカの激戦語るピカソの絵
再会をよろこび咲いた花時計
熟睡を誘う電車の揺れ心地
ポジティブに生きて自分を切り開く

豊中市 石橋 優明

ケータイで話さずケータイと話す
胸のうちそおつとうつむきで示す
炎天下郵便ポスト知らんぶり
厚化粧梅干しに似て身がふるえ

岸和田市 増田 隆昭

口出さぬ義母へ暮らしの知恵を請う
最高のお洒落自然の贅えきかも
道端のゴミを拾うもボランティア
年金ぐらし引き算づく預金帖

豊中市 西村 康子

何処の家句の匂いが風に乗る
豆御飯母の手伝い思い出す
この歳でずばりと言えぬ自信なき
朝風呂にどろどろ気分振り流す

豊中市 荒巻 夢

日食に声あげる人捜す朝
鶯に応えて寝める山の宿
東北弁少し残つて蕎麦の店
友の手をさするベッドにみどり風

豊中市 貝塚 正子

足纏れ困る百足を見てみたい
まだ死ぬ遺言状が未完成
花占い好きと出るまで止められぬ
初恋はアナタだったの嘘に酔う

富田林市 関 よしみ

裏側の謀反が見える眼鏡買う
淋しくて金魚三匹飼つてます
軋轢と絆一緒に渦の中
華やかに私の色で翔んで見る

寝屋川市 山口 晴弘

忘れ物核の始末と拉致家族
プロポーズ振り返り見るあの勇氣
永田町吉本凌ぐ茶番劇
驚の子に飛べよ飛べよと急かす母

寝屋川市 小谷 滋彦

学校も道草も慣れかくれんば
親ツバメ雛に教える宙返り
青トマト色に味にも少年期
同窓会昭和の顔がみな老いて

羽曳野市 安本 美喜

イライラを書いて丸める儀式する
泣くかも知れぬのにハンカチを忘れ
蒲焼の高値手を替え品を替え
しゃぼん玉ふわりと生きて父と子よ

東大阪市 西田 いくひろ

少子高齢進み活気のない街だ
負けず嫌いの気張ると無理が祟ります
下心判ると酒もまづくなる
父の日にくれたネクタイしてはしゃぐ

枚方市 松原 保

大河ドラ判らぬままでつづき見る
学者さん予言のように聞こえます
迷いハトあの手この手でエサつつく
想定も当り外れが有ると言う

枚方市 坂本 ミヨノ

長過ぎる蟻の行列特売日
抱き寄せたい雨後のあじさい七変化
真夜中に浮かぶ一句が朝忘れ
尼の法話子守唄なりうつとりと

藤井寺市 田付 絹枝

筆持てば睡魔が襲う昼下り
観光地昔の風情店の陰
スーパールの特価で揺れる人の波
誇らしくベット抱かれて散歩する

松原市 市川 雄太

大阪府 畑 中節子

梅雨空が僕の心もしめさせた
人までも巻き込む闇の自滅心
頼られることに重みを感じます
一人でも生きれる術を学びたい

箕面市 酒井 紀子

毒舌の通じる友が独りいる
変化球受け止め熟女恋実る
心までカメレオンにはなり切れず
かくし味もつてる人に惚れました

箕面市 寺井 柳童

黄砂降るありがたくないプレゼント
梅雨の入り路地のアじさいよく似合う
そうだった今日は新聞休刊日
DNAの所為いつも納得してしまふ

八尾市 前田 紀雄

雑草を抜いて野菜の実り待つ
度忘れが時々有ってひよつとして
万全な計い涙止まらない
取り敢えず遺産ゼロです平和です

八尾市 山根 妙子

省エネで扇子うちわがもてもてに
トキの子に心の中で拍手する
山緑パッチワークにしてみたい
よき昭和日本のすがた佐渡の島

グルメ旅贅沢三昧一人占め
生き上手一人で今日も日が暮れる
句作りは自家菜園の農日誌
水鏡代田に映る藤の花

大阪府 小栢 こずえ

叶わない夢でもいつも追っている
まだ出来る思う自信が落ち穴
人の怪我聞いて自分をいましめる
今年また出来た喜び山椒つむ

大阪府 高木 道子

父の日の居心地楽し缶ビール
手加減も欲しい地球の変化球
スイーツは鯛焼ですの新茶添え
風鈴に程よい音色青田風

大阪府 西川 冷子

念押しして命ある間の契約書
早苗どき恵みの雨に癒される
滴りへクレソン嬉し井戸の水
犬と居て抜け毛切れ毛が舞い上る

大阪府 坂口 公子

見るもの聞くものみんな手中に欲の皮
一番の氣に入りようです勝負
又見てる孫の貰うた表彰状
善人の何故か競うていく冥土

神戸市 玄 番 美恵子

重い口開き昨日と縁を切る
薄紙を剥ぐよう風は春の色
こだわりを捨てて明日へのパンを焼く
節電に情け無用の夏が来る

神戸市 白 川 淑 子

とんでとんでタンポポ綿毛子沢山
若い娘のフラダンスなら見ると言う
たかいたかいスカイツリーの有頂天
好きやねんうどんたこ焼小麦党

神戸市 興 水 弘

雑魚だつて小骨がチクリ物申す
あの頃の休みの味が懐かしい
畏れ入るのべつ幕なし妻の口
頑固じい笑うと猫も腹見せる

神戸市 山 根 弘 子

お喋りがすぎて喧嘩の火種抱く
無駄骨を折って掴んだ今の幸
休み明けゆるんだ脳にねじを巻く
川柳で錆びないように脳みがく

神戸市 長 川 哲 夫

縄張りを分相応に生き延びる
眉間の傷時たまはよし猫の恋
傷心が風にもそよぐ心電図
ときめきを風にもらつた花言葉

神戸市 木 村 忠 義

生きるとは転んでも起き上がること
使わぬと頭と道具錆びてくる
修理より買い替えを推す十年目
マンガーを買うと現地へ行つたよう

尼崎市 市 坪 武 臣

五月病ちんぷいぷい飛んで行け
母の日に電話で会える安堵感
好きやねん骨まで上手く食う秋刀魚
私の終着駅は軽い骨

尼崎市 小 池 幸 子

過ぎた酒飲ませた罪の重さ悔い
どくだみの臭いに秘めた薬効果
さま変えて故郷の駅余所余所しい
恙無く老後二人の支えあい

加東市 岩 本 美緒子

ダイサーピス勿体なくも週二日
車椅子押し車混むケアー室
水墨仏画心の濁り洗うかな
絶え間なく飛び交うホタル目に宿す

加東市 黒 崎 美紗子

草ひきにやはり出ましたかゆい皮膚
気づかいの電話をくれるだけでよい
命日を忘れぬ娘有難い
医者へすぐ連れて行きます娘言う

川西市 日野岡 和之

縁切れぬ葉とともに古希越えて
ゴミ出しも大事な日課退職後
物置きは趣味道楽の歴史館
止まらない腹八分目とバイキング

篠山市 北澤 稠民

父の日も米送れだけ我が娘
禁酒してわずか三日でストレスが
花冷えが私の腰を苦しめる
指定席発車するまで落着かず

篠山市 谷 田 多美子

血圧をはかつて今朝も動き出す
シルバーの手帳見せ合う娘も老母
賽銭を弾んで追加の願いごと
春祭り福の神様かつぎ込む

篠山市 永 井 かほる

なやんでる心へ友の助け舟
ゆつたりとエンジンかかる昼さがり
見た夢を布団の中にしまひ込み
お誘いの電話嬉しい五月晴れ

篠山市 藤 井 美智子

約束をすっかり忘れ時過ぎて
物忘れ始まりだったらどうしよう
失敗が友のやさしい心知り
叶うなら無事に越したい母の歳

篠山市 石田 久子

大袈裟に騒ぎなさん猫の恋
叱られた先生呼んでクラス会
産声に心のうさも晴れてくる
何時からか子供のルール歩が揃う

三田市 雑賀 一泉

父の日に赤飯チンで終りそう
お人好しバレーているのに内緒ごと
電子化に押し出し食った辞書の山
携帯を冥途土産にどうだろう

三田市 辻 開子

古希前だそろそろヒューズが飛び出した
飲めぬけど暖簾の前で足止める
トキのひな不況日本に灯をともし
腰痛と口実つけて風呂めぐり

三田市 上田 ひとみ

肯定も否定もしない月あかり
何もいいことがなかった誕生日
どれ位なんて言えない好きだから
ポケットに聞きたいことをためておく

宝塚市 丸山 孔一

お遍路が野辺の土筆を避けて坐す
物欲しと思わなくなり風と生き
想像は無限の世界落語聴く
津軽弁湯の香に溶ける旅の宿

宝塚市 生駒利明

錆ついたレールの先に過疎の村
光さす上を求めて今日もまた
名も知らぬ花に見とれて時を知る
ハッとして気づいたあとであわて出す

西宮市 株元玲子

喜寿近し時計の針が急ぎ去る
句読点なくても心あればよい
思いつきり叱られ少し背がのびる
正解のない道楽しんで歩く

三木市 山口久子

病上り小春日和が身にしみる
肩書が取れ親父の背丸くなる
一日をたのしく過し明日がある
孫躰ぬかに釘打ちききめない

奈良市 前田弘恵

気は二十身は高齢の仲間入り
今日も無事暮れたと月に一人言
湯の中でど忘れ事が浮かびくる
親孝行死語となりゆく予感する

奈良市 尾畑なを江

ちらし寿司何もない日の奥の手に
なんとまあこんなところに遺伝子が
さておいて消費増税まつしぐら
あじさいとかくれんぼして座りこむ

和歌山市 平田元三

涼風がてぐすねをひくお盆過ぎ
使つてゐる夫婦茶碗の絵が古い
節電に協力昼は城の森
今年まだゴーヤー作り習うだけ

和歌山市 坂部かずみ

朝顔の蔓の予定が決まらない
入り用に夫が機嫌を取りにくる
手術後の友のおしやべり止まらない
空豆のフワフワベッド眠りたい

岩出市 村中悦男

いいわけをしない笑顔に魅せられる
たこ焼きの口中はねる熱いこと
生き方を上手にしたい老いの知恵
分解をしたが復元できぬ悔い

田辺市 大峠可動

カテーテル一刻二刻霧の中
魂の真上に神の影があり
視野炎えて風の涙を少し飲む
三分で五臓を癒す砂時計

和歌山県 森下よりこ

回覧板回すにも靴履きかえて
女三人今日も噂の花咲かす
あじさいが待っているのは降らぬ雨
ゆすら梅も茱萸の実も熟れ季移る

鳥取市 松原 ひとみ

新緑をくぐった空気レモン味
自家製茶葉酒のように飲んでいる
老老の介護の腰が軋み出す
若い芽を堅い頭が押し潰す

鳥取市 山口 千代子

他人から見れば幸せそうに見え
歩いてるだけで感心される歳
適当にお任せしますはむずかしい
夫婦でも言葉を選ぶものを知る

鳥取市 坂本 とも湖

大砂丘の夕陽わたしへ語りかけ
チューリップ大空見上げ合掌だ
巣立つ子へ宇宙は夢の道造り
いとし老母思い切り胸抱き締める

鳥取市 大前 安子

地球上心一つに出来ぬ欲
わがままな人間乗せた地球の怒
前の人ダイナミックな歩き方
内視鏡うねる身体は度緊張

鳥取市 津村 律子

ナメクジがレタスについて行く神戸
稼動拒否活断層のある不安
我が亭主軸に太陽回るよう
やさしそう余所の亭主もワンマンか

鳥取市 近藤 秋星

紫陽花は梅雨が恋人生き生きと
どの像も傑作砂の美術館
古里の田植え気になる老夫婦
節電の二字の載らない日などない

倉吉市 前田 喜美子

八十路生き兄弟姉妹みな達者
頑固です扱いにくい高齢者
靴下に若さルンルン老いの足
内閣は変わり変わるで何変わる

倉吉市 田中 紀美恵

下手な字よりメールですます現代っ子
ルイヴィトン五億当れば買って見よう
母の日の花には子等の愛詰まる
大津波教えてくれた生きる術

倉吉市 岡崎 美知江

もう少し生きると誓い手術台
しつかりとしている様でよく忘れ
指切りの手がいそいそと帯をしめ
背中押す風の道程心地よい

倉吉市 堀 かずこ

愛という言葉は甘いかおりする
麻酔さめ友の顔見て涙する
ど忘れで何を探してよいのやら
衣替えあれもこれもと捨てがたい

倉吉市 中村 毅

年ですか義理人情を語るのは見逃してくれぬ律儀なお巡りさん
戦前派生まれてずっと節電中
会釈してあれあの人は誰だっけ

境港市 中井 虎尾

我れ無縁ツイッターとかメールなど
党内に強い野党のいる民主
山佐川サンショウウオと鯉泳ぐ
雷は上にもあがるスブライト

松江市 山根 邦代

人並に空見上げてる天体ショー
横文字について行けない喜寿の花
絵手紙の毬がはずんで届いた日
金の無い者には詐欺も声かけぬ

松江市 武島 ちよえ

ユーモアの解せぬ人で遠ざかる
まだ余白あると信じて予定表
畑作りあれこれ口でお手伝い
ごみ溜る事も豊かと思わねば

米子市 見山 温子

雨の音聞きつつ昼寝農休日
あじさいが雨に濡れては初夏の色
田植唄唄う間もなく終えている
いさぎよく捨ててすすきり衣替え

米子市 田村 周子

年とって山菜などが欲しくなり
飽食のたたりが今にひびいてる
孫娘砂像の前でポーズとり
新緑の大山の空気吸ってくる

米子市 湯浅 久司

庭のゴミ拾い集めたレジ袋
あれこれとせねばならぬと言う時計
留守番に電話来客なぞ多い
先延ばし甘い予定を立てている

米子市 生田 寒之

間食に手の出るうちは死ぬません
そろり起きそろり血圧測る朝
紙コップにもありそうな上中下
用もなく行くこともない元職場

米子市 池岡 たけし

家族鍋湯気のなかから恵比須顔
降る雨は先立つ友の野辺送り
見た目より度胸のよさに気を引かれ
思い遣り共に二度惚れ三度惚れ

鳥取県 下田 茂登子

猫の目はあんたの嘘を知っていた
離婚した嫁でも嫁と呼んでいる
老夫婦今年も田植え出来ました
秀句には届かぬ句でも命がけ

鳥取県 大塚 美代子

初物を食べて三日は生き延びる
残り物食べてメタボになった腹
カップ麺一つが昼の留守メニユー
年金の額に合わせる暮し振り

鳥取県 田口 清帆

大飯原発突破口にして断層がある
クールビズさあ節電の夏スタート
金環日食ベイリービーズ歓声へ
大相撲日本国技はモンゴルか

鳥取県 橋谷 静江

朝一番おいしい空気散歩道
余生こそ夫婦楽しく暮す夢
やりかけを投げて立ち去る夫の癖
やる気だけまだ若者に負けないよ

鳥取県 飯野 菖子

写真撮る桜静かに待っていた
人柄はそよ風のように穏やかだ
ふとんには苦楽の染みが住みついて
満開の桜の下はロケ日和

鳥取県 岡村 孝明

定年後スイッチ弱に切換える
晩学の師は切抜きのページから
酔う程にさしもの虫もおとなしい
一合の晩酌疲れどこへやら

松江市 相見 柳歩

君だけが花に見えます恋をして
真実の愛でひとつになるふたり
おおらかにガラスのころろ温める
今いない人がガラスにされている

出雲市 黒目 英男

当たり前のように薬飲んでいる
信仰心親亡き後に試される
明日信じ自分を信じ歩いてる
過去よりも今が大事な吾が縁

安来市 原 煩惱児

腕白も強い奴には従いて行く
夢希望孫の笑顔に賭けている
臨時ニュースまた地震地震というテレビ
行き詰まり愛しい妻子が居てくれた

瀬戸内市 ^{ひがし}東 ^{まさ}嶺 ますみ

春風に拉致されそうな古帽子
ひたすらに耕す土はよく笑う
信号は青さあ鳥になりなさい
唇に女いつでも嘘を盛る

竹原市 若年 幸子

寒暖へ着るもの迷う旅仕度
幸せだと想う友の輪が温かい
喉にカビ葉またもや増やされる
壊れちゃった私の老いをミシン知る

省エネは扇風機からそよ風を

竹原市 六田 半 徳

救急車妻の入院十二日

老いふたり平素の声かけ思いやり

今日の無事夕陽に向かい手を合わす

四国中央市 篠原 久

ニコニコが取り柄いたって元気です

心優しい人だが顔で損をする

時価という魚回転寿しで食べ

七十路来て虫歯ひとつもない自慢

高知市 三谷 待太郎

採りたての野菜と元気お裾分け

邂逅がどうやら旅の極みらし

他所の孫そりやそうだけど宝もん

内うちでいつもゴタゴタ恥じないか

北九州市 小松 紀子

さあ食事猫が一緒に座ってる

老い猫の失明心痛めてる

失明の猫いとおしく抱いて寝る

独り旅やつぱり寂しい風の音

福岡県 本田 さくら

散歩道就活の愚痴ボチが聞く

パイパイと子つばめ元気まるで孫

牙むくタマ医者は悪魔に見えるらし

眉と紅ちよつと変身昼下り

大阪市 梅里 南天

夕暮れて夢に現に赤とんぼ

苦しけりや丸くなるさとダンゴムシ

蝶々が雲と戯れ落ちてくる

あかちゃんみんなダイヤに見えてきた

山鹿市 三谷 たん吉

手土産のケーキに託す胸の内

美酒に酔い明日の検診気にもせず

老骨の軋み潤す赤ワイン

手を膝へやさしくなでて怨み言

明暗を分けて命のありがたさ

（前月分） 福島県 七ツ森 客山

母の日を妻の日と読む知恵袋

セシウムが高い低いと逃げもせず

気のせいか主治医はいつも笑ってる

裏通りみんな無視する赤信号

（前月分） 東京都 井上 つよし

花びらも月も浮かべて露天風呂

茶柱が立つた甲斐無く参加賞

荷崩れを起して八十路冬ごもり

重箱の隅に弱気がつい逃げる

（前月分） 大阪市 吉田 知之

開店の花輪一本失敬す

街角の捨て傘にみるエチケツト

刑務所は衣食住みな税負担
入選に味しめ次も期待する

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発行)

昭和二十二年～三十年

盆栽のようにしつけがひんまがり

習慣にしては寝酒のしつこすぎ

気付かれぬように脇役腕の冴え

本店は東京ですが自慢なり

へべれけにちと窮屈な満員車

支店長の腕本店がけむたがり

雨蛙まであきれたり雨つづき

雨つづきせめてハンカチさらにする

実力と別にお若う見えるだけ

しぶちんで貯めて倅が飲みつぶし

昭和三十一年

浮世絵の美女の素足がつめたそう

この無理を聖天さまもてあまし

元旦試筆芽出度く鯛がはね始め

長生きもしたいし金も貯めたいし

蚊とんぼのような毛脛をいとおしみ

祝膳一つは亡母へ奉り

昭和三十二年

みち足りた子の横顔に涙ぐみ

はからずも等とやきもきしたくせに

アルバムに我若き日の紺緋

英語 de Senryu ⑧

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代
(岐阜保健短期大学)

女の浴衣がのれんになって揺れ

*her yukata,
altered a noren
is swaying in the wind*

六十一まだ情熱は燃えに燃え

*at sixty one years I am
a fiery passion
still burns within me*

～リバーウィローのため息～ (R・H・プライスと吉田機司の出会い)

戦後の混乱からまだ脱しきれていない時代であった昭和 25 年 10 月 25 日に、「英訳川柳史」にとっても、また「川柳の国際化」にとっても記録されるべき書物が出版されました。学習院で教職に就いていた英国人で俳句・川柳・禅の研究者である R・H・プライスと阪井久良伎に川柳を師事し、「川柳祭」を主宰していた吉田機司の共著による『世界の諷刺詩川柳』(日本出版協働株式会社刊)です。定価 190 円、B6 判の茜色の表紙には二匹の蛙が水たまりを眺めています。蛙の大きな目玉は世の動きを鋭く観察する川柳人そのものです。プライスは川柳を世界に通じる諷刺詩と認識していました。彼は初対面の吉田に、「なぜ、日本の方は、先祖や、自分たちの持っているものの良さを自分自身で認めることが出来ないのでしょうか。日本人が、俳句や川柳に見られる理想主義を、ほんとうに価値あるものと見なさなかったらどうして、他の國の人々がそれらを尊敬することを期待出来ましょう。川柳は日本獨特の人生詩で、日本民族が生んだ世界に大いに誇ることの出来る傑出した諷刺詩です。そして、詩の精神というものは、すべての人間に共通なもので、詩の心には國境がありません。だから、川柳は。ヨーロッパの人にも、アメリカの人々にもよくわかるのですし、又、つとめてわからせるようにしなければならないのです。」(同書序 pp.2 - 3)と語り、吉田はプライスの川柳観に驚きました。それまでプライスのような川柳観を持つ外国人はいませんでした。昭和 25 年当時、日本社会がアメリカナイズしていく中で、プライスのこの発言は日本人への優しい鉄拳であったと云えましょう。

誹風柳多留——一篇研究 84

山田昭夫・増田忠彦
山口由昭・小栗清吾
伊吹和男
清 博 美

655 みの笠にぶきよふなのがかゞみとき

山田 現在のようなガラスの鏡が出るのは文
化年間の初め頃だったが、一般に普及するの
はかなり後になる。それまでは専ら、銅鏡で
あった。銅鏡は金属製だから、曇りが入る。
そこで、それを磨くのが鏡研ぎである。鏡研
ぎは、加賀の国から、農閑期を利用しての出
稼ぎが多かった。柳句で見る限り、彼らは年
老いた、着付けなどもだらしない男という
ことになっている。

かゞみとき若い男をついに見す 寛元柳2
鏡とき前を広げてあるく也 傍五37

主題句は、加賀名産の簀や等を作れぬ不器

用な者が鏡研ぎになるというのだ。

かゞみのゝのゝ字をぬひてときに出る

安五梅1

しかし実際は、技術的には嚴重な徒弟制度
で代々受け継がれて行つた職人集団だつたよ
うである。

小栗 賛。「加賀簀」がわかれば正解。
清 賛。

656 熊坂ハしさつて払ふ迄ハよし

山田 熊坂は、平安末期の盜賊・熊坂長範。

彼は美濃青墓で、金売吉次に連れられて奥州
へ下る途中の牛若丸一行を襲うが、却つて牛
若丸に殺されてしまう。謡曲『熊坂』には、

熊坂が待ち伏せしているのを「牛若子は御覽
じて、太刀抜きそばめ物あひを、少し隔て、
待ち給ふ。熊坂も薙刀かまへ、互いにかゝる
を待ちけるが、いらつて熊坂左足を踏み鉄壁
も、徹れと突く薙刀を、はつしと打つて、弓
手で越せば、追つかけて透かさず込む薙刀に、
ひらりと乗れば刃向になし。しさつて引けば、
馬手へ越すを、おつ取り直してちやうと切れ
ば、中にて結ぶほどく手に、却つて払へば飛
び上つて、そのまま見えす形も失せて」と、
まるで五条の橋での弁慶さながらに渡り合つ
て、熊坂は「あの冠者に、斬らるゝ事」にな
っている。

主題句は、この文句取りで、熊坂は牛若
丸の太刀を「しさつて」薙刀を「払」うまで
は形勢も悪くはなかつたが、後が良くなかつ
たというのだらう。退さるは「前を向いたま
までうしろにさがる。あとずさりする」（日
国）。

熊坂ハ十六七にしめられる 三八19
牛の刀で熊坂ハ料られる 二六30
清 賛。文句取謝。

657 くじら汁わんをかさねてしかられる

山田 鯨肉は脂分が多く、その脂が食器に残

り、枕を重ねると外側にも付き、後始末が大変となるので、叱られた。江戸では、暮れの十三日の煤払いが終わつてから、鯨汁を振る舞うという習慣があつて、

江戸中で五六疋喰ふ十三日 安七礼2

という句もある。主題句は、その時の「コマ」と思われるが、特に限定する事もあるまい、と思う。

汁わんを井戸はたへ出すくしら汁

くしら汁四五日鍋のやかましき 明七梅2

増田 賛。おかわりを叱られる、ともれましようか。

山口 賛。やはり脂でしょう。

清 同右。

658 前髪のちらかつて居るとやのか、

山田 「どや」は「宿」を倒置させた隠語で、「どやの噂」は「売春の媒介をし、その場所を提供する女。私娼窟の女主人」(「日国」)。そのような「どやの噂」だから、髪などはらばらな状態でも、気に懸けるようなことはない。本丁オ8の、

どやのか、あねごととたてられる

一一三

という句のように、ヤクザな女性であつた。夜着を着てゆるぎ出たるとやのか、鼻すじにきめこみのあるどやのかか 明七義4

清 賛。

安四仁5

659 いつそ屁をひるとみの輪へかへす也

山田 箕輪は今の台東区三ノ輪周辺。吉原が近いので、紋日などで人手が要する場合、この辺りの子供を「雇い禿」として臨時に雇つたのであつた。

いもが子ハヤとひ禿に出にけり 拾五3

しかし、もとより行儀作法なども心得ないアルバイトだから、放屁したり、つまみ食いなどすることがあつた。そこで主題句のようになる。大変な屁こき虫だと、箕輪へ帰された。

もうひりハいた(し) ませんと禿なき

安八松4

つまむのがやまずみのわへかゑされる

一七五

清 賛。

660 どやのか、あねごととたてられる

山田 前出のオ7同類の句。ヤクザの女親分並に「立てられる」。

御か、さんよばりをさせるとやのか、

清 賛。

安六義5

661 御勝利ハあしのかれ葉をかる如し

山田 葦の枯葉を刈る」としは「きわめて容易にできることのたとえ」(「日国」)だが、この「葦」は、和歌などに詠まれる「難波の葦」の葦であらう。「難波の岸辺に生えるアシ。また、単にアシともいう」(「日国」)。

御勝利は、

御勝利も初てハおかぎからの事 一六25

御勝利ハ敵を粉にした茶臼山 五九10

の句のように、大坂の陣での、徳川方の勝利をいうのであらう。特に夏の陣では、冬の陣で内堀を埋められていた大坂城は容易に陥落し、まさに「葦の枯葉を刈る」としに、徳川方の勝利に終わった。

二の芦をふむハ難波の御勝利

九〇27

山口 賛。徳川礼賛の句。

小栗 賛。「難波」で「大坂の陣」と。

清 賛。

愛染帖

新家 完司選

川西市 山口 不動

哲学もふっ飛んでゆく下の世話

(評) 連日、待ったなしで追いかけてくる下の世話。実践あるのみの世界に身を置いてみると、机上の屁理屈の脆弱さが分かる。

島取市 岸本 宏章

黄砂来る逆なら文句言われそう

(評) 自国に甘く他国に厳しい国。逆ならば、「黄砂に付いている有害物質を除去せよ。さもなくば賠償金を」と迫ってくるだろう。

三田市 石原 蔵子

昼寝から覚めると田植え終わってた

(評) 起こしてくれなかったのは「戦力外」と思われているのかもしれない。残念ではあるが「年配者への思い遣り」と受け取ろう。

寝屋川市 岡本 勲

留守がちがう直ぐに立てないだけのこと

(評) 「宅配便です。お留守ですか」の声に、「いますよ、ちよつと待ってねえ」。どこの高齢者宅でも同じような状況だろう。

枚方市 寺川 弘一

どうしても出ている臍は見えてしまう

(評) 凝視ではないが、出ているのはチラッと見てしまう。出ているほうとしても、無視されると張り合いがないのではないか？

橿原市 居谷真理子

辛い世を大阪弁でコーティング

(評) 「そんなアホな」「えらいすんまへんな、かんにんやで」など等。どこを押しても柔らかな、蒟蒻のようなコーティング。

三田市 堀 正和

五千円超えるディナーは欠にする

(評) 内容などは二の次。出欠の判断を左右するのは会費のみ。年金が唯一の財源であるからには、やむを得ないことであろう。

大阪市 小泉ひさ乃

がんらんどうになるまで使い切った紅

(評) 高価な化粧品。少しでも残すのはもつたいない。しかしまあ、ケースががんらんとになるまでとは……。これも防衛手段の一つ。

奈良市 岩本 浩二

手を繋ぐむかしラブラブいま介護

(評) ラブラブの「君を離さないぞ」から、介護の「転ばないで」まで。遙かな歳月と「共に老いる」ことの切なさとしり難さを想う。

八尾市 宮崎シマ子

ギアアギア啼く子猫にギアアと名をつける

(評) ナイス・ネーミング！ 子猫も喜んで

いるだろう。だが、帰って来ない子猫を呼ぶとき、大きな声では何かと差し障りがある。

八尾市 高杉 千歩

近道も抜け道も地下キタ・ミナミ

押すツボがセンセで変わる整骨院

岸和田市 増田 隆昭

プライバシー等に無縁な飲み仲間

甲子園座ぶとん飛ばすごころう

島取市 倉益 一瑠

黄昏の恋で湯冷めをしています

修正液あるから油断してしまふ

札幌市 三浦 強一

うつぶんを宥める酒と煽る酒

ちよい悪の友が先生酒の道

和歌山市 古久保和子

チリリンリン砲の底で鍵の鈴

ズーと行ってキュッと曲がつて三軒目

亀岡市 井上 森生

何だろう今一番にしたいこと

気が付くと居場所好きな庭いじり

藤井寺市 鴨谷瑠美子

趣味の良い扇子で風をくれるひと

国立という看板がある美術館

河内長野市 坂上 淳司

瓦礫の山見て泣いている絆の字

実エンドウ割ると競漕用エイト

香南市 桑名 孝雄

堺市 志田 千代

手配写真逮捕写真にみる月日
歳相応とビタミン剤を渡される

奈良市 大久保眞澄

饅頭をチビチビつつくダイエツト

この歳だ無理しないでは生きられぬ

和歌山市 柏原 夕胡

白黒をつけてギクシヤクシやしてしまふ

触れられる距離がこの上なく遠い

大阪市 小谷 集一

顔写真貼ってブライド売る野菜

本心が見えないときは酒を注ぐ

岡山市 工藤千代子

例えばで撃ち落とされた鼻でした

天然の鮎が邪魔する休肝日

大阪市 津村志華子

ヤットコもヤスリも恐い歯の治療

青々とゴーヤ日除けに食材に

海南市 三宅 保州

酒を飲まなければ水に流せない

天国でまた逢う日までさようなら

大阪市 古今堂蕉子

昔から争う気なし勝つ気なし

路郎忌に路郎読本読んでいる

西宮市 緒方美津子

冷暖房つきの鶏舎の寒卵

デパ地下の試食を叱る皮下脂肪

池田市 上山 堅坊

居酒屋は大人を癒す秘密基地

ライバルに勝つのはひとつ酒の量

京都市 坪井 孝一

孫たちよこんな飲兵衛許してな

一献はせめて岩手の酒選ぶ

神戸市 山口 光久

下駄箱の中で眠っているヒール

ニクを断つてもこないキス・シーン

島取市 春木圭一郎

八十路でもハートの燃える恋したい

あいまいな部品を付けているハート

弘前市 高瀬 霜石

急いだら左右長さの違う眉

大袈裟な身振りも習う英会話

青森県 松山 芳生

膝が痛いのは私だけでない

グチ吐いて惨めなほどに暗い穴

東かがわ市 川崎ひかり

星五つの宿で湯あたりして帰る

失言を待つてするような包囲陣

大阪市 神夏磯典子

大坂市 津守 柳伸

嵐寛も阪妻もいた良い時代

突風に作り笑顔は取り出せぬ

備前市 森 ふみか

風呂敷と箸一膳にある文化

商品券ほしかつた物ぼんと買う

堺市 澤井 敏治

すつきりと家が片付く喧嘩中

掛軸を替えて客間を夏にする

河内長野市 穂口 正子

遺産相続膳本だ実印だ

何度目のミスか自分を問い詰める

高知市 小川てるみ

美女が来て男の予定狂わせる

譲られた席譲り合う老い二人

松江市 三島 崧丘

不可もなく可もなく今日も二重丸

老いた妻老いた私を探してる

三田市 上垣キヨミ

寝る準備化粧を落とす終電車

シンプルな笑顔私のおしゃれです

和歌山市 土屋起世子

唐津市 岩崎 實

香芝市 大内 朝子

田辺市 岡本 昇

三田市 上田ひとみ
かけそばのおいしい店を知っている

大阪市 江島谷勝弘

私のサプリメントは五七五

羽曳野市 徳山みつこ

たそがれの道もあなたと河内弁

大阪市 高杉 力

接待の日は靴下の替えを持つ

河内長野市 谷 久美子

婆さんと呼んだ夫に返事せず

堺市 内藤 憲彦

ママさんにつねられたワケわからない

藤井寺市 太田扶美代

おデコに瘤何十年ぶりの痛み

島取市 中宇地秀四

トイレから生まれた句でも天を笑く

枚方市 小林 わこ

笑ってますか泣いていますか仏さま

藤井寺市 鈴木いさお

顔の汗拭くふりをして泣いている

松江市 川本 畔

ほめ言葉深いところが痒くなる

橋本市 石田 隆彦

すごい熱出して地球は跳いてる

和歌山県 森下よりこ

あじさいに負けぬおしゃれな傘をさす

大和郡山市 坊農 柳弘

見て聞いて飲んで五感を遊ばせる

高槻市 片山かずお
さて何をしようか迷う日が続く

海南市 小谷 小雪

目が冴えて詮なきことをまた思う

吹田市 太田 昭

補聴器と眼鏡を忘れ引き返す

貝塚市 石田ひろ子

リハビリの医師イケメンで励み出る

島取市 吉野いさお

暑い夜は庭にテントを張って寝る

堺市 矢倉 五月

家庭内別居にも飽き元の鞘

篠山市 遠山 可住

餌もろて泳いでいればよい金魚

寝屋川市 籠島 恵子

いつもの所にいつものように半夏生

大阪市 坂 裕之

愛だけで食べていけると言つたのに

島取市 斉尾くにこ

誓いの詞いつ破るかは委ねられ

富山市 有澤 嘉晃

減塩の梅干だからもう一つ

奈良県 渡辺 富子

鉄の女と母も同じ病気でず

米子 高田 振作

面白い話に嘘はつきもの

和歌山県 福井 菜摘

平凡な顔で難なく生きている

東大阪市 北村 賢子
百薬の長で楽しく永らえる

河内長野市 黒岩 靖博

酒が好き締め出されても懲りません

大阪市 柴本ばつは

五体満足不細工なんて言わせない

倉吉市 中村 毅

税務署で芝居をしても見透かされ

富田林市 片岡智恵子

回転ずし時価が無いから怖くない

河内長野市 藤塚 克三

歌よりもやんや喝采決めポーズ

尼崎市 小池 幸子

残すのも捨てることにもいる勇氣

京都市 都倉 求芽

敬老パス黒くなるまで使つてる

島取市 山下 節子

オードブル取り箸なんかいらぬ仲

三田市 雑賀 一泉

お笑いが理解出来ない歳となる

箕面市 広島 巴子

主治医殿先に倒れたどうしよう

和歌山県 磯部 義雄

すぐやると言つて三日が過ぎていく

大阪府 小栢こずえ

枯木でも立つておつたら役に立つ

島取市 高浜 勇

雨と晴れ交互にやつてきて平和

大阪市 大川 桃花
野の花に信楽焼がよく似合う

神戸市 大島まさる
明日のため信じてみたいきれいごと

大阪府 高木 道子
ガラス戸に張り付く守宮小宇宙

鳥取 夏目 一粹
込み入った話は低い声になる

加西市 金川 宣子
ワイシャツに企業戦士の汗の地図

尼崎市 市坪 武臣
就活へ資格を取るも職は無く

生駒市 飛永ふりこ
好かんたこ貰う飴玉までにかい

米子市 生田 寒之
夜だけといえどこの酒よく続く

宇部市 平田 実男
お茶よりも酒が掂げるみんなの輪

高槻市 島田千鶴子
降りつづく雨に負けない夏あやめ

河内長野市 渡邊 修
コマーシャル孫がそろって歌いだす

倉吉市 岡崎美知江
いい人にみんな見えます過去の人

明石市 糀谷 和郎
履歴書が役に立たない歳になる

岡山市 藤成 操江
薄化粧まだちょっぴりの自負はある

西予市 黒田 茂代
話し足りぬままに別れのバスが来る

和歌山市 平田 元三
ワックスがすぐ空になる車好き

大阪市 笠嶋 惠美
日々伸びるゴーヤに元気がすぐられ

富田林市 山野 寿之
何言うても引つ掛かる妻おろし金

藤井寺市 若松 雅枝
当たるかな内緒で買ったジャンボくじ

大洲市 中居 善信
ぼつりぼつり木陰にやつて来る無職

倉吉市 山中 康子
根詰めは体に毒と横になる

高槻市 初代 正彦
急ぐなと赤信号に叱られる

加東市 里崎美紗子
百までは生きると検査結果聞く

寝屋川市 小谷 滋彦
そら豆の縦一列に家族愛

鳥取市 岸本 孝子
メス入れぬ体宝として生きる

吹田市 野下 之男
懸命がつたわる係の電話口

神戸市 白川 淑子
スキップで少女に戻り行く句会

弘前市 稲見 則彦
播いたから発芽するとは限らない

鳥取県 大塚美代子
世界地図広げて夢の旅ごっこ

弘前市 高森 一香
泣く子には勝てず原発再稼働

江南市 脇田 雅美
飴も好き酒も大好き総入れ歯

枚方市 松原 保
酒は良い医師の声聞きひと安心

大阪市 板東 倫子
直筆の便りで老いの絆継ぐ

鳥取市 津村 律子
足腰のように曲がらぬ心持つ

羽曳野市 吉村久仁雄
妻と娘のペアが放さぬ主導権

岡山市 永見 心咲
飄飄と儲け話に囁んでくる

四條畷市 吉岡 修
あちこちで欠伸囁んでる会議室

紀の川市 宇野 幹子
哲学も手垢もついた広辞苑

八尾市 村上ミツ子
残り物詰めたわたしのお弁当

鳥取市 土橋はるお
ローンがある事を知らない竜巻め

藤井寺市 俣野登志子
なすの艶焼こか揚げよか漬けましょか

米子市 後藤美恵子
笑えない喜劇役者のスカンダル

共選欄

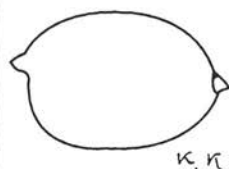
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 738句)



「ダイナミック」 富士 慕情 選

3・11に自然の猛威知らされる	札幌市	小沢	淳
ロンドンに夢をかけてる躍動美	西宮市	泉水	冴子
太陽と月が演じた無言劇	堺市	加島	由一
子の夢はダイナミックな宇宙船	和歌山市	福井	菜摘
難難辛苦よくぞ還つたはやぶさ号	黒石市	相場	一花
ごめんやつしやと割り込んできたお尻	大阪市	高杉	力
おちよほ口ダイナミックにかぶりつく	大阪市	大西	晴雄
大盛りをダイナミックに平らげる	川西市	米原	雪子
欲望へダイナミックになるカード	海南市	堂上	泰女
地吹雪に負けじと捌く津軽三味線	弘前市	稲見	則彦
大声で泣いて騒いだかすり傷	大阪市	栃尾	奏子
一日置くダイナミックな仕事ぶり	境港市	中井	虎尾
芸の肥ダイナミックなスキヤンダル	唐津市	仁部	四郎
伸び盛りダイナミックなてんこ盛り	泉佐野市	稲葉	洋
青空にダイナミックな夢を描く	神戸市	山根	弘子

「ダイナミック」 池 森子 選

空母連れ復興支援星条旗	大阪市	太田としお
豪快な天体ショーは神の技	河内長野市	坂上 淳司
トキ二世復活日本大快拳	亀岡市	井上 森生
かつこいい丸ごと島を言うと言う	神戸市	山崎 武彦
ダイナミックな演技世界へと挑む	東大阪市	北村 賢子
鉄棒の演技に日章旗が揚がる	今治市	渡邊伊津志
日本での勝負に飽きたダルビッシュ	西宮市	片山 忠
ボール蹴る本田の足の唸る音	川西市	西内 朋月
ダイナミックな議論が欲しい永田町	神戸市	山口 光久
テレビではダイナミックに謝罪した	唐津市	仁部 四郎
華奢なのにダイナミックに捌く魚	富田林市	古田 千華
水やればダイナミックになる胡瓜	鳥取市	土橋 螢
ときどきはダイナミックに神戸牛	西宮市	山本 義子
耀いた午後はそのまま台所	鳥取市	吉田孔美子
ダイナミックに生きてみたからカゴの鳥	和歌山市	上田 紀子

銀盤が狭く感じるほどに舞う	和歌山市	柏原	夕胡
全開の口に頬張る握り飯	松江市	石橋	芳山
ダイナミックなおひとの傘の下にいる	八尾市	村上ミツ子	
日の丸の旗は風呂敷売り場です	弘前市	高瀬	霜石
九条の旗はダイナミックに振る	鳥取県	竹信	照彦
矢でも鉄砲でも楯になってやる	藤井寺市	高田美代子	
前任のダイナミックな布石知る	阿波市	三浦千津子	
ダイナミック田んぼアートの美の世界	弘前市	高森	一呑
さあポツポツこころで行こかまだ八十	篠山市	遠山	可住
仕掛花火怒涛となつて燃え盛る	奈良県	渡辺	富子
豪快に尺玉夜空染め上げる	岐阜市	平野あずま	
ドカンと一発父に手向けの大花火	藤井寺市	太田扶美代	
明日を向く少年の瞳は綺羅星で	青森県	松山	芳生
血が滾るダイナミックなヨイトマケ	生駒市	飛永ふりこ	
母さんのダイナミックな避雷針	富田林市	中井	アキ
真っ先に娘が空ける大ジョッキ	奈良市	大久保眞澄	
惚れたのはダイナミックな食べっぷり	豊中市	池田	純子
百万本ダイナミックに薔薇届く	寝屋川市	小谷	滋彦
男盛りダイナミックな河岸のせり	田辺市	岡本	昇
自画像はダイナミックに裸婦にする	寝屋川市	平松かすみ	
老いてなお恋に躍動する血潮	明石市	梶谷	和郎
大落暉父は静かに死にました	橿原市	居谷真理子	
笑う泣くダイナミックな君が好き	大阪市	古今堂蕉子	

ダイナミックに夢を見させる遠花火	尼崎市	長浜	美籠
青い果実ダイナミックな夢を追う	吹田市	須磨	活恵
登竜門番狂わせを期待する	鳥取市	池澤	大鯨
ナイヤガラ滝より激しい我が思い	松江市	松本	文子
ダイナミックなハグで外交和らげる	貝塚市	石田ひろ子	
子の描くダイナミックな青写真	阿波市	三浦千津子	
ダイナミックな文字が並んだ新生児	八尾市	高杉	千歩
パラ百本ダイナミックな贈物	茨木市	藤井	正雄
ダイナミックに笑って大物に見せる	堺市	荻野	像山
女ですダイナミックな男文字	藤井寺市	田付	絹枝
笑う泣くダイナミックな君が好き	大阪市	古今堂蕉子	
定年後赤い車に替えました	愛知県	早川	遡行
裏庭にスカイツリーを建てる夢	大阪市	岩崎	公誠
夕立激し恋のナナハン突つ走る	松山市	高橋	宏臣
四面楚歌ダイナミックに吠えてみる	奈良市	岩本	浩二
好きですとダイナミックに愛告げる	寝屋川市	富山ルイ子	
夢の中ダイナミックな恋をする	和歌山市	北原	昭枝
満月を枕に今宵眠らんか	大阪市	川端	一步
青い鳥捕まえました籠の外	大阪市	榎本日の出	
ホエールウオッチ鯨を染めて日が沈む	東かがわ市	川崎ひかり	
ダイナミックに飛び降りましたギブスです	和歌山市	堀	富美子
目も鼻もダイナミックな太郎の絵	豊中市	藤井	則彦
ほとばしるタクト指揮台から溢れ	京都市	都倉	求芽

ダイナミックな文字が並んだ新生児

八尾市 高杉 千歩

老いて猶ダイナミックな薔薇描く

吹田市 木下 敏子

屋久杉のダイナミックな息遣い

岸和田市 中岡 香代

四面楚歌ダイナミックに吠えてみる

奈良市 岩本 浩二

ダイナミックな笑いに負けたなと思う

鳥取市 倉益 一瑠

四股だけはしっかり踏んで待つ出番

高槻市 初代 正彦

雲海を裂いて昇ってくる朝日

川西市 西内 朋月

満月を枕に今宵眠らんか

大阪市 川端 一步

稲光りダイナミックに天を裂く

大阪府 畑中 節子

聞き惚れるダイナミックなドラムソロ

高知市 小川てるみ

毛筆の賀状の龍に睨まれる

鳥取市 岸本 宏章

指揮棒が佳境に入り汗が散る

鳥取市 岸本 孝子

魂の叫びのようなタクト振る

三田市 上田ひとみ

ジェスチャーも入れて聞かせる武勇伝

横浜市 菊地 政勝

裏庭にスカイツリーを建てる夢

大阪市 岩崎 公誠

ダイビング東京スカイツリーから

枚方市 寺川 弘一

だんじりの屋根を飛び越す男舞い

大阪市 升成 好

竹島を大きな縄で引き寄せる

鳥取市 中村 金祥

故郷の夕日は燃えて海に入る

紀の川市 辻内 次根

秀 句

大夕日男の野望掻き立てる

松江市 三島 淑丘

玉乗りの玉に地球を使用する

和歌山市 古久保和子

豪快に産湯つかった日本海

米子市 政岡未延子

困った時ダイナミックな妻がいる

大阪市 伊丸 昌紀

動じないダイナミックな母という

堺市 遠山 唯教

母性ですダイナミックに授乳中

鳥取市 高浜 勇

ひと肌を脱ぐと大仏立ちあがる

鳥取県 斉尾くにこ

初恋の虹は海から起きあがる

紀の川市 辻内 次根

LOVEと字を大空に描き飛び去った

シドニー 坂上のり子

虹渡り阿修羅になつて逢いに行く

枚方市 伊達 郁夫

春の蝶ダイナミックな弧を描く

瀬戸内市 東嶺ますみ

二の腕は出番待つてる力瘤

塩竈市 木田比呂朗

ドカンと一発父に手向けの大花火

藤井寺市 太田扶美代

ダイナミックに生きたつもの井の蛙

倉吉市 野口 節子

追伸の力強さに参加する

大和高田市 鍛原 千里

ダイナミックに生きたかつたと霞草

富田林市 中井 アキ

欲望ヘダイナミックになるカード

海南市 堂上 泰女

ダイナミックに生きて家族葬で終り

大阪市 谷口 義

十畳の紙に一筆「龍」の文字

藤井寺市 鈴木いさお

豪快に産湯つかった日本海

米子市 政岡未延子

玉乗りの玉に地球を使用する

和歌山市 古久保和子

日の丸の旗は風呂敷売り場です

弘前市 高瀬 霜石

秀 句

その時は本当の事言うつもり

藤井寺市 高田美代子

ダイナミックに安近短も放棄する

米子市 生田 寒之

過失致死バラの寝首を掻いて活け

吹田市 太田 昭

第36回 全日本川柳2012年 徳島大会

（ジュニアの部）

表記大会は6月10日、あわぎんホールで開催、事前投句一八五五名、ジュ

ニア五二九二名、当日出席五一七名の中から選考され受賞句が決定した。

（一般の部）

文部科学大臣賞

夕陽背に答の出来ない巡礼者

岡山 藏内 明子

参議院議長賞

良心を写すカメラになる両目

茨城 船橋 豊

川柳大賞

栄転の辞令は鼓笛隊と来る

東京 西 湯 賢一郎

大会賞

わたしはバラ今の美貌に飽き足らぬ

愛媛 山内 郁代

人間が人間を呼ぶ燃えている

佐賀 西村 正紘

巡礼の轍平和の幾曲がり

秋田 加藤 円心

雲燃えて山の向うはなんだろう

島根 石橋 芳山

善人の仮面で踊る風見鶏

栃木 生田目 昭夫

家系図に踊り上手とルビを振る

宮城 菅野 實

あの日からみんな大人になった海

三重 大嶋 都嗣子

病気だと認識できぬ母に鈴

東京 上原 稔

一目惚れ光の束が火をつける

東京 深川 きんぎょ

若者の歩き遍路に見る決意

香川 村尾 美代子

出産の神秘カメラも息を呑む

徳島 福本 清美

徳島県知事賞

笑顔はね幸せを呼ぶま法だよ

広島 佐方小5 瀧

徳島市長賞

心もねお母さんからもらったよ

高知 高岡第一小3

小松 愛花

徳島県教育長賞

耐えているきみの横顔もう大人

広島 吉和中2 斎藤

静

全日本川柳協会会長賞

桜さく一つ大人になれること

福島 小手小5 矢館

彩 夏

起きなさい幸せタイムもう終わり

広島 中町小4 伊東

叶 音

名前とは初めてもらおうプレゼント

広島 玖波小6 吉野

亜 美

教育新聞社賞

人間として認めてくれる大人の目

広島 吉和中3 金黒

美 沙

お母さん売り場の声にすいこまれ

岩手 寺田小5 山本

雄 太

マラソンで止まりたい気をだまらせる

愛媛 小野小4 渡部

紗也香

初歩教室

題一 抜く

鈴木公弘

心配をしていた事でしたが、「抜く」と「抜ける」の違いを分別しておられない方が多くありました。課題は「抜く(自動詞)」ですので、ご自分の行為をそのまま句にすればよいだけのことでした。

「文字を加減した句」

原田草除り腰をのばすや春日和 (宮) 俊子
添腰のばしながら春田の草を取る
原客かえりやつと息抜く昼下り (山) 弘子
添客帰りやつと息抜く昼下がり
細かいことを言うようですが「下り」は「くだり」と読みます。
原白髪抜き女房少しは若返り 和 幸
添白髪抜き妻も少しは若返る
原ビザを取る手抜き料理で大はしゃぎ 紀美恵
添ビザ添えた手抜き料理に大はしゃぎ
原一言で明るく戻り刺抜けて 秀 子
添一言で明るく戻す刺を抜く
原風呂上り冷えたビールの栓を抜く 晴 雄

添風呂上りがり冷えたビールの栓を抜く

これも「風呂上り」ではなく、「風呂上がり」としなければいけませんね。それと、ここに描かれている情景は、すでにたくさん詠まれています。風呂上がりといえばビール、というのが定番です。セットものとして使われ易い言葉を知っておくのも勉強です。ただし、奇をてらうような語彙を使う必要はありません。

原古い家抜き足ならぬ音が鳴る 温 子
添古い家足を抜くたび音がする

原句は恐らく、抜き足差し足歩いても音がする家なので、安易に歩けないという意味でしょう。出雲名物「どじょう掬い」の、あの踊りを思い浮かべてしまいました。

原名案も考へ抜いて妙案 定 廣
添名案も考へ抜いて妙案に

「珍案へ」としてもよいと思います。

原数珠を繰る日々の悩みを抜くよう (燭) 節 子
添数珠を繰る日々の悩みを抜くように

原女二匹気弱な息子庇い抜く とも 湖
添女二匹気弱な息子庇い抜く

気丈な母を演じて見せる「女二匹」でしょう。寡婦の方の作品かもしれません。

原抜き打ちがまさかあるとは一谷 元 三
添抜き打ちをまさかするとは一谷
原追い抜いてタスキ渡しに手がぶれる 安 子

添追い抜いて渡すタスキの手が焦る

原指輪抜く女の嘘が身を破壊 美知江

添指輪抜く嘘が破綻に向かうとき

原歯医者出て肩の力がやつと抜け 宏 造

添歯科を出て肩の力をやつと抜く

安堵感がよく出ています。我に返った心境をもつと強調すれば入選句になります。

原総人歯アトナイチャー未だ要ぬ 紀 雄
添総人歯アトナイチャーまだ要らぬ

面白い表現ですが、最後に「要らぬ」と書いてしまったため、歯も頭髮も健在だと勘違いされる危険性があります。

「抜けるとした句」

原ライバルを抜けて進めと社長指示 孝 明
添ライバルを抜いて進めと社長言う

社長は欲張り屋が多いですからね。

原人の波スツと抜けられぬ心斎橋 のり子
添心斎橋人波抜いて進めない

問題点として①この場合の下6は重い②「抜けられぬ」と書くべきところが「ら抜き」になっている、ということがあげられます。

集中して頂くと何ら問題なく描けると信じています。

原抜けた歯をどこに投げるのマンションで 利 子
添抜歯してどこへ投げようマンションの
原二次会の道中そつと抜ける奴 武 臣
添二次会の道中そつと抜けました

同じ「抜け」でも、原句は他人を指し、添削句は自分を指しています。他人事にしない工夫をしましょう。

原 自転車の空気が抜けて押し帰る (山) 久子
添 自転車空気を抜いた道を押す

原句はやや説明ですが、一句立ちでできうに感じます。

〔入選に準じる句〕

不器用で手の抜く仕事出来ぬ父

ひろ子

乾杯に発泡酒抜くこの時世

律子

罪許すこぶし抜くには要る我慢

エミ

この場合「抜く」というより「解く」が正解でしょうね。また「ブーツから足を抜く」に「美のしぐさ」という句も書いておられました。「美のしぐさ」が読み切れませんでしたので、この句を取り上げさせて頂きました。

スカイツリー東京タワー抜いたのか 一子
「抜いたのか」という感動のような、一抹の寂しさのような感情が、句全体に気だるさを与えて、面白い作品になりました。

泥水に浸かりれんこん抜く作業 淑子

最後を「作業」と念押しせずに「レンコン抜いている」でよかったです。

とげを抜く慣れぬ手伝い荒仕事 美紗子

「刺を抜く荒い手伝いさせられる」

〔入選句〕

犯罪で手抜き仕事は許されぬ
悪政に抜き差しならぬ小市民
蒔いた種出ずに無礼な草を抜く
根のついた雑草抜いてすつきりと
初歩教室手抜きをしたら恥をかく
友を抜く勇気がなくていつもビリ
引き抜いた大根はまだ修行中
この場合の「大根」は大根役者、すなわち修行中の自分を比喩されたものと解するのが適当でしょう。

傷癒えて抜糸の腹を子に見せる

登美子

もた／＼の若葉を紅葉抜いて行く

道子

視力落ち抜きたいトゲがとりにくい こそえ

「抜きたい」では「抜く」になっていないのでは、という疑問を持たれる方もいらっしゃるでしょうが、「とりにくい」と閉めておられますので目下挑戦中、すなわち「抜きに掛かっている」ので「抜く」句になります。

散歩中抜いてた人に追い越され
抜きでた力は無いが並みに生き
月が日を輪つかに抜いてランデブー

金環日食のことでしよう。作品上「陽」でもよかったと思います。

初恋は抜け駆けされた思い出が
大好きな君のハートを染め抜いて

秋星 心咲 洋子 弥生 英男 裕美 友子

手抜きだが旨いと言われ救われる
息抜くとも聞こえん耳になる
悪遊びから足を抜いたらうつが増え
ピアガーデンビールの栓を抜く至福
抜き差しのならぬ政界また停まる

〔佳句〕

友人と愛競い抜く罪と罰

朝食を抜いてもメタボそのまんま
意志とおす抜くぬかれぬ古い釘
走り抜く抜かれる辛さ胸に秘め
割かんはビール抜く数知らず酔う
成績で抜いた相手の気を使う
「成績で抜いた相手に気を遣う」
謝って心に刺さる棘を抜く
先輩を抜いた上座に目が光る
後尾から追い抜く心地毯のよう
棘抜いて睨み返せば朽ちた杭

〔今日の推薦句〕

気を抜いたとたん崩れてきた積み木

母の年抜いて旅する小宇宙

草を抜くひ弱な花の咲く日まで

それぞれ人生の断面を正確に見つめて作品化されています。

〔私の句〕

血税を抜く右からの波高し
笑わせておいて緩んだ骨を抜く
〔登載漏れの方は役員が添削して返却します〕

真砂子

堅坊

克三

開子

寒之

ミヨノ

一泉

勝治

冷子

修

雄太

孔一

義雄

玲子

絹枝

近藤 治子

楠原 富子

森 ふみか

近藤 治子

楠原 富子

森 ふみか

近藤 治子

楠原 富子

森 ふみか

近藤 治子

楠原 富子

森 ふみか

秀句鑑賞

同人吟 山本 希久子

—7月号から

の逆らわずが効いています。妻には勝たぬことが円満への鉄則だそうです。

今日開くページは今日の物語

島田千鶴子

今日一日のドラマは自分自身が演出もし主役も演じます。どんなふうに展開するのでしょうか。「おはよう」と今日の頁を開く期待感にあふれています。

カタカナの言葉に疎くなつて冬

古手川 光

カタカナはみんな英語と思つてた

秋元 てる

漢字なら偏や作りから、何となく意味に近付くことができるのに、カタカナ語からはイメージも湧かず、一度聞いてもすぐ忘れてしまいます。しかも英語だけとは限らない。すっかり時代から取り残されてしまったと思います。

梅も桜いち度に咲いて北の春

今 愁女

一度にぱつと明るくなったような北国の春。待ちに待った春の風景が目に見え、び作者の笑顔まで見えるようです。

ひらにひらにと回診医が通る

高島 啓子

もののしい白衣の一団が病院の廊下を通ります。誰もが知っている病院の偉

毎月きちんと決まった日に川柳塔誌が送られてきます。川柳塔誌は同人誌友の一人一人の力の結集であることをその重みから感じ取り、一冊の本に仕上げるまでの編集の苦勞に感謝しながら頁を開いています。

同人・誌友欄から会うことの少ない方の近況や体調を拝察しています。

川柳からは作者の想いが伝わり、一句には色々な角度から人間観察がなされていることがわかります。そして背景には、暮らしがあり、時代があります。奥行きも底の深さもある川柳です。

薫風先生は川柳を栄養にして生きていと言われましたが、私も滋味たつぷりの川柳をよりゆつくり味わい、咀嚼しながら読ませて頂きました。

今日の予定にマニキュアは欠かせない

古久保和子

女性にとって外出の身支度には必ずお

領いて七面倒に蓋をする

升成 好

関わりたくない面倒な話、見ぬふり間かぬふりしてしまう卑怯な自分、人間の弱さを見せつけられた思いです。

五十年付かず離れず逆らわず

山崎 武彦

無事金婚を迎えられたご夫婦、円満の秘訣はこんなところにありました。下五

い先生の回診風景を、時代劇の大名行列にたとえた作者のウィットに感心しました。

戦中派節電ぐらい驚かぬ

川端 一步

戦時中の街は薄暗く、さあ晩御飯を食べようという時間に、よく停電があつたのを憶えています。そんな戦中派にとつて節電は苦もなくできそうです。たつぷり電気を使う生活を見直さねばならぬ時が来ました。

間髪をいれずきつねうどんという

谷口 義

注文を聞きに来た人に間髪をいれず答えます。はじめから決まっていたからです。日常の何気ない言動を捉えてユーモアのある一句にする作者独特の作風です。たつぷりの余白へ落書きばかりする

神夏磯典子

年齢を重ねて時間にゆとりが出来たのに無駄なことに費やしてしまう。そして足跡を残せぬまま一年はあつという間に過ぎてしまします。私も同感、忸怩たる思いです。

憧れた一人暮らしもあきてくる

榎本日の出

ないものねだりばかりする身勝手な人間の思いです。二十四時間が自由という

憧れの一人暮らしなのに、長くなると淋しくて空しくて、もう飽き飽きと言いたいのです。

真つ直ぐな道を迷つてばかりいる

小谷 集一

ぶらぶらと生きて貰くものがない

岩崎 公誠

まなならぬ人生が描かれています。

人間の煩悩の深さを嘆き、時流に流されながら、それでも自分らしく生きたい気持ちに汲みとれる二句です。

喜寿なりに少し心を引き締める

栗田 久子

私と同年の作者、確かに年齢なりに心を引き締めてかからねば。油断なく足元に気をつける、ものは定位置におき、予定は必ず復唱をする等々。

拝啓も敬具も書かぬメール来る

太田 昭

携帯のメールで簡単に連絡がとれる時代となりました。味もそつめもなく封を切るとききもなくなりました。

私の生きる根っこは好奇心

松尾美智代

いくつになっても好奇心を失わぬのは若さの秘訣です。好奇心を根っこにもつておればボケずに歳が重ねられそうです。

正直で優しい人で隙だらけ

森村 美花

下五の隙だらけがとてもよく利いています。非の打ちどころのない人ではないが、とてもみんなから愛される人物像が浮かび上がります。

生き返る予定ないので生き尽くす

北村 賢子

その通りです。一度きりの人生悔いなく精いっぱい生き尽くしたいものです。生き返る予定ないという表現に意表をつかれました。

未来から借りてる今の気楽さよ

木村貴代子

私は現在の気楽さは過去の苦勞のたまものと思っていました。未来からの借り物という逆の発想に打たれました。

今の気楽さには必ずしつべ返しの未来があると云われ頷きました。地球規模で考えてもきつとそうなのでしょう。

野菜シャリシャリ残り時間は無いのんよ

岩本 笑子

活きのいい野菜も時間がたつと萎れ、シャッキリしている時間はそう長くありません。人生も同じで与えられた時間を有効につかわねば。野菜に語りかけながら自分を励ましているように聞こえます。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

政岡未延子

飛んで出る度胸もなく群れに居る

野川宣子

仲間達に守られて楽しく過しているが、群れから抜け出て冒険してみたい。複雑な心境を自分を責めることによつて押さえている。内なる気持ちもお大切にどうぞ。

満開も散る桜にもある気品

尾崎一子

桜という一途に我々の心の中に入ってくる不思議なものである。それは、潔さにある不思議な気品でしょう。桜の根のあたりに謎が潜んでいる気がしてならない。

日本晴れ気分いいから医者へ行く

武島ちよえ

こういうこともあるのです。

日本晴れが後押ししてくれて、気にかかるところをきちんと診てもらふ決心がついたのでしょう。踏ん切りをつけさせる日本晴れが素敵。

独り者くしゃみもせきも齒切れよく

加藤正二

ご自由どうぞと言いたところだが、咳のあと案じてくれる声もない。思いきりくしゃみしてストレスを吹き飛ばすのも一計。

あのころのドングリ今も背くらべ

坂田喜久子

どんぐり達も順調に老いて、昼食会に、人生大学にと今だに連れだつて群れている。似たような環境で仲よく背くらべでしょう。青だけで渡ってきたが悔い残る

興水弘

関所関所を淳風満帆で通過してきたが、これでいいのかという心の声に従い見えてきたものがある。悔い残ると言う心の深さが判る。

菜の花を施設の妻に携える

原煩悩児

春の花の黄色には倅せを感じるものがあり、句からも漂ってきます。奥様に大事に、大切に思う気持ちが痛いほど伝わってくる。

趣味一つお一人様を支えてる

大島友子

高が趣味然れど趣味。色々なドラマを見聞きする趣味、いい面もあれば失敗する面もある。趣味を持ち、人と交流するようにと言われる。趣味があつてこそ楽しい人生

もある。

のんびりと隠居の出来ぬ八十歳

田村周子

全くその通りです。最近の年寄りはお前掲の句の如く趣味を楽しむ人、家事一切を受け持つ人など、八十歳での隠居はむづかしい。

意地という堀をつくつて仲たがい

後藤宏之

よくある話ですが、意地というものは中々捨てがたく、ついつい張つてしまふ。堀を高くするのも、取り払うのも利他の気持でどうぞ。

幸せの物差し変えて楽に生き

高杉力

どの位の長さ？など難しい事は考えない。そういう想いに辿りついた素晴らしさ。気付いた人だけが感じる倅せの原点でしょう。

退職後いそがしいのは金ばかり

中井虎尾

孫さんでしょうか、多趣味ゆえでしょうか。身過ぎ世過ぎのむつかしさ。時間はたっぷり手にしたが、金には羽根が生えているらしい。

一分でも遊ぶ時間が大事です

市川雄太

集落に主役がない子供の日

藤田千秋

問診表嘘を書きたい酒量欄



積極的に向かう

いつもベストコンディションで作句するのが理想ですが、誰しも、そのようにうまくは行きません。うまくゆかない要因はいろいろありますが、大きく分けますと次の二つです。

- ・体調が不良である
- ・精神的な余裕がない

どれほど体調管理に気を遣っていても、一年中ベストコンディションという人はいないでしょう。高齢になって体力が落ちてきますと、季節の変り目とか寒暖の差に対応できず調子を崩すことが多くなってきます。そのような場合は、医者に診てもらうとか安静にするなど、自分の判断で適切な処置を講じることができま

す。一方、精神的なコンディションは自分でも掴みにくく調整もむづかしいものです。思いあたることもなく、何となく気分が優れないこともあります。原因が明確に分かっている場合も多々あります。たとえば、夫婦喧嘩したとか、財布を落としたとか、大会で全没だったとか。この世に生きていく限り、気分を滅入らす種は無数にあります。しかし、そのたびに意気消沈しては作句もままなりません。

気分が優れず何ごとにも消極的なときには、川柳を忘れてのんびり過ごすのがベストなのですが、大会や投句の締め切りが迫っているときには、そのように暢気なことも言っておれません。では、どうすれば良いのでしょうか？

先ず、重要なことはウォーミング・アップです。エンジン

でもいきなり高速回転はできません。細部へ油が浸透するまで少しずつ回転数を上げてゆかなければなりません。

同じように、脳細胞にも簡単なことから少しずつ刺激を与えてゆきます。たとえば、好きな詩集をばらばら読みなおすとか、目標にしている川柳作家の句集に目を通すなど、徐々に「文芸モード」に持って行きます。このようなときに役に立つのは、自分が感動した句を控えているノートです。ここに響いた作品に接することによって「やっぱり川柳はいいなあ」と改めて刺激を受け、「よしっ、がんばろう！」「私も負けないような句を作ろう」とファイトが湧いてきます。

もう一つ重要なことは、守りの姿勢にならないことです。「平抜きでもいいから」とか「一句でも抜けたら充分」というような消極的な姿勢では、たとえ抜けても秀作には程遠いものになってしまいます。気合いが入っていないときには、どうしても無難で平凡な句しか生まれないのです。

この「創作に向かう姿勢が作品に与える影響」を、簡単にまとめますと次のようになります。

- ・消極的 ↓ 無難で平凡な作品しか生まれない
- ・積極的 ↓ 斬新で非凡な作品が生まれる

作句に際しては、右のことを頭の隅に置いて、決して守りの姿勢にならないように注意します。「まずまずこの程度で良いのではないか」と等と安易に妥協しないこと。「この句の良さが選者に分かるか」というぐらいの挑戦的な作品が生まれるまで努力を続けます。これは単に川柳大会に出るときだけの姿勢ではなく、川柳塔誌への投句はもちろん、あらゆる創作に対して共通であることは言うまでもありません。

『麻生路郎読本』余滴

(10) 路郎の著作見つかる

楽原道夫

「麻生路郎物語⁽¹²⁾」(『麻生路郎読本』254頁)に、(路郎が著述業として本格的な活動を開始したのは大正十一年の三十五歳(筆者註・満34歳である)とあり、著作『童謡の森』について触れている。『麻生路郎読本』を編纂した際に、路郎の著作を全国の図書館やインターネットの「日本の古本屋」などで蒐集したところ、川柳書以外にも多くの著作をものしていたことがわかった。『麻生路郎読本』に記録した路郎の著作のうち、大正9年から大正14年にかけて刊行されたものの書名を並べてみる。書名の前に『麻生路郎読本』と同じく通し番号を打つ。書名の下の丸数字は発行月、漢数字は版を示す。ただし、初版については省く。

大正9年

- 1 『川柳漫画懷手』⁽¹⁰⁾

大正11年

- 2 『日々間に合ふ 現代模範美的候文』⁽⁶⁾
- 3 『日々間に合ふ 現代模範女子美的候文』⁽⁶⁾

⑥三

- 4 『雄辨五分間 演説と挨拶』⁽⁶⁾

- 5 『童謡の森』⁽⁶⁾

大正12年

- 6 『新譯イソップの話』⁽²⁾

- 7 『これは面白い 世界歴史の話』⁽²⁾

- 8 『新釋ロビンソン漂流記』⁽⁴⁾か⁽⁵⁾

- 9 『新譯アラビヤナイト』⁽⁵⁾

- 10 『大正傑作壹萬句』⁽⁷⁾

大正13年

- 11 『英語獨習 會話の近道』⁽⁹⁾十

- 12 『これは面白い 日本歴史の話上の巻』⁽²⁾

- 13 『これは面白い 日本歴史の話下の巻』⁽²⁾

- 14 『これは面白い 世界偉人の話』⁽²⁾

- 15 『受験必携 メンタルテスト』⁽²⁾

- 16 『漫畫漫文 川柳ふところ手』⁽⁶⁾

- 16は1 『川柳漫画懷手』を、判を改め書名を変えて発行したもの。

- 17 『卓上五分間式辭と演説(大正版)』⁽¹²⁾三

- 18 『新譯ロビンソン漂流記譚』⁽⁹⁾

- 19 『新譯アラビヤナイト』⁽⁹⁾

- 20 『新譯イソップ物語』⁽⁹⁾

18→20の三冊は、6・8・9を判を変えて発行したもの。

大正14年

- 21 『これは面白い 私のからだ』⁽³⁾

川柳に関する著作は1と16であるが、16は1と同じ内容である。10『大正傑作壹萬句』は俳句のアンソロジーであり、それ以外はすべて子供や学生向けに書かれたものである。

今回インターネットの「日本の古本屋」を通じて入手したのは、次の二冊の童話である。

『童話お伽子鼠の恩返し』



28×15mm(四六判)。本文の活字は15ポイント。頁の書式は、27×10行。二一

二頁。「ねずみの恩返し」(筆者註—本文の題は、書名・目次とは異なっている)の本文の前に「宇野名華著」とあるが、奥付の著者は「麻布路郎」となっている。

目次

子鼠の恩返し	一
黄金の馬	二七
烏とむく鳥	六三
文雄の手柄	七一
鶴子と龜太郎	八五
君子のダリヤ	九九
太陽と蛙	一一一
白銀王	一二七
叔父さんの話	一九七

大正十四年十二月十五日發行
大正十五年一月二十五日再版
大正十五年四月一日三版
定價金參拾五錢(送料四錢)

著者 麻布路郎

東京市神田區多町一丁目四番地
發行者 川津公一

東京市下谷區西町一番地
印刷者 木村茂市郎

東京市下谷區西町一番地

印刷所 神宮館印刷工場

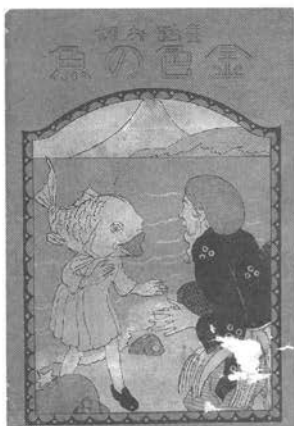
東京市神田區多町一丁目四番地

發行所 川津書店

電話 神田二一八一番

振替東京三三九八八番

『童話お伽金色の魚』



判型・書式などは、『童話お伽子鼠の恩返し』と同じ。二一五頁。

目次

金色の魚	一
王女と七人の魔法	二四
美子と指環	六一
不思議な運命	九一
ジョンソンの靴	一二五

鷺にされた許嫁……………一三七

着道樂の王様……………一五三

幻の城……………一七七

ぶくぐ豚吉……………二〇六

大正十四年十二月五日印刷

大正十四年十二月十五日發行

大正十五年六月一日四版

この後の定価や發行所などは、『童話お伽子鼠の恩返し』と同じなので省く。奥付の著者も「麻布路郎」(「金色の魚」の本文の前に、「麻生路郎著」とある。

本の後ろに「川津書店發行目録」の頁があり、路郎の著作では次の三冊の広告が掲載されている。

麻布路郎著 金色の魚

宇野名華著 黄金の斧

麻布路郎著 湖水の白鳥

川津書店から、この年に『子鼠の恩返し』『金色の魚』『黄金の斧』『湖水の白鳥』の四冊の童話を出していたことがわかる。『黄金の斧』と『湖水の白鳥』は未見だが、この二冊も十二月十五日發行で間違いないだろ

う。この四冊を含めて、路郎の著作で現在判明しているものは四十六冊になった。

前回の『麻生路郎読本』余滴（『川柳塔』6月号・102頁）に、筆者は（路郎は大正11年から13年にかけて子供・学生向けの多くの書物を刊行した）と書いた。大正14年3月に、21『これは面白い私のからだ』を出しているが、この年に刊行した書物はこれ一冊だけで、序の最後に（大正一四年新春）とあるので、実際に執筆した時期は大正13年だと考えてそのように書いたのだが、新たに四冊もの著作が見つかったので、（13年にかけて）を（14年にかけて）に訂正しておく。これ以後も、子供・学生向けの書物を刊行していないわけではない。『麻生路郎読本』の「麻生路郎著作解題」には、22『小國民叢書 世界の昔はなし』（昭和3）、23『卓上五分開式辭と演説（昭和版）』（昭和3）、25『雄辯自在 五分開演説と挨拶』（昭和3）、30『成功美談 未来の大統領』（昭和7）、33『式辭と演説 挨拶の仕方』（昭和11）を記録している。しかし、これらはそれぞれ順に、7『これは面白い 世界歴史の話』、17『卓上五分開式辭と演説（大正版）』、4『雄辯五分開演説と挨拶』、14『これは

面白い 世界偉人の話』、17『卓上五分開式辭と演説（大正版）』とほとんど同じ内容であり、新たに書かれたものではないのである。

ここで、疑問に思ったことを二点挙げておく。

まずは、『童話お伽子鼠の恩返し』の本文と『童話お伽金色の魚』の広告の頁に、「宇野名華」の変名を用いていること。路郎は、7『これは面白い 世界歴史の話』と12『これは面白い 日本歴史の話上の巻』の本文で、「阿蘇次郎」の変名を用いたことはあるが、14『これは面白い 世界偉人の話』では、本文も麻生路郎である。奥付ではないが、なぜ、殊更「宇野名華」という変名を用いているのがわからない。

二点目は、奥付の「麻布路郎^{マブ}」について。『發行目錄』にある「金色の魚」の「路野^{マブ}」は、奥付が「路郎」なので誤植であることは明らかだが、「麻布^{マブ}」は奥付と広告欄を合わせて二冊で四箇所もあるので、誤植とは考えにくいのである。『童話お伽子鼠の恩返し』の本文だけ、麻生路郎になっている。1から21の路郎の著作で、奥付の著者名が麻生路郎でないのは、本名の麻生幸二郎を用い

た、11『英語獨習會話の近道』だけである。あくまでも誤植でないとした場合の仮定の話にすぎないが、筆者は、麻生路郎と名乗ることにためらいを感じて「麻布路郎」にしたのではないかと勘繰るのである。

この二冊に収録されている作品のどれが路郎のオリジナルで、オリジナルでないものはどれかという判断をする力は筆者にはないが、ざっと調べてみただけでも、いくつかの作品は有名な童話の翻訳か焼き直しであることがわかった。例えば、『太陽の蛙』はイソップ。『金色の魚』はグリムの「漁師とおかみさん」。「王女と七人の魔女」は、グリムの「眠れる森の美女」。「不思議な運命」はアンデルセンの「醜いアヒルの子」。「鶯にされた許嫁」はグリムの「ジョリンダとジョリンデル」。「着道楽の王様」はアンデルセンの「皇帝の新しい着物」。今は「裸の王様」で知られている。この二冊の童話は、いろいろな童話を寄せ集めたものであると言える。

6『新譯イソップの話』、8『新釋ロビンソン漂流記』、9『新譯アラビヤンナイト』は、それぞれ路郎が新たに翻訳したもので、「新譯」と冠している。路郎が英訳本から新

たに訳したものであれば、堂々と麻生路郎と記して当然である。当時のイソップやグリムやアンデルセンの翻訳本を調べた訳ではないので確かなことは言えないが、当時出されていた翻訳本を種本にして適当に書き直したものであるので、奥付の著者名を麻生路郎にしなかったのではないかと思うのである。

最後に、『童話お伽子鼠の恩返し』から、『太陽と蛙』を参考に載せておく。

太陽と蛙

昔々、ある時のことでありました。

太陽がお母さんに向つて、

「私も、もうお嫁さんを貰つてもいい、年齢になつたが、何處かに相應しないのが無いから、」

と、云ひました。

ところが、下界に住んでゐる蛙達は、太陽のこの言葉を聞くと黙つてゐません。

青い田の、あぜから空を仰いで、

「どうか、およめさんを、貰らうことだけは、お許しください。」

と、いふ歎願やら、

「そんなことを、されてたまるものですか、」と、いふ不平の聲をあげるやらで、大騒ぎです。

「どうか、い、およめさんが見つかりませんやうに、」

と、祈つてゐる蛙もありました。

どのかはづも、みんな口々に何か不平を鳴らしたのでジュービターの神さまも困まりになつて、

「お前達は、どうしてそんなに口喧ましく不平をいふのだ。」

と、聞かれました。

ところが、蛙の中の大將顔をしたのが、一ト脚のり出しまして、

「神様、私達が斯うして不平をいふのは、大變な理由があるのをごさいます……、」
「だから其の譯を聞いてゐるのではないか。」
と、神様は完爾として云はれました。

「神様も御承知の通り私達は、この池のほとりに住んでゐるのでございます。人間に水が必要であるやうに、私達も水が無いと生きて行けないのでございます。」

と、ここまで云つて、蛙は咽喉をひよこく動かして息をつぎました。

「ふん、ふん、」

と、ジュービターの神様は、それからどうしたといふ代りにお答へになりました。

「ところが、太陽はあの通りの暴君ですから、誰に遠慮會釋もなく照りつけまして、私達の大切な池の水を乾しあげてしまひました。」

「ふん、ふん、」

「さうなつて來ますと、私達は干乾びた家で死ぬより外に道がないのでございます。」

「なる程な。」

と、神様はうなづいて見せました。

蛙は、こ、ぞと云はんばかりに膝を乗り出して、

「近頃太陽がお嫁さんを捜してゐられることを聞いたので、蛙一族では大變なことになつたものだ、寄るとさざると評定ばかりしてゐます。」

けれども相手は太陽ですから、どうすることも出来ません。私達の問題になつてゐるのは、太陽が結婚をするとなると、遠からず子太陽を澤山産むものと思はなければなりません。一人の太陽でさへ、私達の社會で大問題になつてゐるのに、この上澤山な太陽がうまれたら、

私達一族の未來は何うなるのでせう。」
と、さも憂はし氣に云ひました。

川柳『ふめじ』

富田 蘭水 著

竹治ちかし

島根県川柳の重鎮、富田蘭水さんがこの度川柳句集『ふめじ』を上梓されましたこと、心よりお喜び申し上げます。

人生八十余年の集大成としてのこの句集は、人間富田蘭水を余すことなく表しているものと感じさせられました。

全国で川柳の句集、句文集はたくさん発刊されていますが、『ふめじ』という題名の句集はどこにもないのでは、と思います。この句集を手にしたとき、「なに!?!、この題は」と思ったのですが、その答えはこの句集の中にありました。

懐かしい俺を育てたふめじ士手

この句が表題の原点だったのでしょうか。

蘭水さんの出身地は出雲市の船津というところだそうです。普通なら船津は「ふなつ」と言うところですけど、出雲地方特異の出雲弁で読めば、「ふねじ」と

きて「ひめじ」から「ふめじ」になってくるそうです。出雲で生まれ、出雲で育ち、この地を愛された蘭水さんだからこそ、このような題名になったのでしょう。そしてこの句集は、蘭水さんのモットーとされておられる、人真似ではない川柳の確立、特定の師を持たず自己の川柳道を数十年に渡って努力精進され、かたくなに守って来られた結果の金字塔であり、あちこちにその気風が感じられるのです。

我が主張人まねでない一行詩

作句においても、敬慕する麻生路郎師の「川柳は人間陶冶の詩である」という言葉を常に最大の教訓として、目標として来られたそうです。

橋いくつ超えたら無我につくのやら

酒を愛し、温泉を愛し、絆を大切にされてこられた蘭水さんです。当然句集も、第一章、ふる里

ふる里でしつとり濡らす雨にあつ

古傷が不思議と癒える里の川

精いっぱい呼んだ餅がひびかない

第二章、温泉

温泉に寄りぬと旅が落ちつかぬ

足湯して希望の春を待っている

効能はどうあれ温泉いい所

第三章、赤い紐

一心に亡母に供える花つくる

赤い紐しつかり運をつないでる

原点を狂わぬように囲いする

第四章、八十路坂

八十路坂まだ恋してる山椒魚

負けまいぞまだまだ余命生かすまで

子の海の広さに賭ける老いの夢

四章から構成され、随所に蘭水さんらしさが表れています。

句集の最後を飾っている句

色々な風にあたつて強くなる

これが今の作者の気持ちなのでしょう。

終わりに私の好きな句を並べさせて頂

きます。

心まで売りはせんぞと独り酒

酒断つてまだまだ生きる青写真

肩書を捨てた名刺と翔んでみる

所作などは要らぬ二人で茶を愛でる

病む妻に窓越しの月そと見せ

鈴の音を信じて一つ罪を消す

暗唱のハイネも風化させず老い

十善を積んで余生をたしかめる

清貧を知ってか猫もす通りす

私の釘はさびても持っている

『イヤリング』

山本希久子 著

木本 朱夏

はんなりという言葉を広辞苑で引くと「落着いたはなやかさを持つさま。上品に明るいきさ」とあります。主に関西地方で使われている言葉です。

日頃から私は「はんなり」という言葉は、希久子さんのためにあると思っていました。また色彩で表現すれば淡いパープルを帯びたピンク、といったところでしょうか。

このたび上梓された句集『イヤリング』は七章からなっています。その第一章は「はんなりと」です。

桃いろ藤いろ余生はんなりと

句集の冒頭に置かれた作品です。わずかに十七音字で「山本希久子」の人となりを見事に表現しています。

友達を数えて森へ来てしまふ

レモン一滴きりりと老いを遠ざける

生きて死ぬ道のりにある花の数

キッチン発わたくしの風送ります

金魚ひらひらの世地獄が極楽か

妻でない母でない日のイヤリング

希久子さんの作品に破綻も揺らぎもないのは、川柳を始められたきつかけが毎日文化センター川柳講座で、橋高薫風先生、高杉鬼遊先生に学ばれたからでしょう。もちろん、生来の豊かな感性とセンスの良さが、お二人の先生によって磨かれ、開花したことは否めません。まことに幸せな、恵まれた川柳人生のスタートであつたといえましょう。

希久子さんは京女です。はんなりと、きやしゃな外見に似ず、バックボーンが一本、しゃきつと通っています。言うべきことは節を曲げずに言う、希久子さんの芯の強さを示されたのは、第三章「春を恨む」です。

原発の街春を恨んでみたとても

こんな形で電気黒い息を吐く

傷だらけの原発黒い息を吐く

原子の火よりも焚き火の暖かさ

桃に傷ゆつくり地球温暖化

希久子さんは川柳塔の編集に十数年たずさわりました。うち三年間は編集長という重責を負いながら、離れ住むお母様の介護をされました。最後の六年間は片道二時間をかけて、施設に入られたお母様の元に通われたそうです。

百歳を目前にお母様は亡くなられましたが、母と娘の強い絆は、人の心にひびく佳句の数々となつて、実りました。

柿を剥く母の昔を聞きながら

母を想い母を忘れていた旅路

さくらさくら童女にかえる母卒寿

今日一日をすべて捧げて母のそば

絵の中の母がだんだん小さくなり

お母様を看取られた寂しさと充足感が、今後は新たな希久子川柳を生む原動力になることを期待しています。

花の章でしめくりたい余生

人生薄暮朱を足しながら足しながら

次ページへ続く笑顔と生きてゆく

喜寿の花ちいさく赤く咲かせましょ

句集の最後に置かれた句に、希久子さんの明日への決意を見ました。

てのひらののぞみこぼさぬよう走る

民族の詩 (3)

—漢字・仏教の伝来から川柳へ

三好 専平

日本にもたらされたインドの仏教は、漢文から大和言葉に翻訳されずにそのままそれを日本語に合うように音読された。残念ながら、私は中国語の音読み・梵語の読み方を知らない。

漢訳仏典は、多く四音・五音・七音である。古詩・絶句・律詩の様式をまねる。さらに原典にさかのぼると、サンスクリット語（梵語）で、ウパニシャッドなど紀元前十八世紀にゆく。古い時代の多くは「歌謡」であつたという。日本で「和讃」「声明」となつた。漢詩が男性のものであつた時代に、平仮名が生まれ、日本の俗謡が、日本語の特質に合うような形で発達したのが「短歌」である。短歌は最初声に出して謡われたが、時代とともに書か

れるようになった。ちなみに「カタカナ」は漢文訓読のための記号であつた。

奈良時代には、宮廷歌人という「職業歌人集団」が生まれ、柿本人麻呂は、天皇の行幸に付き添い、宴席で天皇をたてる歌を披露した。アンコールが多いといくらでも短歌をそれに付け加えた。それが「反歌」といわれるものである。一萬葉集「巻二」は「相聞」と「挽歌」のみからなる。

同時期に、百済の王仁によつて日本につたえられた四書五経。五経のうち、特に「詩経」は古来の中国の民謡・廟歌・宴歌で、すべて漢字四字からなり、オノマトペを自由に使っているのが特色で、三〇五編からなる。

関関雉鳩 在河之州
窈窕淑女 君子好述

は、宮中で歌われたものと思われ、意味は「君子のあなたにふさわしい淑女がおられますよ」という。

日本最古の漢詩集「懷風藻」は、七百五十二年に編まれた（百二十編）。大和民族自らも漢詩を作つたのである。大津の皇子の臨終の詩、

金鳥臨西舍 鼓声催短命
泉路無賓主 此夕離家向

『太陽は西に。命短し。あの世は一つ。家を離れて去る。』以来、民謡とともに、漢詩・經典も知識人にひろまり、普及した。ちなみに『妙法蓮華経・序品』より

如是我門。一時。仏住。王舍城。耆闍崛山中。與大比丘衆。萬二千人俱。

意味はわからなくてもよい、庶民はこれらをフリガナにあるように音読し、成仏を願つた。

二上山は、鶯の鳴き声が美しく、みごとな梅林があり、紫陽花も咲く。石切り場の鹿谷寺跡には、古代の線刻文様が残る。これが「人間陶冶」の詩、川柳の源流であらう。



(七) 富岡八幡宮・冬木町をゆく

永代橋を引き返し、右に曲がって中島町（現在は永代二丁目）に向かう。

「中島町は三方を川でかこまれているが、溝通り町は南側を流れる大島川沿いの道で、木戸番小屋は、新地橋の下をくぐった大島川が、西側を流れる仙台堀の枝川と一つになるところにある。二つの川は、流れの音をひととき高くして、隅田川にそそいでいた」（『深川溝通り木戸番小屋』講談社文庫）と北原亜似子が中島町の特徴を描いている。主人公は中島町の木戸番小屋の女房だ。少し太めだが、品のあるお捨ておぼさんがいつもここらと笑っていたところだ。

中島町の東隣、岡場所があった大島町（現在は永代二丁目）の東端つこが黒船橋、その南詰めには前出の池波正太郎が描く居酒屋（三好屋）があったところだ。

黒船橋を右に見て、二つ目通りを北に向かい、都営地下鉄大江戸線と東京メトロ東西線が交わる門前仲町駅をめざす。

お昼時なので門前仲町駅界隈はサラリーマンとOL、そして富岡八幡宮への参拝客で賑わっていた。京都の河原町交差点あたりの雰囲気によく似ている。

門前仲町駅から東へ約二百メートルほどで富岡八幡宮に着く。入口には大きな赤い鳥居がデンと聳えて正面に神殿があった。

大島居をくぐると左側に、奉納神輿二基がガラス張りの見

物の中に飾られていた。神輿の鳳凰の目には四カラット、狛犬の目には三カラットのダイヤモンドがはめ込まれていた。

富岡八幡宮のお祭りは、江戸三大祭に数えられ、深川地域だけでなく大川の西側からも神輿が来るらしく、盛大なお祭りという。家族の健康を願って二拍二礼をして富岡八幡宮をあとにする。

富岡八幡宮を舞台にした藤沢周平の作品には短編「かどわかし」と「神隠し」（新潮文庫『神隠し』に収録）があった。いずれも愉快な誘拐を題にしたものだった。

どのまつりでも深川のおやじ出る（俳風柳多留より）

北に向かつて仙台堀に架かる亀久橋をめざす。亀久橋の手前には冬木町という地名がある。冬木町を舞台にした藤沢周平の短編「疫病神」（『神隠し』新潮文庫）は家出していた父親を引き取ったが、それが疫病神になるという哀しくて切ない物語であった。

亀久橋を渡った北詰には美味しい蕎麦屋（万屋）があったと、池波正太郎が『剣客商売』（新潮文庫）の中で描く。池波正太郎はよほどの蕎麦好きだったのだと考える。

亀久橋を渡らずに東へ向かい、広大な長州藩下屋敷があった辺りをゆく。幕末には、幕府の長州藩にたいする憎悪が激しく、長州藩の上屋敷や中屋敷はすべて没収されて、残されたのは深川の下屋敷だけであったという。

蕎麦を喰ひ仕廻って一句出来たはへ（俳風柳多留より）

川柳塔社各賞選考規定

- ① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。
- ② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。
- ③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を受賞しない。
- ④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない。
- ⑤ 六賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。
- ⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。
- ⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。
- ⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。
- ⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

(備考)

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十四年から実施するものとする。

二賞選考規定

- ① 路郎賞 川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞 水煙抄欄の入選句から5句
昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、8月10日必着で本社宛郵送する。
- ② 第一次選者は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。
- ③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席(5点)、第二席(4点)、第三席(3点)、第四席(2点)、第五席(1点)の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。
- ④ 第二次選者
本社関係 主幹・理事長
地方関係 〔4〕Ⅱブロック 〔11〕Ⅱ選者数
〔東日本〕 (2)北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
〔近畿A〕 (4)大阪
〔近畿B〕 (2)滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
〔西日本〕 (3)中国・四国・九州・沖縄・海外
合計13名
- ⑤ 地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。
川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

平成二十四年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島 蘭幸・西出 楓楽・川上 大輪・新家 完司
河内 月子・木本 朱夏・鶴田 遠野

第二次選者（十三名）

本社関係（二名）

小島 蘭幸・西出 楓楽

地方関係 【4】 ≪プロック（11）≫ 選者数

【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海

高瀬 霜石・早川 遡行

【近畿A】（4）大阪

籠島 恵子・水野 黒兎・村上 玄也・山本希久子

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山

居谷真理子・三宅 保州

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外

竹治かし・仁部 四郎・牧野 芳光

昨年九月から今年八月の間に

誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選
択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔
賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間
違いのないようにお願いします。

平成二十四年度各賞選者

愛染帖賞 新家 完司

檸檬賞 福士 慕情 池 森子

一路賞 北野 哲男 小川てるみ

各地柳壇賞 太田 昭 政岡未延子

本社 七月句会

七月六日(金) 午後一時
アウイーナ大阪

七月句会は路郎忌として、交換選者に番傘
本社谷垣郁郎氏を迎え、百三十四名(投句
八名)の参加で開催。初参加は能勢良子氏・
石田ひろ子氏・平田元三氏・磯部義雄氏・坂
田喜久子氏・中田牛延氏六名の方々と、番傘
本社と他柳社の方にも多数の参加を頂いた。

お話は、木本朱夏さん「路郎のユーモア」
と題し、まずユーモアについて具体例を挙げ
紹介。ユーモアとは上品な洒落であり、発信
する側と受信する側の両方にセンスがいるの
ではないか・・・路郎の句では

この腕を見よと脱税してあたり
友達をみんなだまして南に居
子にやった机で履歴かいている

などの句にユーモアがあり、人間味があり、
やさしさがあり、愛があるのではと締めくく
られた。

月間賞は山田葉子さん(京都市)に輝いた
(司会・美龍・善純)(協取・扶美代・真理子)
(受付・富子・紀子)(清記・勝弘)

席題「がっかり」

水野 黒免選

体重は増え給料はカットされ
パスデイ娘は来ないメールだけ
山海の珍味にビールしか出ない
いつまでもあひるばかりの通知表
大声で呼びかけている人違い
海見える窓の真ん前ビルが建つ
中国へとられてしまうパンダの子
藤川の留守に振り逃げサヨウナラ
除幕式してから誰も来てくれず
どう見ても檸檬に見えぬ膝頭
はざされていると気付いた雨おんな
お世辞だと判り表紙を裏返す
旅行中月下美人の咲いた跡
ト・シューズ最後のスピン紐が切れ
やせたはずなのにホックが止まらない
ステキもマグロも主治医首を振る
がっかりとがっかり恋になりました
くちびるに恋の約束空手形
花柄の帽子の横に席を占め
がっかりはしないやつぱり私の子
天国へ来たがビールが無く帰る
やんぬるかな園児に席を譲られた
がっかりの後姿を風が押す
ダイエツトしてもひとりも気づかない
車やめバスで来たのに酒が出ぬ

黒免選 水野 月子 賢子 宣子 完司 楽生 克己 保州 五月 柳弘 多恵子 奮水 紀子 行兵衛 蘭幸 寿之 勲 能子 直樹 朱夏 ひとみ 由一

僕にだけ笑顔向けてる思ってた
今月はずうつと妻も家らしい
四万十の濁れる旅のあばれ梅雨
送つたら駅でご主人待つてはる
男子校出身だったいい女
平和とは何かと風が繰る聖書
検診の結果陰性告げられる

佳

あの人の小さな荷物だったのだ
女文字封を開ければ請求書
ひよつとしてがっかりしてるのは妻か
成長を待った息子が遠ざかる
コマージュのくたびれた健さんを見る

人

喪服着てきたのに元氣ぶり返し
あのだモを大きな音と聞いた耳
絆の字が色褪せてきた瓦礫処理
領土侵され「遺憾に思う」だけなのか

軸

兼題「煽る」

古今堂蕉子選

あんただけやなんて言われて燃えました
蚊帳の裾煽つて入るしぶ団扇
お前ならやれると部下をたき付ける
花束に煽られ笑顔こぼれたす

葉子 見清 隆彦 耕治 由一 奏子 義雄 ひとみ 竜之介 一歩 俣子 時雄 天笑 まつお 和夫

パチパチと火の粉おどらす火吹き竹 喜久子
 生と死の狭間燦られ火が匂う 一風
 燦つても動じぬ父のマイペース 能子
 単細胞燦ると伸びる豆のつる 朋月
 幸せはこれだこれだとコマージュ 真理子
 残り火を燦りなんとか立っている すみえ
 褒める燦るおだてる母のリハビリ よしみ
 黄泉行きも安値を燦る家族葬 健吾
 標的にならず燦る裏のボス 竜之介
 燦られて気付く私と違う旗 美智子
 文明を燦ればサルが落ちてくる 楽生
 燦られて逃げ場ふさがれたまた幹事 直樹
 草食系の恋あおつてもあおつても 富美子
 若いわね言われ荷物を持たされる 郁夫
 燦つたら眉が動いた太郎冠者 保州
 燦られて有頂天から降りて来ず 弥生
 火が付いたか突然娘発車する ばつは
 そそのかすだけで冷たいあのえくぼ 修
 弱虫の背中を追い風が燦る 奏子
 燦られてうっかり口の蓋開ける 弥生
 スイーツの人氣最後尾に並ぶ あかね
 燦られた野心に翼生えてきた 富子
 母さんが後に引くなど咳ばらい 由一
 言い過ぎた喉に気まずい酒燦る 武彦
 一気飲みの洗礼うける新学期 (志) 千代
 燦られていつもの仮面脱ぎ捨てる 隆彦

飲みつぶりにいいと言われた二日酔い 郁夫
 だんじりを団扇が燦るやり回し 竜之介
 佳
 燦られて埋もれ火そつと顔を出す 一風
 ちよつと酒飲ますと気前よい母だ 月子
 買わなくてもよい物買わす店じまい 日の出
 燦つても燃えないトラに何故惚れた 忠昭
 長生きは出来ぬ美人と燦られる 惠美子
 人
 おじいさんを燦つてるのはおばあさん 義
 地
 腹の虫燦るヤキトリ屋のうちわ (矢) 五月
 天
 朱を注ぎ発酵の芽をけしかける 郁郎
 軸
 モンローを燦つた風の幸せ度
 兼題 「トリック」 森村 美花選
 官僚のトリックだらう消費税 萌子
 トリック撮影見ているように再稼動 たもつ
 子育てのトリック母の賞め上手 キヨミ
 トリックを見破り孫の鼻動く 大子
 あの夜は月が私に味方して ひとみ
 年金の財布トリックなどはない 楓 楽
 ステッキを忘れた人が走ってる 篤子
 トリックではないかサクラランボが届く 惠美子

口パクというトリックを見られてた あかね
 トリックだと思ふ青いバラが咲く 能子
 美しいトリック夜明けの赤い月 柳弘
 トリックもスパイスにして五十年 ひろ子
 トリックを見破るメガネ拭きながら 朱夏
 うつくしい髪トリックがありそうだ 理恵
 手品師は人を騙して喜ばれ 野薫
 改札口トリックとんと効きまへん 義子
 トリックと知って騙されてる至福 正明
 トリックを見破っている足の裏 惠美子
 東電の値上げにトリックが匂う 航太郎
 温かいトリックもある母の愛 堅坊
 だまし舟持たせた孫の目が笑に 宣子
 一日一個トリックをする梅一つ わこ
 腕のよいトリックですぬ整形医 俣子
 シヤボン玉のなかでダンス見せてやる 蓄水
 増税のトリックみんな知っている 大輪
 タネ仕掛けあつて婦人用下着 真理子
 嬉しそうな彼のトリック乗ってやる 義子
 トリックかも鏡の中に美女が居る 美智代
 トリックかもね紫陽花の七変化 航太郎
 上手だなあ死んだ振りするゴキブリめ ばつは
 残り物あつめ豪華な鍋にする 富美子
 トリックは心開いただけの事 (矢) 五月
 佳
 トリックに体当たりする正義感 愿

富士山を手の平にのせ写真刷る
この夕陽消してご覧にいれまする
母さんのトリックだったおまじない
じいちゃんを遊んであげただまし舟
人 茂

倒れたという母さんが出迎える
地 耕 治

白い糸を真つ赤に染めたのは私
天 哲 子

親戚をみんな殺したハワイ行き
軸 誠 一

トリックに目を輝かす三歳児

兼題「今更」 三宅 保州選

国の赤字今更僕に言われても
すんでます子育て支援言われても
ウオシュレットない暮らしには戻れない
もう一人かしこい子なら欲しかった
誘うたらわたし門限あると言う
別れても十九の春に戻れない
もう手など握つてほしくありません
今更でも女でいたい紅を引く
わたくしも女ですよと妻が言う
定年後別れましようと言われても
それならばと古い手紙を出してくる
八掛けでいいね余生は二割引
人 千 代

年の差が今更ながら身にしみる
袖にした人の立派な計報欄
今更にこびずわたしの彩で咲く
遺伝子にいまさら文句言うたつて
墓標撫で今更詫びる親不孝
父さんよなんでも今更会いにくる
今更に父を見直す決定打
母生きていたらと思う茄子の藍
待合室にみやげ忘れて離陸する
手遅れと言われてからの医者通い
やりなおそう言ってくるのは男なり
忘れてた今更謎の果たし状
鬼やんま今更行けぬビルの街
今更と思うが護身術習う
口から出た噂今更戻らない
窯出しへ折るしかない壺の色
今になり目くじら立てる磯鮑
今更が勇氣に変わる茜雲
切つてから癌ではないと言われても
その大きさしみじみ想う父の椅子
佳

宣子
哲子
ふりこ
すみえ
いさお
多恵子
よしみ
扶美代
武彦
蕉子
わこ
健吾
義
りこ
すみえ
喜久子
美籠
玄也
扶美代
房子
肇
朱夏
希久子
時雄

人
今なにを祈つても届かない海
地
こばれ種もう戻れない英の中
天
世の中を知らない過ぎたノラ帰る
軸
今更という頃に着く正誤表
兼題「奥の手」 谷垣 郁郎選
札束に勝つ奥の手は見当らぬ
奥の手の加齢ですよで医者は逃げ
ぐずる母に昔話とわらべ歌
奥の手に妻を使つてから家来
いざという時には死んだふりをする
しとやかな顔で奥の手やつくる
奥の手はありませんかと医者に聞く
妻の笑顔奥の手はただありがとう
奥の手は乳房の奥の奥にある
その時の為の人参ポケットに
奥の手は鍵の掛かった桐箆筒
不届きは全て故人のせいにする
奥の手の爪も忘れず研いでおく
致死量の劇薬いつも持ち歩く
奥の手はニンニクだったご回答
ロボットに因果含めて身代りに
誠
美智代
願
航太郎
昭夫
恵子
大輪
蕉子
弘光
りこ
恵美子
五月
ひろ子
牛延
真理子
克己
ばつは
楽生

奥の手は涙流し目横座り

勲

コンビニの弁当皿に盛り変える

耕治

じつくりと聞いて最後にハトを出す

順子

奥の手を出すのに手間がかかりすぎ

靖鬼

つけまつげここの一番はたつぷりと

ひとみ

土壇場に埋蔵金を妻が出す

敏治

奥の手に内緒話が一つある

欣子

出し惜しみしたジョーカーが干涸びる

多恵子

奥の手にしてますハイッという返事

扶美代

母さんがスツと無言で立ち上がる

奏子

奥の手の涙の壺も渴れてきた

理恵

いざとなったら仏壇を売り払う

完司

奥の手が聞けそうお酒追加する

瑠美子

長生きのコツ奥の手は棺の中

智彦

ジャンケンポンまだ奥の手はしまつとく

一風

神風が吹くと信じていた愚か

楓楽

住

奥の手に懸賞金がかけてある

義

大丈夫あの日の手紙取つてある

ひとみ

奥の手はこれから遺書を書くつもり

一步

節電の貌で出てくる冷奴

富美子

奥の手はもりもり食べてシワ伸ばす

宣子

人

深呼吸して奥の手を吐き出そう

恵美子

地

奥の手を仕舞つた場所がでてこない

かずお

天

透明にいつでもなれる術がある

愿

軸

奥の手に小さな傘を入れておく

「萎む」

小島

蘭幸選

まだ萎む齡ではないと笑われる

准一

風船が萎んでいますタイガース

一步

風邪引くと急に萎んだ顔になり

義

萎んだのは内緒適わぬ恋でした

能子

奥様が揺さ振る新党の萎み

ふりこ

ファックスで送つた愛はすぐ萎む

愿

ヒッグス粒子発見夢がまた萎む

楓楽

種抱いた花ニッコリとして萎む

由一

萎んでは膨らむ朝が来る度に

奏子

皺枯れが描く瑞々しい裸像

肇

夢いくつ萎ませたのか原子の火

誠

科学者の夢をも萎ませた仕分け

玄也

萎んでた上野の森の夢ひらく

わこ

萎むこと無い恩師へのリスpekt

五月

子育ては勲章乳房萎むとも

求芽

ハートが萎む振り向いて下さらぬ

希久子

萎むどころか意気天を衝く四姉妹

直樹

同窓会萎んだ花がよくしゃべる

蕉子

ヘソクリが萎んでしまい動けない

勝弘

カンナの朱萎む末路は見えてならぬ

勲

萎むのは嫌だとシャボン玉割れる

かずお

萎みかけても毎晩一合では足らず

天笑

梅干を食べると婆ちゃんが萎む

耕治

萎んではいるが破れちゃおりません

(矢)五月

知恵袋もうベツシヤンコどないしよ

ばつは

愛あれば勇気は萎むことはない

見清

萎むのも立直るのも得意です

美花

男なら萎む気持はよく判る

紀雄

別びんさんが萎むとおばちゃんになった

恵美子

すぐ萎む夫に空気入れている

あかね

萎んでいる私に花は咲いて散る

恵子

萎むよりパーンと割れて出直そか

満子

住

たこやきが冷えて萎んだ僕の顔

完司

神さまもちよつと萎んだ人だった

義

海の匂いがしている萎えていられない

朱夏

手足が萎んで哲学者になった

富美子

風船が萎むマニフェストも萎む

航太郎

人

月だけを愛して夜明けには萎む

真理子

地

萎む男へ風を送っている扇

恵美子

天

萎んだらあかんわたしも萎むから

山田葉子

軸

逢うて来た夜はゆつくりと萎みます

人生の荷物は重い峠越え

ブライドというやつかいな荷を背負う

いい人を止めて肩の荷降りました

手荷物も命も預け空の上

迂闊では済まぬ迂闊を裁かれる

虎の尾を踏んで火の粉を浴びている

電波飛ぶ迂闊にキーも叩けない

迂闊にも涙こぼしている勝者

ボケットの中へ仕舞っていた迂闊

迂闊には返事でできない薄の中

迂闊にも子供に言えぬ預金高

幸せは気の持ち方でやってくる

明日のこと分らないから今日は幸

幸せをシーベルトでは測らない

絵に描いたような幸せ二重額

愚痴こぼす度に幸せ逃げて行く

日々好日今日も時間が足りません

過不足なく生きて幸せ気付かない

幸せの魔法が溶ける万華鏡

川柳塔おっぱこ吟社(香川)川崎ひかり報

最後には笑う余裕を溜めておく

淡い恋押しの一手をしそびれ

何気なく顔で押し切る図太さよ

初いいういしい笑顔にひょいと油断した

春が来て今日も大きな笑いジワ

押してみても駄目なら少し引いてみる

目標は笑顔の似合う女になる

南大阪川柳会

津守

柳伸報

昌紀

町子

菜摘

昇

順一

高夫

ひろ子

孝子

桂香

昭枝

喜久子

かずみ

五十雄

起世子

和子

当代

准一

イセ

典子

幹子

はつ恵

放任

よしみ

弘

いさむ

あきら

ひかり

恋と酒

きらい

かと思

は逆の

事を言

きらいやと言っているのに抱きしめる

子の名前親の思いが籠めてある

元カレの名前子につけ忘れない

待たされて名前を呼ばれ診て五分

有名になって名前が先歩き

喉もどで停滞してあるの名前

迷子札下げて都会の散歩道

初孫の命名親父の筆の冴え

名前から時代流行よく見える

謡曲を聞くともぶたがキスをする

韓流にはまって眠い日を過ごす

今眠いお金の話明日にして

眠そうなお顔で見おろす昼の月

眠たいときいつでも眠る無職です

間食のスィーツだけはやめました

禁煙にやめるやめるがまだつづく

続かないパートにきつい目が刺さる

年金はお酒をやめて焼酎に

キヤンセルをしました悪いパスツァー

ある決意踵返した東尋坊

返すのに借り火の車止まらない

言いわけはやめてあやまることにする

誇らしく生きる人間やめるまで

梅ちゃんに見とれてパンが焦げたまま

大関が六人も居て平幕が

妻いのち心にタトゥー彫っている

家計

強いもん勝てただけの市長さん

へつらえば持病までもが甘え出す

都夫

聖水

ばっは

庸佑

恭昌

百合子

典子

正春

清

柳弘

直子

栄子

なきさ

忠昭

楓楽

勝弘

シマ子

ひさ乃

柳右子

一歩

あや子

柳伸

柳修

ルイ子

集一

弘風

和雄

克己

弘子

ダン吉

佳句地十選(7月号から)

玉置当代選

限りある命へ紡ぐ愛の糸

どれだけの小言を聞いた煙の土

妻を舞い母を舞い終えた花となる

八起き目にまさかの妻が手を貸さぬ

母の日のリボン豪華になり疎遠

爪あとを残して消えた夏の雲

柄杓からするりと桶へ落ちた月

一度抜いた指輪は一度とはまらない

年輪を重ねてまわる人間味

灰汁のある男が乙な味を出す

よりこ

隆盛

泰子

加央里

好栄

照彦

瑠美子

朝子

富子

志華子

花肇報

山の中あちこち捨てた粗大塵

飛び出しそうなしがらみ全部たち切つて

どれだけの違反をしたか釈迦に問う

あべこべの談笑続く村のお湯

子に還る親をなだめてするおむつ

核家族下座は老父の指定席

電子レンジに燐の極意を教えられ

一気飲み十九の春の命取り

美鈴

あすなろ

洋子

柳子

吞舟

きよし

つとむ

信子

一湖

小とみ

志華子

花肇報

小とみ

一湖

信子

つとむ

きよし

吞舟

柳子

洋子

あすなろ

ひとし

美鈴

はたる舞うころの揺れが華となる
逆立ちが初めて出来た日の鼓動
散歩路会いたいあの娘マルチーズ
恋の花違反でしようか狂い咲き
ペット犬主人に義理のきずな芸
てこずった子が老父母の世話をする
犬の鼻借りても見えぬ放射能
鎖の輪の中で叶わぬ恋をする
薔薇の刺抜いて香りを嗅いでいる
背走をしても時間は戻らない
大猿の仲の夫婦で子沢山
ああ無情石が流れて葉が沈む
死者生者みんな飛び出す鐘の音

川柳大阪

森松まつお報

恐ろしいどこ吹く風の再稼働
危機一髪人生にある運不運
初出社薫風かおる白い襟
そうかなと心うたがう出来そこない
尊さを知っていますか明日の君
長生きは一病息災七十路
行きました憧れスペインウフフフ
危険だと思えばすぐに引き返す
七十年下手な演技で生きてきた
安全か格安料金空の旅
再検査妻と二人で来いと医者
タクト振る妻の演技に逆らわず
うそ泣きをすると男が慌て出す
しつこいど放してほしい貧乏神
しつこめに押してくれたら顔こ

芳生 則彦 一呑 ふさゑ 花匠 愁女 井蛙 黙人 花峯 慕情 一花 五楽庵 勝弘 善純 司功 信醉 照月 かよこ 芳香 一歩 美世子 一風 柳弘 まつお 五月 朝子

不況風消費増税輪をかける

川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

精一杯歩いてますとカタツムリ
座れても立つても同じ電車賃
のろのろと牛と私の徒競走
妻の座を得るため私ダイエット
バワイアップしたくて食べて肥満です
カルチャーへ晩学の汗しほり抜く
のろのろと愚かに生きて満ちている
宝くじ大穴狙って買いまくる
のろのろと歩く大空見たいから
退職後時計もたないくらしぶり
のろのろでいいから余生楽しもう
離婚するバワイがなくて墓場まで
馬鹿にしたのろのろ歩き今自分
まだそこに居たのかオレの影法師
ジーバンの穴気にせず何処へでも
やれやれと座ると験重くなり
のろまでもやさしく親の介護する
石庭と向き合ひ心とり戻す
市長それはバワイハラスメントです
おもむろに個室に座り句想練る
九回の表を守るど根性
蟻の穴大事の前に気付きたい
すごいな日本国中黒めがね
あれこれと座ったままで抜き使う
鉄を振る老父もりの力瘤
盤の前座ると闘志沸いてくる
ドーナツの穴の向こうにある童話

紀雄 裕之 克博 とし子 舞夢 美世子 のん子 篤子 伸子 志津子 芳香 克己 公平 昭 五月 かりん たかこ 直子 勝弘 いさお 和代 妙子 温子 晴雄 シマ子 朝子

奇跡的空中のリングに見るバワイ
擁抱いた親鳥怖いものがない
ひと言が女の意地に穴あける
その尻はなんば詰めても座れない
五分五分のバワイで夫婦せめぎ合い
心の正座崩さぬままに逝った母
百態のドラマ演じてきたバワイ
お茶漬でそんなにバワイ出るかいな

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

シスルーを着てにんまりと老いの坂
本心が透けそうなので下を向く
ちちははが透明人間になった
町おこし川を資源に蜚舞う
腹の内透けて見えたらきつと蛇
ダンディーな河童考え込んでる
河童から夏の祭りの招待状
田植えから緋のもんべ消えてきた
進化してだんだん透けてゆくクラゲ
亡母徳が風が笛吹く日本海
延命は不要と明記ありがたい
恋をしたら河童に皿が赤くなる
透け透けを着ると美人に見えますか
ハッピーが続く指先から弾む
河童さん蛙の歌に聞きはれて
ひ孫出来子孫繁栄ハッピーだ
マニフェスト守らなくても屁の河童
透明な海で売り出すジョパーク
透ける服涼しげ陽射し遠ざける
流行のブラウス透けて正直な

賢子 桃花 日の出 昌紀 半銭 五月 柳弘 まつお 宣子 盛桜 茶子 和子 弘子 富久江 八重 完司 彩子 孔美子 小鹿 実満 美ツ千 露子 惣子 照彦 和子 かおる

いさお くに子 咲和 諷人 蟹郎 みさ子 美代子

宏章報

風登仁孝一大一宏
花美清寛子子子子子

坊農

(中)
彰史 勝お 次萌 芳子
治郎 弘か 郎子 子

洋々 一 粹報 朝は理成柳真國郁富のり隆辰克良枉勝信道あかり將寿惠堅弘比呂満
々 つ子子恵子弘子治夫子こ盛雄己一子弘子子子文之子坊風志修作

一 粹報

清行は弘由凱蟹善孝悦秀と千茂重金隆孝克地清節雅美振圭一
帆男はつ江康美子柳郎香夫二子四湖登忠祥浩男也平信子女作春一
郎

ガス欠だ酒をいっぱい注いでくれ
人生は長しガス欠だつてある
軽石のような人だが沈まない

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

料理酒でじゅうぶん旨い鯛のあら
消費増税聞くたび酒が不味くなる
酒の量減らすとストレスが増える
夕方まで酒は嫌いの二日酔い
酔いを避けて無口で酒を飲む
百歳が酒のおかげと豪語する
お人好し囁った父と同じ道

(太) 敏子

拉致の目途たらずに親が老けていく
ひとつづつ子に育てられ親になる

(太) 隆昭

アマゾンで買えないのです親の愛
ようやくとしみじみ解かる親の愛

(太) 和代

いきましょか誘われ辛い介護の日
介護受けれも言わずに逝った父

(太) 美智子

見栄張つて保護を受けるなんて言う
忘れた頃夫が愛してのなんて言う

(太) 勝弘

老女ですときどき女忘れてる
忘れることできない一ページあたり

(太) 賀世子

この世では忘れ上手が生き易い
十時には忘れた家を思い出す

(太) 信子

忘れたい事はすっかり覚えてる
忘却を誓う愚かをくりかえす

(太) 哲男

網棚に忘れた恩を返せない
電柱を描かぬと割に洒落た街

(太) 和子

電柱の陰に刑事の目が光る
電柱をたどり浄土へ参ります

(太) 克己

電柱はいつも遊びの輪の中に
電柱に背中預けた初キス

(太) 富子

大鯨 妻子 一 粹

夢草

のぶ久

祥昭

一志

(太) 昭

敏子

隆昭

(太) 朝子

和代

(太) 美智子

勝弘

(太) 賀世子

信子

(太) 哲男

見清

理恵

(太) 和子

克己

(太) 富子

虎の子が震えていますユーロ危機
民主党先ずは身内の駄駄押え
天界でロケをはじめた兼人さん
ファンDは為替上げ下げボロ儲け
与野党の政治ショーなど見たくない
流れ着いた瓦礫黙黙拾う国

西宮北口川柳会(兵庫) 藤岡

りこ報

四度目も仏の顔で無理を聞き
地図にない荒野目指した頃がある

その先につれない魚泳いでる
ジイちゃんのすつかり小さくなった夢

亡父母が居るかけ込み寺にする仏間
ノア船に積んだ先祖のころろざし

浄土かな四季折々の花の寺
電気よしガスよし仏壇も視く

傷口を広げるために来た返事
一匹の蚊僕にとつては吸血鬼

夫婦です共に泣いたり笑ったり
モナリザがつれなくみえるときもある

逆らつた父に今でも残る悔い
雨しとど恋の句集に溶かされる

笑つて生きるちよつと小さな志
クールビズすつかり男軽くなる

貫録をすつかりつけた母子手帳
駄々っ子見て仏心が騒ぎ出す

直子 たかこ

花笑

紀乃

桃花

秀夫

生枝

和幸

卓

たもつ

直

哲男

伯備

正和

美津子

哲夫

盛夫

耕治

朋月

勝弘

美龍

じろう

敏夫

キヨミ

淑子

ひとみ

光久

玲子

参観日つれない顔で子がよそ見
野菜志向今はやさしくなりたいと
花の種も女も明日もミステリー
仏の掌生かされ生きる小宇宙
今年こそ旨い糠漬志す

母の味真似てすつかり古希の顔
いつまでもつれない魚じつと待つ

上手いくい必すいくと背を押す
破れ鍋にすつかり馴染み五十年

つれないがどこか気遣い感じさせ
下り坂少し世間が見えてきた

人類がすつかり亡ぶまでいくさ
仏様迎え来る前メルして

生ビールに理屈はいらぬ喉仏
ブリになる前にハマチで夢断たれ

つれないとなおさら追つてみたくなる
無条件で降参したくなる笑顔

柳柳塔きやらぼく(鳥取) 大塚

恵子報

我もまた風邪にあらずや花粉症
予定にはないいきなりの物忘れ

春めいて一人遊びにさようなら
タンポポの架になり跳ぶ青空へ

シンブルに生きようとする眉がしら
新年度貧乏神が物申す

悪意ある人より善意の人怖い
スカイツリーから見ると皇居はるか下

人參の丸かじりするベジタリアン
横切った猫の尻尾の曲がぐせ

よしあしを問わず仁義がよく続く
恵子報

初枝

未延子

恵子

麗

千代

鶴子

喜周

瑞枝

壽々子

亜弥

光子 光子

わこ

いわゑ

和佳

りこ

弘子

利明

千代

毅

浩司

宏造

無限

千賀子

武臣

茂

利子

忠

恵子報

初枝

未延子

恵子

麗

千代

鶴子

喜周

瑞枝

壽々子

亜弥

花も樹も歌ってくれた誕生日
古事記から目覚めて顔を出す神話
ゆき ちかし

ほたる川柳同好会(大阪) 水野 黒兎報

ご近所の噂拡大コピーする
楓 楽

コピーしたレシビ見ながら腕振う
公子

物真似がうまいインコに癒される
春代

税制は高い国のをコピーする
黒兎

大好きな詩を丁寧に書き写す
美智代

コピー機の操作いまだに身構える
契子

穏やかに降って欲しいと願う梅雨
桂子

降るほどに話があつて尚迷う
正子

夫婦仲さばさばしてる共白髪
長一

さばさばとしました父の平手打ち
扶美代

田植すみ棚田一面初夏の色
柳童

たてまえの前に本音はもろかった
久子

糠床を交ぜると亡母の声がする
幹治

一人暮らし百貨店へと節電に
信男

君もかと補聴器談義長電話
勝

紫陽花の光る雨粒レインボー
康子

エコという殺し文句に弱い妻
郁子

読み聞かせ子供と夢をシェアリング
純子

八尾市民川柳会(大阪) 土谷 耀一報

梅雨も近いねと母から枇杷とどく
賀世子

川柳で愉快に生きてみませんか
清

父の日はゆっくり父と居てあげる
賢子

ああ虹だ夢捨てると言うている
一風

グラスの水コトツと鳴って怒がとける
華

七色の虹燦然と雨上がり
壽峰

居酒屋の横一列がよく喋る
朝子

虹色に染める少女の白い道
晶

天空の金環リングしかと見た
紀雄

夏野菜朝の水撒き実を結ぶ
森子

大きな虹を描いて点滴耐えている
加央里

何度でも結び直して貧乏神
草風

さよならは背中で寅さんの美学
高鷺

寝ていても銭の方から寄ってくる
一

結び直し結び直してまだ夫婦
欣之

黙契の想いを撫でている無沙汰
大輪報

川柳塔わかやま吟社 川上

五ふ着まだ決まらない試着室
紀久子

こだわれは丸い嘘にも角が立つ
めぐみ

こだわれは鬼も仏にみえてくる
克子

こだわりの過ぎて自分を失う
ほのか

自信ある人がかかった落とし穴
美子

凛としてまさかの乱を裁き切る
寿子

人生はまさかがあって面白
富美子

年輪を貌に彫つてたとはまさか
徑子

人生はいつも上向き歳忘れ
佐一

火も水もなんの是式上を向く
登美代

悪戦苦闘生まれたからは上目指す
輝子

スキルアップ目指して亀の歩が弾む
泰女

重心は低く視線を上置く
小雪

長いこと住むと敷居もきしみだす
英子

度胸きめ敷居を越えて水浴け
秀子

挫折した我が子へ敷居取り払う
夕胡

行間に敷居あなたへ踏み込めぬ
あきこ

錦着て敷居をまたぐ時の人
利治

不用意なひと言敷居高くなり
准一

川柳塔唐津(佐賀) 仁部 四郎報

脳トレをクロスワードでやっている
高明

金策も尽きた夜空に鎌の月
勝視

庭の竹他所の土地まで占領し
蜂實

妻の鼻歌が支えた幾星霜
松朗

眠れぬ夜モーツァルトを二度も聴く
節子

つじバラ咲き揃う庭隣です
四郎

ユニフォーム替えると変わるエチケット
輝夫

置き引きやスリご用心甲子園
正報

城北川柳会(大阪) 近藤

騒ぐほど地元を肥やす交付金
直樹

がつがつと海まで狙う国がある
縣作

がつがつと暮らしへ今日も陽が昇る
正作

粗衣粗食母から学ばせ上手
満作

ほどほどに肥えた女はチャームング
弘風

商魂をスカイツリーに見くだされ
和夫

胸の内秘めた初恋まだ熱い
義昭

ときめいた時間に付箋つけておく
洋志

えらいもんやトップ次第でこの熱気
修

肥えた土地待つて休耕田にされ
一歩

がつがつと地もびりもいていい仲間
たもつ

紫陽花蕾整え梅雨を待つ
美智子

丹精の野菜あれこれ肥えた土地
ルイ子

金環へ熱気がわいた日本地図
和佳

六月の風はむしむし色っぽい
宏

二番手がトップ狙てる息遣い
素雲

トップにもビリにもなれぬ僕でした
勝弘

末席でトップを指図する美人
 がつがつを見せぬ心の厚化粧
 ふくよかな母に抱かれた日の記憶
 ふくよかと言えば女性を傷付けぬ
 がつがつと食べて化身のトドになる
 里帰りガツガツ食べる母の味
 生きたって一人芝居をくり返す
 みな月の風誘うまま花遍路
 熱気球スカイツリーへ着地する
 トップには情容赦のない風雨
 反論の熱気を抱いている拳
 鼻声にブレイキオイル零れだす
 がつがつとするから運も逃げて行く
 酒一滴萎えた男を解化させる
 少年の夢を肥えらす大宇宙
 原爆の子で悲惨説き巨匠逝く
 がつがつと貯めたお金が仇となる
 肥えるぞと供えた菓子向こうから

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

体形の補正和服のあでやかさ
 買つて来ただけで安心してる本
 空きがないスカイツリーの見える宿
 文明の利器回転の早い子等
 ガソリンを使い十円安い物
 玉の汗からだの沢を流れたす
 紫陽花を生けて今日から梅雨の入り

川柳塔まづえ吟社(島根) 相見 柳歩報

白鳥よ君と踊ったのは昔
 生きるなら踊る氣迫で押して行く

柳弘 朝子 賢子 克己 入杖 集一 志華子 令子 典子 寿子 堅坊 榮子 仁 郁夫 隆男 倫子 麗子

百合江 美千代 週行 幸子 まみ子 雅美 かつ子

長吉 浜丘

踊りましようまいお酒が呼んでいる
 踊らねば巻きついた恋ほじけない
 金星はおてんとさんと踊る仲
 いい汗を流して明日へ送ります
 はじめての孫の踊りに涙する
 踊りの輪抜けたふたりを照らす月
 泥水に生きたも蓮の清らかさ
 知性派で英雄呼ばわりされる個性
 雑草はいやほうり投げたい時もある
 いつ来ても嫌味を一つ投げる人
 五円玉投げて大きな願い事
 ブーメラン帰らなくてもいいんだ
 リストラのように軍手が投げたある
 首脳会議民族衣装クールビズ
 父の日に届いたアロハよく似合い
 もう既に二人の仲はクールビズ
 クールビズ財布の底で起きている
 クールビズすべての窓をあけ放つ
 さつぱりところもクールビズにする
 梅雨晴れ間湿った過去を陽に晒す
 投げかける疑問返らぬ梅雨の空
 神名火の丘で梅雨あけ待っている
 梅雨入りといてあじさい色を増し
 梅雨入りに聞いてビールがますますなり
 梅雨の日の相合傘の想いでは
 サンクラス梅雨を味方にして逃げる
 夕立ちが決勝戦に心地よい

川柳さやま(兵庫) 遠山 可住報

絵手紙にやさしい声が添えてある

茂美 幸子 ちえこ 信子 玲子 左余 ゆき 聡美 久絵 美智子 桂子 注湖 禮子 草庵 とも子 涼子 柳歩 昌枝 知恵子 幸代 文子 民香 弘充 青帆 熊四郎 寿代

久子

好きな道真つ直ぐ来たよ性愛し
 こっそりと渡ってみたい橋がある
 影法師ときにひとりにしておくれ
 朝市で母似の声に足止まる
 この国はバブルが弾け夢破れ
 こっそりと心を盗む不埒者
 お早うの声をこたます通学路
 小沢氏に司法のイロハを示される
 風の子の声は大きく花の下
 朗読は声のトーンに魅せられる
 一円貨踏んで行く人捨う人
 雑草の一本ずつにある個性
 個性ある多彩な趣味の亡母偲ぶ
 孫の声聞いて心が癒される
 栗の実がいりりて弾けびつくりす
 あの歌をも一度ききたい亡夫の声
 個性出すチャンス到来待っている

富柳会(大阪) 古田 千華報

貧乏神とんで歩幅が合いすぎる
 桜はらはら老いて寓話の中にいる
 ほほえみのふたで隠した落し穴
 自画像に挑むピンクが疲れてる
 仕掛人だけが知ってる裏の裏
 善人は罌を仕掛けて眠られず
 タイプではないが隣人なぜか好き
 悪運は続かぬ定め天の仕掛け
 仕掛などいらぬ明日の風を読む
 決意する絶望からの第一歩
 夜は静かに魔女の修行をしるらし
 パラソルに人ひとり入れ歩き出す

美緒子 純子 美紗子 哲男 真由 啓子 多美子 開子 可住 かほる 幸子 ちかゑ 静子 美智子 照代 晴美 紅紫朗 裕美子 アキ 七朗 信子 千恵 日木 鬼焼 武人 千華

結び目をほどけば恋をする仕掛け
身の丈を知ったその時から牛歩
囀りに畑の土も光り出す

一才の歩幅がめざす好奇心

言いたげに吾を見て散る夕桜

せつかくの人生風船を飛ばす

わたくしも記憶も迷い子札になる

焦りから一歩先行く勇み足

エビローグ隣に春を座らせる

ばあちゃん呼吸吸い守っている隣

企てを見抜く眼力親譲り

バックギア外して一歩また一歩

端切れにも役に立ちたい意地がある

直角に話題を曲げる日の打算

はびきの市民川柳会 (大阪) 徳山みつこ報

まだ傘寿エンジンふかしてがんばろう

エンジンがかかってもすぐ答え出す

エンジン快調妻アハハというて

コンバイン音高らかに村に嫁

年やなありレーに出たら足もつれ

パン食いのレーを一度見てみたい

借り物で美女のご指名胸はずむ

言うてみりや五輪は地球の運動会

スカイツリー日本の季語となりそう

悪口を言う口元が淋しそう

淋しいが好き放題の一人者

青臭い意見に妥協して老いる

言い勝つてやはり淋しくなっている

奏子 寿之 よしみ 佳子 彦次 登恵 壽峰 欣之 高鷺 未知 伸雄 森子

缶ビール一個でボクの誕生日
介護した母に他人の名を呼ばれ
ボケットのティッシュが頼り花粉症
洗濯後ボッケ覗けばああ悲惨
ボケットに入れたつもりの鍵がない
ボケットにお金をそつと甘い母
ボケットの夢を昭和へ置いて来た
切り札はボケットにある逆転打
ボケットが多くて切符見つからぬ
ボケットとどくぞくハンカチ対の色
ボケットで盗み取られていた会話
ボケットに何も入れない粋な人
よく入るボケット穴が開いていた
少年が尻ボケットに入れた夢

長柳会 (大阪) 坂上淳司報

家族葬増えて義理欠くお付き合い
義理堅くわけの分からぬ署名して
退職後まだ義理チョコを寄越すママ
誘惑へチャイルメラ響く夜泣きそば
屋台店並ぶ縁日少年期
年金に縋り感謝で生きる今
めでたい日オンチの父が腰あげる
屋台から始め今ではチェーン王
すれ違い時間に悩む共稼ぎ
縋る子に注射に行くと嘘を言い
屋台引く夫婦の旨い味に惚れ
花と咲け老いらくの恋今日も酒
神仏に縋って向かう手術室
初対面なのに息あう屋台酒

美代子 高鷺 ちづる 佳代子 アヤ子 喜久子 喜久子 泰子 庸佑 章司 光男 りつえ ヨシ枝 六枝

風化せぬ心でつなぐ大地震
神の手に縋る思いの手術台
縋る子の抱っこを聞かぬ娘糸
土壇場で縋る手摺を決めておく
太陽のうつろう神秘絵巻物
今日も咲く屋台の酒に愚痴の花
お祭で子連れ屋台が客を引く
愛と言う一字に縋り生きている
しなやかに歌う余生のラブレター
父の血を継いだ息子の石頭
喜怒哀楽酸いも甘いも染む屋台
えらいこっちゃ悩みの種に芽が出る

京都塔の会 都倉求芽報

達者ですりもり食べて歩きます
人生はロマンズひたすら夢を追う
勝龍寺城青柳揺れて風薫る
ガラシ夫人のまぼろし浮かぶ夏あやめ
まったりの訛りが似合う京町家
細川ガラシ一度お会いしたかった
初夏の風無理難題を受け流す
一本の理論守っている孤高
ギャラ出ない家では黙る評論家
無神論で勝手な時は手を合わす
論より証拠食べた分だけ肥ります
自然解凍結論は急がない
電話代かさんでやとプロポーズ
一円に神経集中するスーパ
想い出のかさむ歳月とおしい
かさむけど体験が生むゆとりにと

光弘 孝代 三和子 正博 正子 福子 正子 一子 和子 久美子 直樹 克三 篤子 鹿太 すみ子 公子 美義 弘之 欣之 保子 庸佑 啓子 福子 哲子 輝美

歩いてますかさむ医療費減らすため
あれもこれもかさむモモ魔に抜ける壺
かさ高い思い出消しゴムで消そう
かな便りやさしい母の年かさね
かさむ歳ラストは歩幅たつぷりと
同じ返事で本音と建前が
違ってもこいつばいあるが双子です
老若を同じリズムで追う時計
以下同文と言われた人のやるせなさ
年寄りが青春してるペアルック
見つけてもまたさがしてる同じもの
同郷と聞いてはぐれてくる五感
同じことしても兄貴が叱られる
同じ符号なんと寂しいことだろう

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

益子 文代 葉子 由美子 義子 宣子 求芽 則彦 英旺 見清 満子 かずお 昭

おだやかに舞い納めたい終の章
花びらを両手で受けて香りきく
ビルの谷間冷たい街の風が舞う
個性だと認めてほしいなまけ癖
言いたい事いっぱいあってチャックする
顔色を気にしてくれる友がいる
頑張りが過るとネジがゆるみ出す
舞扇人間界の裏おもて
舞い上る齢でもないわ褒めないで
生きてる限りたためぬ舞扇
天然水青いグラスでワルツ舞う
天変地異雪舞う夏が来るのかも
舞い終えてたのしそうな花筏
ちぐはぐに舞っても仲のいい夫婦

房子 加お里 昌紀 久仁雄 光久 久 美智代 扶美代 蕉子 希久子 義子 みつ子 楓 楽

川柳花の輪(大阪) 岡本 薫報

一途な目かっこよすぎる仕事人
孫の背をそっと押してる遊園地
押し黙る妻と朝食増す不安
ほろにがいあとひと押しのためらいが
見守られ朱鷺は一途にヒナ育て
太鼓判押されてからのプレッシャー
いくじなし誰か私の背を押して
押しでダメ引いても勝てぬ妻がいる
鬼の親一途に慕う子を殺す
男の勲章押しの一手が光ってる
おめでとう二人で印を押しました

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

あや乃 昭好 敬子 三楽 みちる 一幸 陽 薫 勇太朗 克衛 やすの

スクランブルせかせか渡る出勤時
間の置き方師匠の業へ目を据える
中身より気持ち包むのし袋
おとなりに届いた中身気にかかる
いろいろな友のささで日々たのし
安全の中身不安な再稼働
私を置く場がなくて群を出る
置き石に哲学のある龍安寺
世の動き立ち読みだけで用が足り
これみよがしに玄関に置く女体像
追記したその一言が命取り
いろいろな父の似顔絵父の日へ
忘れた記憶が攻めて来る夜半
人が好き十人十色面白い
食卓は愛があふれる母の膳

庸佑 幸子 幸子 久子 佐和子 玲子 比ろ志 美津子 幸雀 志津子 歌留多 幹治 きらり

若い頃いろいろあつて今はとけ
愛用の筆から文字が出なくなる
飛び魚の空飛びたいという野心
金持の財布の中身カードだけ
置き手紙見るだけで出た不整脈
星流れ記憶失せゆく母を見る
言い訳のつづきを書いている日記
いろいろな人の数だけある余生
バラいろいろみんな女王の顔をみる
父の日に妻が冷酒をそっと置く
いよいよの時はニコツとありがとう
みごもった形で種子を抱いたピワ
梅雨晴れに心に部屋に風入れる
健康のリズムに笑顔忘れない
飛び込んで深さを知った海の青
いろいろと病気をしたがこれからよ
セピア色の思いが疼く日記帳
置き去りの過去が目醒める危うい日
人生はいろいろ模様組み合わせ
肩に手を置いて心へノックする
次世代へ希望を繋ぐ古木の芽
修羅一つ越えた記念に栓を抜く

いずも川柳会(鳥根) 佐藤 治代報

健二 行兵衛 堅坊 武臣 保彦 葉々子 宏子 求芽 巴子 見清 久子 千枝子 玲子 満子 美智代 葉子 弘之 隆 千代 美義 治代報 志げる 桂子 房緒 浜丘 敬子 きみえ 美江子

一言が過ぎて話が宙に浮く
診察券がモタモタと落ちつかぬ
ゲームセット相手と握手して別れ
道化師の仮面今さら外されぬ
ポケットで本音プツプツさわぎだす
もたもたのわたしはいつも輪の外に
納得のいかぬ言葉が水に浮く

これも緑きのうの敵と手を繋ぐ日記にはちゃんと本音を打ち明ける合併で浮いてしまった俺の椅子もう見えは張れぬ本音で勝負する決断がつかず心は浮いたまま我が家にも一人おちやめな人気者ドジばかり踏んでモタモタ雨ん中出雲から人気スポーツ発祥す復興に敵も味方もない日本人気ですて婚期遠のく子を抱え何気なく浮いた話の中にいるふところの本音が一つポロリ落ち格好をつけ過ぎ一人浮いている敵はいない敵はいないと丸裸モタモタと生きているから肩凝らぬ延命へそろそろ本音聞いておく人気呼ぶどうぞと自動ドア雨だれの本音いつしか石穿つ重ね着に本音隠して踏んでいるモタモタは嫌いのテリトリいなしこの笑顔が素敵しびれそう練っている敵の心が動くまでモタモタとホレと背中を押してやるモタモタに楽しい夢を食べている自己主張敵をつくってひとりぼちモタモタを見たら友達だと思ふモタモタがすっかり消えたこの頭ああ夫婦本音は言わずとも解る

倉吉川柳会（鳥取） 竹信 照彦報

遠回りしても迷わぬ道を行く

ちえ 登貴枝 孝亮 昌枝 たえこ 美千代 治代 幸子 佳子 徳子 靖乃 祐次 弘子 久枝 テル子 あきら 歌子 寿美 玲子 喜子 煩惱児 蘭水 熊四郎 多喜 左余 文子 茂美 ちかし

太陽は日の出日の入り迷わない迷ったら気楽な方を選びますあれこれと迷ったあげくすつかむ夜の道迷い携帯SOS扱いに慣れた機械に手をかまれ反抗期扱いに困り時期を手つ扱えぬてんて鍋の煮過ぎた具父さんの扱い注意危険物初孫の取り扱いは宝物いつまでも子ども扱いして困る宿帳に今日のもてなし褒めて書く私も君も毛だらけ皺だらけ私の生き血を吸っているやぶ蚊くしやくしやくに丸められても私です活力はたっぷり今が羽化のとき私は誰でしょうかと交番へタレントの聞きたくもない私生活川柳に出会い皆さまとも出合いじゃんけんに勝って一日晴気分超ラッキー卵を割れば黄身二つラッキーだ転移は無しの癌治療赤玉が出たぞラッキー触れ太鼓ラッキーが続けば不安つり出す高級品陳列棚は別である

川柳クラブわたの花（大阪）西川 義明報

話す度大きくなって逃げた鯛恙なく昨日今日明日繰り返しまいサイルに巨費をつぎ込み民飢えるアナログ育ちデジタルの世を泳いでる簡単な文字が出てこぬ点呼待ち

康子 けいこ 智恵子 英子 鬼一 日出子 恭子 悠子 貞子 酔芙蓉 祐子 石花菜 重忠 美ツ千 茶子 次男 喜美子 完司 風露 由紀子 和子 玲子 美代子 照彦 義明報 いたふみ 民宏 晴美 俊子

活気づく大漁旗に跳ねる鯛ナイターの無い日のチャネル忙しない鼻だけは穴あけるなと孫にいう畳替えい草の香りつい昼寝よもぎ餅母の温もり思い出す鯛はもういらんよ古稀の誕生日あれそれで分かる夫婦の長い旅原発を再稼働すれば亡国ぶ老妻に贈るとしたら百合の花石畳あのぬかるみも楽な道初節句顔より倍ある祝鯛立話長くなりすぎ迎える生きてれば後いくたびの花吹雪叶うなら畳の上で大往生春を呼ぶ夢や希望を待つ蕾旅の宿枕気になり落ちつかず目立たぬが人それぞれ思いやり百合香り悲しみどと満ちてくる

六甲川柳会（兵庫） 伊勢田 毅報

いざという人の情けが身にしみる鏡り負けたその悔しさは語らない赤が好き彼が似合うと言ったから赤い糸もつれながも寄り添って仏壇の祖母の口紅生きている赤い糸信じたはずが勘違いどん底で受けた情けが起爆剤三丁目人の情けが熱かった節電に情け無用の夏が来る情けより諭吉欲しいといつ本音情けなどいらぬと決めて独り立ち

義明 はじむ 浩三 愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子 奈良司 榮美子 かなえ 明美 ますみ 宏至 知佐子 美代子 一風 能子 美穂 ひろ 妙子 洋一 ひとみ 茂夫 盛夫 清之 政一

さよならに情けのお酒注いでやる
托鉢の器の中に情けみる

千賀子
加寿子

ボランテア人の情けを肌で知り
競うのに疲れて唄うわらべ歌

夏子
淳

競わずともいつかゴールとマイベース
競うこと止めて気付いたアホらしさ

浩司
弘

ライバルはライバルとしていつまでも
ライバルの友と競った木の校舎

実夫
繁義

ほどほどに競ってシニア悲しい
災害のがれき受けて競いましよ

義博
寿朗

逆風も命を懸けて競う意気
競い合う気持を持って前進す

康子
遼子

枝よけてお辞儀の光に地蔵さま
平均寿命過ぎて体力容赦なし

博史
利子

無言電話切ろうとしたらバアブウバ
ビタミンの名ではなかったAKB

武臣
武彦

才能は無いが真面目な子に育ち
戻らぬと貸した金だが惜しくなる

弘郎
弘子

自分史にトップを飾る一行詩
乗り継いでようやくとどろき着いた墓地

登美子
宏造

介護する目線をとんと下げてする
手探りが続く尊厳死のゆくえ

無限
毅

入道雲しつかりせよと亡父の顔
逆光で撮ればわたしも超美人

光久
久

川柳藤井寺（大阪） 鴨谷瑠美子報

鉛玉が一つ教室で転ぶ
おどろいて鉛が口から飛び出した

美代子
榮

緊張をほぐす小さい鉛一ヶ
饒舌の口を塞いだ鉛一つ

シルク
龍一

鉛と鞭アメを選んだ悔いがある
鉛をなめる顔に優しさにじみ出る

扶美代
雄太

なめさせた鉛に隠れた下心
鉛なめて声ならしてから歌う

悦子
アヤ子

チルド食プロの味だが粗食かな
物足りない夕食二人して無口

清之
登志子

お茶漬とキユーちゃん玉だけの妻の留守
朝食は納豆ごはん王子ぬき

勝弘
婦美枝

粗食に生きた百歳の母ここにあり
粗食にも旨いものあり塩にぎり

喜代子
いさお

願わくば末期の水は熱燗で
静寂に水琴窟のリズム乗る

絹枝
恵美子

原発は水すまぬ中再稼働
淋しさへ月がほほえむ水鏡

ヨシ枝
雅枝

水澄んで大和川にも魚戻る
象の鼻哀しいときも水を汲む

瑠美子
紀雄

一滴の水を集めて大河なり
加茂川が鴨川になる水の旅

一箇
正和報

川柳さんだ（兵庫） 堀

可も不可もなく今夜も缶ビール
愛していないくせに全てを聞きたがる

哲男
忠

雨降ると神経痛に教えられ
雨になりやそれならそれで昼の酒

好文
祐康

ギリシャ危機何もしないぞ勇気いる
偽名書く隠れた人生十七年

雅司
雄司

雨粒を透かせて遠い人と逢う
マスコミが騒ぎだしたぞメダル数

茂山
雄太郎

外は雨微笑む像にとらめっこ
解るかよあとはウェブと言われても

健二
雅尚

きつぱりと決心ついて雨あがる
分を尽す刻を下さいもう少し

見
雅

借金の上に後押しされ元氣
いつさいをあなた任せの旅ごろも

光久
真由

いらっしやいませ新しい出会い待つ
雨の日の猫がヒマかと通りすぎ

喜久子
ちあき

まつさらな朝に心の美容液
里便り子燕八羽見においで

淑子
一子

こま切れる時間をつなぎよく遊ぶ
スタイルも年の差もない赤い糸

ひとみ
キヨミ

いつからかヨコ書きになるラブレター
イビキかく者ばつかりの四人部屋

章子
正和

米子住吉川柳会（鳥取） 渡辺多美子報

ワンチャンスお願いだからもう一度
百までは生きると言われ度肝抜く

ひろし
正二

喋らして貰い少しは気が晴れる
布団蹴り枕蹴られて避難する

宏一
公一

定量で終えた晩酌褒めてやり
米川のつじじ満開みてごらん

紀の治
登美枝

散歩道少しの段差転びそう
駅伝に付いて走った応援歌

欣子
スミエ

竜巻も天気予報の仲間入り
夢つかむロンドン行きの切符手に

多美子
礼子

極端に異なる二人丸く老い
一枚の昔の手紙時止める

未延子
陽子報

川柳同友会みらい（鳥取） 吉田

買えもせぬ新車案内また届く
糠床も春を迎えて手がかる

純宏
寒之

陽子

良い事の賞味期限が速すぎる

人格を格付けなどで決められぬ
美容室ミラー正直すぎますね

紅をひきしほむ心に活をいれ
振り向けば味方が敵の陣にいる

前を行く影追っている好敵手
重い腰桜前線やとと上げ

日の当たる時だけ影がついて来る
ごめんねとナース気合いの注射針

安らぎから気合いを入れて門を出る
ど忘れで何を探しているのやら

水仙の一番咲きにキスをする
体に酔頭にバズル柔かに

がれき処理主婦の本音に揺れ動く
努力と運レールのように揃わない

お手本を真似てまねてもDNA
まぶしさと無縁に生きて七十年

子育てにハンドルはついていません
思い通りにならぬハンドル捨てるかな

この国をぼんやり見ている事できぬ
春野菜芯とがらせて謳歌する

たすけ舟今日はあなたに借り返す
百円パスにぼんやりと乗るゆとり

大山滝句座（鳥取）

新家 完司 報

なんばでも入る風呂敷持つていく
新聞の音読をして脳を練る
実直な父の背骨は前かがみ
メタボリック・シンドロームの布袋さん
古傷が痛むやつぱり今日は雨

葵

慶一

綾野

和恵

温子

章子

美恵子

久司

信子

三郎

かずこ

恵美代

勝之

敦子

嘉子

安子

正雄

みち子

華蓮

一眸

和代

菜美

公弘

ひかり
紀の治
芳光
石花菜
寿代

自分ではほんの少しと思うボケ
虚と実の狭間に薄い舌がある
食欲が積り腫も濁りだす
日本はシャキッとしない練りワサビ

禁断の実には布切れ掛けておく
下帯も腰巻もこれチラリズム
言葉尻濁し私を迷わせる

練りすぎて脳細胞がアクビする
順不同の席にもボスがおりました
小さな嘘重ねる度に目が濁る

六十代今が食べ頃どうですか
生きている清濁合わせ飲んで
サロンパス十枚貼って松を摘み

グーは良しパーは駄目だとわらび探り
励ましてもらいたくなり弱音吐く
ふと思う老前整理しなければ

子育てに夫婦の絆ツバメさん
布おむつ洗った頃は若かった
嫌いな人会って話せば糧になる

サクランボ佐藤錦は小生意気
わかあゆ川柳会（島根）松本はるみ報

さりげないジョークの中にある本音
担がれて嘘と本音がわからない
一番の幸せ二本の足で立つ

一番がびりになったあみだくじ
足のうら本音がちらり見えかくれ
帰り際本音ちょこっと顔を出し

あじさいとしっぽり濡れてかたつむり
私にはこの目にうつる空で良い

美恵子

忠良

照彦

芳山

麦青

大鯰

美ッ千

博子

厚子

幸子

典子

けいこ

重忠

鈴野

正

希楽良

恒子

すみゑ

仁美

完司

かつ子
英子
はるみ
好栄
恵美子
澄子
ちよえ
博利

生きのびることが本音とするネズミ

川柳あまがさき（兵庫）加川 靖鬼報

プロポーズだったんだらうあの理屈
貯金から自分の寿命を決めて行く
融通がきかぬわたしの瘦せ我慢

話はずんずん貴方の事がちよっと好き
片付けのろろく出来ぬ娘でごめん
人生観自分のベース親譲り

説法をろろく聞かず寺を出る
迷いから覚めて一歩を出す若さ
思いやりあれば理屈も生きてくる

波立てず妻のベースで定年後
新妻はろろく料理しやしない
彼女から五万貸してと又メール

オイ雲僕にも厭な奴がいる
年重ね歩くベースがやと合う
こんなにもあなたを想い書く手紙

もしかして違った私あったかも
ろくすっぽ仕事もせずになしを食べ
パソコンも老いたかベース合ってた

ベースもカー越しで走ると足にいく
目隠しをされたためくも忘れなく
めぐり来る月日愛してマイベース

三食をろろく取らず飲むばかり
古稀からは米寿白寿とマイベース
理屈ではないよと背なを叩かれる

酔いました誰かとしゃべりたい夜
車椅子押す手は刺さぬバラの棘
しんみりと手酌で気持語り合う

清泉

菜々子

初音

佐紀子

美也子

あかり

イサミ

柳明

幸香

よしひさ

純龍

楓花

祐康

比志

和子

ひとみ

りこ

野薫

正和

靖鬼

里江

キヨミ

朋月

哲夫

ヨシエ

洋子

勝巳

耕治

相槌は打つがろくろく聞いてない
親と子の間切り取り線が要る
ペースダウンして様子みる現在地
早起きにペース合わせて共稼ぎ
返事せず笑わず冬の十六才
忘れてはいないが気付くのも遅い

川柳塔さかい(大阪) 村上玄也報

赤ちゃんの百面相は見て飽きず
穴のあくほど眺めても飽きません
飽きたから会社を辞めたわけでない
飼い主を飽きたと猫が家出する
最後まで本読み切ったことがない
飽きもせず猫の額に水をやり
変わりたい心くすぐる化粧品
母さんが文句言わなくなりました
墨痕がはや薄れてる絆の字
生き方を変えたら僕は僕でない
総入れ歯はずした顔を見てしまい
帰省した兄の訛りが消えている
失敗をするたび影にしかられる
おてんばが素敵な母をしています
残された道は自分が変わることに
旗色が変わった金が動いたな
現住所活断層の真上なり
女房の機嫌見ながら物申す
呼びだしの椅子はびくびく浅くかけ
首切りにびくびくしてる正社員
血圧計小心者と見破った
なにゆえの心変わりか妻写経
どしゃぶりになつてあじさい饒舌に

五月 哲男 美籠 蓄水 蕉子 見清 玄也 俣子 朋月 時雄 敏治 玄也 雅明 像山 明子 和夫 としお さくら つづや 唯教 冬虹 世紀子 誠一 半銭 好 八千代 千代 ばつは 篤子

生レバーちよつとびくびくして食べる
びくびくとするほどお金持つてない
母さんが逝つて父さん変わり出す
明日という手がありました寝るとする
びくびくとしてはいられぬどん詰まり
こわいふりして抱きつくかずら橋
二次会にびくびくと行く空財布
青臭い敵の正義に音を上げる
安心を手の平にのせ寝てしまふ
愛想良い店員やから値切れない
あんぱんを手で割るようにネタがばれ
みそ汁の変わらぬ味へ旅がえり

翠洋会(大阪) 佐々木満作報

三世代生きた苦難の語り草
美しき言語廃れていく日本
語り部の老いて昭和も遠くなり
語り部も老いきのこ雲風化する
論語から学んだ人の礼と仁
ネクタイにストレス聞いてもらう朝
タイピンの真珠ばかりがよく目立つ
のこり時間へ少しゆるめに結ぶ紐
ネクタイをはずし嬉しきクールビズ
七人の敵にネクタイ締め直す
準備する間の夢が楽しみなし
ふいにくる妻の襟に備えなし
生きるとは死への準備にほかならぬ
掃除してヘルパーさん待っている
お誘いが欲しい準備は出来ている
エンディングノート消しゴム離せない
おばあちゃんはあつても無いと言うお金

竜之介 五月 舞夢 日の出 かりん 和幸 健吾 清月 澄空 天笑 志華子 浩二 昭昌 満作 日の出 みつ子 理恵 げんえい 弘子 公平 希久子 楓楽 真澄 捷也 千歩 桃花

同窓会昔の顔であだな飛ぶ
かりゆしの心伝える鳥の風
物忘れ二人仲良く忘れてる
四億を銭と思わぬ小沢さん
足踏み促す友や並ぶ友
本当は淋しいボスの腕時計
はんなりと草木で染める夏帽子
長生きの美学笑顔を忘れない
しつかりと生きてく為に食べない
こんなにも防犯カメラあつたのか

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

ひとめばれいかにも惚れるブランドだ
米買いに田舎回つた遠い日よ
ヒゲジイのあだ名がついて剃れぬ髭
鯉ひげ邪心ときどき見えてくる
ヒゲ伸ばし少々威厳つきました
ご立派なヒゲだ財布はいつも空
定年でヒゲも頭もフリーター
カーブにはお地蔵さまが立っている
苦い水呑んで人間磨かれる
苦くても私の好きなゴーヤです
メタボリがミニスカートで闊歩する
一杯のコーヒードで済むミニデット
ミニサイズ値段決して負けてない
ミニバラの刺を侮つてはならぬ
ミニデールに公民館が湧いている
あこヒゲを撫でて野心に炎えている
にんげんの温味を計る猫のヒゲ
青赤黄ミニカー並ぶテレビ前
コレクシオンミニカー揃えご満悦

善之 滋彦 舞夢 知之 すみ子 正雄 紀一 集子 照子 義 主一郎 幸安 茶忠 昭弘 一瑤 菖郎 蟹節 たぬ 清帆 公子 一粹 くに子 雅和 子女

ジンスクスを口実にしてヒゲ剃らぬ 美恵子

ロース川柳会（兵庫） 木村貴代子報

招き猫のウインクならば軽く受け
招かれて笑いの渦にどけている
お招きは最高の笑みもつてゆく
又来てね幼い声に灯がともる
招いても何故か金運知らん顔
平和だな駅にも善意の傘並び
雨しとど試行錯誤の一行詩
雨上がり赤い長靴見せに来る

川柳ねやがわ（大阪） 籠島 恵子報

もう消せぬ汚点がしぶとく生きさせる
失恋へ陽はゆつくりと落ちてゆく
ゆつくりとあせりが何時もせめぎ合う
生命線ゆつくり見ている仕舞風呂
暑いから少しジョークで冷やしとく
スカイツリー古代を活かす真柱
梅雨寒に滴滴滴とリズムカル
原発も政界もまた別世界
隠し事互いに無いと隠してる
さし芽から根を張り育つ花愛し
リーダーの素質二葉の香しい
何よりも家族の笑顔欲しい父
子を論す母は時間を惜しまない
墓石もバーゲンセールされている
父の日も父は目刺しで飲んでいる
ゆつくりと歩く傘寿が過ぎたから
リハビリの手がゆつくりとリンゴむく
ゆつくりと生きる自分自身を裏切らず

年代 哲子 義子 みる 藍 貴代子 恵子報 亜成 博泉 美智子 麗 郁夫 かすみ 西 杏 銀 杏 美 江 朝 子 賢 子 仁 仁 仁 清 一 風 鈍 甲

家庭内別居している暑い夏
あちこちに懺悔のしみのある聖書
父の日に呉れた青春18きつぷ
ゆつくりとことばを選び返事する
とミジメとあり耐えて来たあかし
手間暇をかけてゆつくり化粧室
どんなまいと生きているのに風邪をひく

岸和田川柳会（大阪） 佐藤 幸子報

ケータイの無かった頃の待ち合わせ
ダンディに野良着きこなす熱い汗
子の寝顔見るとしかめつ面緩む
大工方盛り上げダンディええ男
吹き降りの雨が男女を引つける
再稼働国と民とが囁み合わず
九条を沢田研二が歌つてる
下手物のような夫と五十年
見解が政府与党でくい違い
おつまみにちりとてちんをそつと出し
雨よ雨悩み流すか溜め込むか
父は子を叱りこつそり褒める母
脳天のネジを緩めて縄暖簾
体ゆるめ今残照の中にいる
伸びたゴムお前も元に戻れぬか
見てくれの格好よさより心意気
ダンディと言われ仮面が外せない
原発のゆるい審査の再稼働
下手物を飾って今日もご満悦
雨上がり洗濯物が上機嫌
仕事から帰る時刻に妻パート
気のきいた洒落が緩める場の空気

弘 風 弘 洋 弘 一 三 郎 秀 修 秀 雄 恵 子 朝 子 昭 益 祥 香 代 和美 勝 彦 玄 也 幸 子 笑 司 信 二 仁 緑 丹 吉 隆 昭 武 志 珠 子 忠 太 檀 代 弘 子 ひろ 子 英 夫

素足には程良い下駄の緒の緩み
うまい物食べている時煩緩む
ダンディの積りでいたが見透かされ
消費税上げる方向涙雨
心までダンディやったうちのひと

川柳ねやがわ（大阪） 前月分籠島 恵子報

燃え尽きる事を恐れず修羅の道
青葉風駆ける少女へ聖五月
居眠りのハンドルが描く地獄絵図
よし勝った思いが負けに繋がった
見逃してやりたい奴が辞めていく
酒談議酒道場の主の葬
青い鳥見逃しやすい青い空
餌運ぶトキを見守り出る拍手
寄り道はせずに逝きたく座禅組む
一歩ずつ夢追いかける虹の坂
嫁の失態見て見ぬ振りの思い遣り
台所道場にして無位無冠
背なを押し見逃す母の愛の鞭
泳がせておこう尻尾を出すまでは
見逃して来た人生の多いこと
友としても油断大敵出し抜かれ
私の賞味期限を忘れてた
大河ドラマゆかりの地には人が寄る
禅道場警策の音だけ響く
至るところ道場となる人の道
歩道でも信号青も油断せず
喋りとうとうずうずしてゐる靴持ち
油断したバラは嫉妬の風に折れ
坂道の途中に椅子が置いてある

房 枝 康 信 義 泰 義 子 集 一 西 昭 祥 昭 美 智 子 秀 雄 弘 風 麗 仁 朝 子 柳 弘 かすみ 一 一 仁 清 美 江 三 郎 郁 夫 さ 子 仁 子 鈍 甲 忠 央 修 洋 恵 子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	19日(日) 14時締切 軽卒・キャンプ・世話・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 花火・木・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日) 14時締切 ほどほど・きっと・ひとり言	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時40分締切 叫ぶ・格好・まだ・自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	21日(火) 13時から 波・中古・貸す・まったく 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金) 9時開場 向日葵・蟬・電話・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
和 歌 山 三 幸 柳 会	24日(金) 12時30分開場 遊園地・うんざり・道	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
川 柳 塔 すみよし	26日(日) 13時開場 里・耕す・つらい	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
八尾市民 川 柳 会	第59回 八尾市民川柳大会 26日(日) 13時締切 香・輪・無・小・人・数・自	八尾文化会館 5F レセプションホール 問い合わせ 土田欣之 TEL072-992-4934
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日) 14時締切 距離・メモ・台風・背中	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時開場 殺生・エステ・手打ち	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原深雪
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 ふらふら・ささやく・すごい・窓	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(月) 14時締切 気・かすれる・保つ	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤号出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	27日(月) 20時締切 葉・下駄・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 さ か い	7月31日(火) 10時30分開場 第30回記念夜市川柳大会	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
城 北 会 川 柳 会	4日(土) 13時開場 寸前・とりわけ・キック 自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	4日(土) 14時締切 入り口・そのまま・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4日(土) 14時締切 我・徹す・ほのかに	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
あかつき 川 柳 会	10日(金) 14時締切 淋しい・星・歩調・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土) 14時締切 カード・黒・勇気	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	11日(土) 13時45分締切 敵・痛い・命・ゆらゆら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 錦織 禮子
川 柳 塔 打 吹	11日(土) 13時締切 鎖・騒ぐ・踏む	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
西宮北口 川 柳 会	13日(月) 14時締切 看板・こぼれる・きっちり 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにののみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 八時・知恵・やっぱり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火) 13時30分締切 運・知る・さっぱり	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール 螢池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 な ら	15日(水) 13時開場 掴む・膝・勝手	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 裏・うやむや・宇宙	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 13時30分締切 告白・息巻く・むなしい ドライ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 塔 わかやま 吟 社	19日(日) 14時10分締切 兼 題 = 台・帰る・蒸発 課題吟 = 姉・妹	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 柴原道夫

柳界展望

んだろう 石橋 芳山
★北野哲男氏（理事・三田市）は、全日本川柳誌大会賞受賞。

都会より星が近くにある故郷

★第57回今治汐風川柳大会は6月17日、今治市総合福祉センターで開催。出席者169名。同人天位。

過を抜けると新しい僕がいた 小島 蘭幸

わたくしを磨いているのです介護 小島 蘭幸

穴埋めの僕がスポット浴びている 黒田 茂代

★川柳塔みちのく25周年記念句会は7月1日、弘前プリンスホテルにて開催。同人天位。

問いつめてりんご歪になつてくる 木本 朱夏

真人間になろう百万粒の汗 高瀬 霜石

総合順位、5位西出楓楽、7位高瀬霜石、11位木本朱夏

★藤井則彦氏（同人・豊中市）は、第2回追手門

川柳 金賞を受賞。

「追手門」も見ずに卒業した不覚

☆河内天笑氏（名誉主幹・堺市）は、5月8日大阪国際会議場に於て「平成24年度憲法記念日知事表彰」を受賞した。

☆新家完司氏（副主幹・鳥取県）は、全日本徳島大会に於て日経新聞より取材を受け、川柳界の現状、川柳塔社のことを述べた。

☆小島蘭幸主幹・西出楓楽理事長・川上大輪副主幹・新家完司副主幹・板尾岳人相談役・奥田みつ子相談役は、6月10日（日）全日本徳島大会に出席。

☆奥田みつ子さん（相談役）は、全日本川柳協会80歳以上の功労者として6月10日、徳島大会に於て顕賞された。

☆宮崎シマ子さん（参与・八尾市）は6月3日、川柳市文化連盟から受けた。

▽柳界動向△

○盛岡市松園観音墓地内鶴彬川柳句碑「手と足をのいだ丸太にしてかへし」をこのたび鶴彬の菩提寺・光照寺へ移設のための基金募集。一口、二〇〇〇円。振替口座〇二三八〇七二五二二七 佐藤岳俊

連絡先 佐藤岳俊（TEL&FAX 〇一九七四七一〇七二）

▽ご芳志御礼△

○コキ封筒（株）より封筒ご寄贈頂きました。

▽計 報△

■森井善居氏（同人・竹原市）は6月30日逝去。行年75。小島蘭幸主幹が弔吟を拝読しました。

▽出 版△

◇川柳塔すみよし合同句集「すみよし」B 6判106頁

お祝いことは、西出楓楽

◇森山盛桜氏（理事・鳥取市）は句集「柿の木の下」を上梓、A5判、136頁

◇黒田能子さん（常任理事・芦屋市）は句集「風の彩」を上梓、四六判202頁。序文・奥田みつ子、跋文・西口いわる。

◇八木千代さん（参与・鳥取市）は「椿抄」を出版、A6判66頁。あざみエージェンツ発行。一〇〇〇円＋税

▽お詫びして訂正△

▼6月号P3座右の句の私の句「いつまでも行けぬ流れを見ていては」の作者は桃谷和郎さんでした。P65上段18行目、物忘れひどい老母に叱られる↓ひどい老母に。

7月号P8上段3行目、東電の三波春夫のあの台詞↓へ。5行目、人間のマナIを嗤っている野性↓嗤で

いる。P71下段夜市川柳8

★川柳天守閣の「久保田元紀を偲ぶ会」は5月25日、大阪市立弁天町市民学習センターで開催。出席者113名。当日の同人の秀句は次の通り。

倦怠期蟹は得意の横恋慕 川端 一步

★井原ジーンズ誌上川柳大会結果、本社関係成績。最優秀賞

人の世に格差をつけぬ 藍がある 喜田 准一

一生を悔いなく過疎に綿の花 小野真備雄

ジーンズが似合う夫婦で相棒で 工藤千代子

★第36回全日本川柳2012年徳島大会は6月10日あわぎんホールで開催。出席者520名。同人特選。

自由席野心を夢に入れ替える 斉尾くにこ

雲燃えて山の向こうはな

回、奥山晴雄↓晴生。P 98
中段9行目、日に一度何か
出来たら二重丸↓日に一ツ。

表Ⅲ 9月号発表、水煙
抄、川上太輪↓西出楓葉。
檸檬抄、福士慕情、池森子
↓森山盛桜・奥田みつ子。

▽取り消し△

7月号、P 58上段14行目か
ら18行目の5句、6月号と
2重投句につき取り消し。

▽新誌友紹介△

伊那市

丸山 健三

篠山市

木本 朱夏

瀬戸内市

上月 格男

紹介者

東槇ますみ

貝塚市

工藤千代子

紹介者

吉道あかね

大阪市

西出 楓葉

紹介者

山原総一郎

宿毛市

前 たもつ

尼崎市

増田 純子

紹介者

松本 秋子

常任理事会

長浜 美籠

①第18回川柳塔まつり関

連事項②新理事・常任理

事の推薦③定例確認事項

④各部報告事項⑤その他

次回 8月7日 AM 10時

次回 8月7日 AM 10時

新 同 人 紹 介

酒 さか

井 い

真 ま

由 ゆ

―可住・哲男推薦

石 い

田 た

隆 たか

彦 ひこ

―岳人・淳司・正子・富美子・直樹推薦

梶 かじ

原 はら

弘 ひろ

光 みつ

―岳人・淳司・富美子・直樹推薦

木 き

見 み

谷 たに

孝 たか

代 よ

―岳人・正子・直樹・富美子・淳司推薦

谷 たに

久 く

美 み

子 こ

―岳人・淳司・富美子・直樹推薦

松 まつ

岡 おか

篤 あつ

―岳人・淳司・富美子・直樹推薦

白 しら

川 かわ

淑 よし

子 こ

―哲男・正和推薦

尾 お

崎 ざき

一 かず

子 こ

―哲男・正和推薦

藏 くら

田 た

光 みつ

子 こ

―いわる・富喜子・光久・みつ子推薦

市 いち

坪 つば

武 たけ

臣 おみ

―毅・無限・能子・光久推薦

平成23年度句碑獲得者

井笠川柳会

笠岡市古城川柳公園

大空と遊んで

いじめなど知らぬ

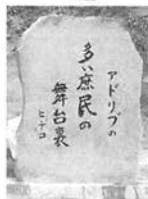
鳥取県鳥取市 両川 無限



アドリブの多い

庶民の舞台裏

広島県府中市 藤岡ヒデコ



最近「某大手新聞の紙面に、あなたの句を載せませんか」と高額のお誘い電話がかかってくるようです。ご注意ください。

番傘川柳本社8月

水府忌句会

日時 8月6日(月) 18時

締切 18時30分

会場 ホテル大阪ベイタワー

◎詳細は、7月号P45参照

残暑お見舞申し上げます

初歩教室への投句

お待ちいたします

鈴木 公弘

〒689-0343

鳥取市気高町飯里八四一四
電話〇八五七―八四―二八八六

残暑お見舞申し上げます

(日川協加盟)

「川柳 いのちの詩」発行

川柳同友会みらい

会長 鈴木 公弘

《事務総局》 〒689-0343 鳥取市気高町殿410-2
稲村遊子方 TELF 0857-84-3149

残暑お見舞申し上げます

富 柳 会

藤 廣 井 久 石 柝 中 中 河 前 林 小 関 山 古 中 中 池
他 田 谷 澤 世 橋 尾 島 村 野 田 野 野 田 崎 井
一 武 千 寿 高 未 奏 彦 登 澄 紅 よ 寿 千 深 ア 森
同 人 恵 峰 鷺 知 子 華 恵 次 子 子 朗 紫 し 之 華 雪 キ 子

富田林市民文化祭

富柳会 62回 川柳大会

中井アキ句集『万華鏡』発刊

と き 9月22日(土) 正午開場

ところ 富田林すばるホール

(近鉄長野線 川西駅下車8分)

課題と選者 各題2句 席題なし

「海」	辻	葉	選
「むらさき」	赤松	ますみ	選
「爪」	長島	敏子	選
「陽炎」	木本	朱夏	選
「そのまま」	板野	美子	選
「平」	池	森子	選

出句締切 午後1時

会費 1500円(お茶・発表誌呈)

懇親宴 4000円

問合せ 池 森子(電話 0721-25-0603)

主催 富柳会・富田林市 他

宗谷川柳社創立50周年記念

全国誌上川柳大会案内

課題 (各題二句)

「五十」 川上大輪 選

「海峡」 大木俊秀 選

「歴史」 尾藤一泉 選

「さいはて」 岡崎守 選

「人情」 石井有人 選

投句料 1000円(切手不可)

締切 8月31日(消印有効)

投句先 〒097-0022 稚内市中央4-9-8
高津戸方 宗谷川柳社事務局

川柳カード・創刊記念大会

日 時 9月15日(土) 13時～

会 場 たかつガーデン8階

(TEL 06-6768-3911)

近鉄上本町または地下鉄谷町九丁目下車

開 場 13時(ご昼食は各自でお済ませください)

出句締切 13時30分 開 会 13時40分

第1部 対談 池田 澄子×樋口由紀子

第2部 句会 各題2句・欠席投句拝辞

題と選者 「脈」 柿 陽子 選

「すれすれ」 平賀 胤壽 選

「ピーマン」 広瀬ちえみ 選

「割る」 草地 豊子 選

「品」 小島 蘭幸 選

事前投句「カード」 小池 正博 選

(8月25日必着・出席者に限る)

投句先 〒675-0011 加古川市野口町北
野1314-24 斉藤 幸男 宛

会 費 2000円

主 催 「川柳カード」

発行人・樋口由紀子 編集人・小池正博

文化祭 吹田市民川柳大会

日 時 9月23日(日) 午前11時開場

場 所 吹田市文化会館

メリアシアター3階

宿 題 各題2句 12時15分締切

「勇 気」 中岡千代美 選

「連 想 吟」 田中 螢柳 選

「浮 く」 湯澤冬扇坊 選

「やる気」 長江 時子 選

「乱」 池 森子 選

「や が て」 西 美和子 選

会 費 1500円

(秀吟賞・参加賞・軽食・呈)

連絡先 吹田川柳会事務局 中川 隆允

吹田市津雲台3-4 A22-704

TEL 06-6833-0744

主 催 吹田市教育委員会・吹田市文化
団体協議会・吹田川柳会

神戸川柳祭り'12

第35回 神戸川柳大会

日 時 10月13日(土) 午前10時開場

場 所 兵庫県民会館 9F 大ホール

神戸市中央区山手通4-16-3

TEL 078-321-2131

兼 題 (各題2句・欠席投句拝辞)

「救 う」 泉 桂恵 選

「味 方」 長川 哲夫 選

「揃 う」 遠藤 哲平 選

「窓」 西出 楓楽 選

「舞 う」 赤井 花城 選

「首」 平山 繁夫 選

「雑 詠」 濱邊稲佐嶺 選

出句締切 11時30分 開 会 13時

会 費 2000円

主 催 神 戸 川 柳 会

第63回 西宮市民文化祭

川 柳 大 会

日 時 10月14日(日) 12時開場

場 所 西宮市民会館(市役所南隣)4階

会 費 1500円(呈 作品集・小品)

懇親会 4500円(当日受付)

兼 題 各題2句・欠席投句拝辞

「ゆらゆら」 長島 敏子 選

「モダン」 上嶋 幸雀 選

「美 しい」 板野 美子 選

「問 う」 大森 一甲 選

「家 族」 山口 光久 選

「茶」 田中 新一 選

「宇 宙」 村上 氷筆 選

連絡先 〒662-0021 西宮市神原6-17

外村 良子 TEL 0798-71-1131

共 催 西宮北口川柳会・西宮川柳会
瓦木川柳勉強会・甲子園川柳社

編集後記

★親しさはねぶたの顔で
お出迎え 薫風

★今号、目次下は古川柳の研究では第一人者である清博美氏。川柳雑誌・川柳塔との長いお付き合いをしたためくださった。柳多留には謎々のような句も多く、読み解くには知識が要る。毎号「俳風柳多留研究」から勉強させて頂いている。

★七月一日、川柳塔みちのく二十五周年記念句会に参加。療養中の波多野五楽庵氏もお顔を見せてくださった。結社やグループの垣根を越えて旧交を温めた。お互いの存在を知りながら、今回初めて実に二十年の時空を超えて名乗り合った人も、川柳をしていて良かったと、感激のひとつとき。

傘下のグループの柳誌が
たくさん送られてくる。
そんな中の一冊、「川柳
いずも」の題字は路郎師。
創立八十六年という。七
月号に第十八回川柳塔ま
つりの案内が掲載されて
いる。「昨年同様、大き
なバスでゆつくり行きま
しょう」と、参加者を募っ
ている。予定では朝五時
半、出雲市駅北口発との
こと。塔まつりへの温か
い支援がうれしい。

★佐賀県吉野ケ里の番傘
同人・真島清弘・美智子
さんは川柳一家。四月に
お目にかかった時、せっ
かく卑弥呼の里に住んで
いるのだから、女性ばか
りの会を作ってはどうか
と進言した。七月二十九
日に「第一回卑弥呼の里
女流川柳大会」の案内が
届いた。「男性はご遠慮
下さい」がおもしろい。

★路郎賞・川柳塔賞の規
定が今回から少し変わ
ります。詳細は一〇四頁。
巻末に応募用紙を添付し
てあります。昨年、九月
号から本年八月号までに
川柳塔・水煙抄に発表さ
れた作品から、五句を選
んで応募下さい。締切
は八月十日必着。(朱)

◇因みにその後の7ヶ月
のものを使用するケース
が目立ちます。「川柳塔」
間の実績は、残念ながら
15日を過ぎて到着するも
のが後を絶ちません。先
月の14件(同人10件、誌
友4件)あり、最も遅かつ
たのは28日着でした。郵
便事情によることもあり
ますので、ギリギリでは
なく1日くらい余裕を
みて発送していただく
様、重ねてお願いします。
◇次に用紙の件ですが、
相変わらず専用紙以外
は前日必着。

ひとこと

老後の楽しみ

俳諧は老境に入った者に適した芸術という性格を持つている。芭蕉自身は俳諧を「老後の楽しみ」とのべています。芭蕉は二十歳のころから創作活動を始めていたが、優れた作品はすべて初老期以後のものであり、老年の心で感受し、思索したことを書きとめているのを見てわかる。

かつての日本人は歳を重ねると、あるべき心に近づくことを願い、死を迎える心の支度に意を用いたという。
近代の日本人が、敬愛と憧憬の対象とした人物画の双璧は、芭蕉行脚図と良寛遊戯図である。また蕉風俳諧の理念であるさび・しおりなど閑寂をしい、平淡を想うのは私ども老年の性情で、老いを受容している者の心と耳に聞こえてきます。

(井上 桂作)

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成23年9月号から平成24年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞——同人は川柳塔欄から応募
川柳塔賞——誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日(金)必着のこと
④ P 104・P 105を参照して下さい。

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(10月号)地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「限界」(8月15日締切)

10月号発表

奥田みつ子 選 —— 共選 —— 森山 盛桜 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓
雅
号

地名

市都
道府
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句） 小島蘭幸選
水煙抄（8句） 西出楓楽選
愛染帖（3句） 新家完司選
檸檬抄「限界」（2句） 奥山盛桜共選
（森田みつ子）
一路集（3句） 小川集一選
「平札束」 小川集一選
「おっとり」 関本かつ子選
初歩教室「ぼろぼろ」（3句） 鈴木公弘担当

11月号
檸檬抄「組む」
一路集「芋」「週末」
「きびきび」
初歩教室「コーヒー」

本社8月句会

とき 8月7日（火）13時開場・14時締切
開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし「金にまつわるおもしろ川柳」 新家完司
兼題「勘」 山岡富美子選
「きつと」 松尾美智代選
「暖味」 都倉求芽選
「保存」 江島谷勝弘選
「気取る」 鶴田遠野選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円（各題2句以内）（切手可）

本社9月句会
7日（金）午後1時から
兼題「要」「ドキドキ」「浪費」
「髪」「集う」

第31年度 夜市川柳募集

第3回「夜」鈴木公弘選
ハガキに3句 8月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円（送料84円）

半年分 五千円（送料共）
一年分 九千八百円（同）

二〇二二年平成三十四年八月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話（〇六六七九）三三九〇番
振替〇〇九八〇四二九八四七九番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの

つぎごま



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

bikenart@ea.mbn.or.jp